

## 基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	学部の学科の設置									
フリガナ設置者	カクカホジシ ヨシマシヨカクタイ 学校法人 広島女学院									
フリガナ大学の名称	ヒロシマシヨカクタイダガク 広島女学院大学 (Hiroshima Jogakuin University)									
大学本部の位置	広島市東区牛田東四丁目13番1号									
大学の目的	本学は、基督教主義に基づいて教育を施し、女子の霊性、知性、徳性の円満な発達をはかり、専門的な学術の修得を努めさせると共に、広い教養と高い人格を育成することを目的とする。									
新設学部等の目的	国際教養学部は、専門的知識・技術、他の専門との対話を通して修得される幅広い見識、国際的な視野、問題発見・解決能力、批判的思考力、判断力を含む幅広い教養の獲得と、建学の精神である基督教主義に基づく人間愛にあふれる豊かな人間性の涵養を目的とする。より具体的には、国際化・情報化時代に対応できる言語運用等の能力・技術をもった人材、社会の様々な場において課題を総合的に調査・考究し、解決する能力をもった人材、異文化間における真のコミュニケーション能力、および豊かさをもって人間形成を支援する能力を持った人材の養成を目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	国際教養学部 (Faculty of Liberal Arts) 国際教養学科 (Department of Liberal Arts) 計	4年	240人	年次 - 人	960人	学士 (国際教養学)	平成24年4月 第1年次	広島市東区牛田東四丁目13番1号		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	1. 学生募集の停止 (※平成24年4月学生募集停止) 文学部 (廃止) 日本語日本文学科 (△ 70) 英米言語文化学科 (△100) 幼児教育心理学科 (△ 90) 生活科学部 (廃止) 生活デザイン・情報学科 (△140) 管理栄養学科 (△ 70)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数					卒業要件単位数			
	国際教養学部 国際教養学科	講義	演習	実験・実習	計	124 単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設	国際教養学部 国際教養学科		教授	准教授	講師	助教	計	助手	135
				(17)	(14)	(2)	(0)	(33)	(0)	(135)
		計		(17)	(14)	(2)	(0)	(33)	(0)	(135)
	既設	該当なし		-	-	-	-	-	-	-
				(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
計		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		
合計			17	14	2	0	33	0	135	
			(17)	(14)	(2)	(0)	(33)	(0)	(135)	
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計			
	事務職員		33人		12人		45人			
			(36)		(11)		(47)			
	技術職員		2人		2人		4人			
			(2)		(2)		(4)			
図書館専門職員		4人		3人		7人				
		(2)		(5)		(7)				
その他の職員		0人		0人		0人				
		(0)		(0)		(0)				
計			39人		17人		56人			
			(40)		(18)		(58)			

校地等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	21,539㎡	㎡	㎡	21,539㎡					
	運 動 場 用 地	47,958㎡	㎡	㎡	47,958㎡					
	小 計	69,497㎡	㎡	㎡	69,497㎡					
	そ の 他	132,197㎡	㎡	㎡	132,197㎡					
	合 計	201,694㎡	㎡	㎡	201,694㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		40,220㎡ ( 40,220㎡)	㎡ ( ㎡)	㎡ ( ㎡)	40,220㎡ ( 40,220㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	27室	24室	23室	7室 (補助職員 3人)	1室 (補助職員 1人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数						
		国際教養学部 国際教養学科		35 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	国際教養学部	186,098 [39,081] (163,138 [38,745])	2,209 [247] (2,110 [244])	[ ] ( [ ] )	1,503 ( 839 )	( )	( )			
	人間生活学部	101,120 [21,235] (85,308 [12,418])	3,604 [403] (3,443 [398])	[ ] ( [ ] )	37 ( 21 )	( )	( )			
	計	287,218 [60,316] (248,446 [51,163])	5,813 [650] (5,553 [642])	8,524 [8,524] (8,500 [8,500])	1,540 ( 860 )	98 ( 88 )	( )			
図書館		面積	閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体			
		5,905㎡	381席		442,500冊					
体育館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要				大学全体			
		908㎡	テニスコート3面、弓道場							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次		
	経費の見積り	教員1人当り研究費等		462千円	462千円	462千円	462千円	-千円	-千円	
		共同研究費等		0千円	0千円	0千円	0千円	-千円	-千円	
		図書購入費	35,000千円	35,000千円	30,000千円	30,000千円	30,000千円	-千円	-千円	
	設備購入費	208,000千円	60,000千円	40,000千円	40,000千円	40,000千円	-千円	-千円		
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	1,310千円	1,060千円	1,060千円	1,060千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学経常費補助金、利息収入、雑収入								
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称									
	学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所 在 地
	文学部	日本語日本文学 学科	4年	70人	-人	280人	学士(文学)	1.06倍	平成12年	広島市東区牛田東 四丁目13番1号
	文学部	英米言語文化 学科	4年	100人	-	400人	学士(文学)	0.83	平成12年	
	文学部	幼児教育心理 学科	4年	90人	-	360人	学士(文学)幼 児教育心理学	1.04	平成19年	
	生活科学部	生活デザ イン・情報学科	4年	140人	-	560人	学士(家政学)	0.95	平成16年	
生活科学部	管理栄養 学科	4年	70人	-	280人	学士(家政学)	1.03	平成16年		
附属施設の概要										

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積り及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「-」又は「該当なし」と記入すること。

教育課程等の概要																
(国際教養学部 国際教養学科)																
区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通基礎科目 (C1)	キリスト教学入門Ⅰ	1前	2			○				1					兼2	
	キリスト教学入門Ⅱ	1後	2			○				1					兼2	
	キャリアプランニング (国際教養)	1前	2			○				2	1					
	初年次セミナー	1前	2			○				4	5	2			兼12	
	日本語表現技法	1前	2			○									兼6	
	情報リテラシⅠ	1前	2			○									兼4	
	情報リテラシⅡ	1後	2			○					1				兼4	
	基礎英語Ⅰ	1前	1					○							兼3	
	基礎英語Ⅱ	1後	1					○							兼3	
	基礎英語Ⅲ	2前	1					○							兼3	
	基礎英語Ⅳ	2後	1					○							兼3	
小計 (11科目)		—	18	0	0	—			6	7	2	0	0	兼28	—	
共通教養科目 (C2)	総合知	環境と人間	2後	2		○				1					兼1	
		現代女性と身体	2後	2		○				1						
		現代ジェンダー考	2後	2		○				1					隔年	
		ヒロシマ	2前	2		○				1					隔年	
		ボランティア論Ⅰ	2前	2		○				1						
		ボランティア論Ⅱ	2後	2		○				1						
		キリスト教の時間Ⅰ	2前	1		○									兼1	
		キリスト教の時間Ⅱ	2後	1		○									兼1	
		特別講義Ⅰ	2前・後	2		○				1						集中
		特別講義Ⅱ	2前・後	2		○										集中
		特別セミナーⅠ	2前・後	2		○				1						集中
	特別セミナーⅡ	2前・後	2		○										集中	
	人文科学知	教育学入門	1前	2		○									兼1	
		心理学入門	1前	2		○									兼1	
		哲学入門	1後	2		○									兼1	
		キリスト教学Ⅰ	2前	2		○					1					
		キリスト教学Ⅱ	2後	2		○					1					
		生命倫理	1後	2		○									兼1	
		アメリカの文化と歴史	2後	2		○				1						
		イギリスの文化と歴史	2前	2		○					1					
		ヨーロッパと文化	1前	2		○									兼1	
		歴史学のみかたⅠ	1前	2		○					1					
		歴史学のみかたⅡ	1後	2		○									兼1	
		歴史学のみかたⅢ	2前	2		○									兼1	
		色彩情報論	1後	2		○					1					
音楽の世界		1後	2		○									兼1		
日本美術史	1前	2		○					1							
西洋美術史	1後	2		○				1								
American Culture and History	1前	2				○							兼1			
British Culture and History	1前	2				○							兼1			
European Culture and History	1前	2				○							兼1			
American Literature and Thought	2前	2				○							兼1			
Asian and African Literature and Thought	2前	2				○							兼1			
European Literature and Thought	2後	2				○							兼1			
日本文学入門	1前	2			○								兼1			
アメリカ文学史	2前	2			○			1								
イギリス文学史	2後	2			○				1							
日本語学の視点	1前	2			○			1								
英語学の視点	1前	2			○				1							
比較言語	1後	2			○				1							
社会科学知	女性学入門	1後	2		○				1							
	平和学入門	1前	2		○				1							
	社会学入門	1前	2		○									兼1		
	現代社会と人権	1前	2		○									兼1		
	地理学概論	1前	2		○				1							
	開発と文化	2前	2		○									兼1		
	民俗学	2後	2		○									兼1		
	経済学入門	1前	2		○									兼1		
	経営学総論	1前	2		○				1							
	Area Studies 1 (America)	1後	2				○							兼1		
Area Studies 2 (Asia and Africa)	1後	2				○							兼1			
Area Studies 3 (Europe)	1後	2				○							兼1			

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
社会科学知	金融論	3前		2		○			1								
	国際金融論	3後		2		○			1							兼1	
	経理実務	3前		2		○											
	ビジネス実務演習Ⅰ	2前		2			○			1							
	プレゼンテーション概論	1後		2			○			1							
	インターンシップⅠ	2前		2			○		1		1						
	Social Anthropology	2後		2				○								兼1	
	Social Psychology	2後		2				○								兼1	
	World Economy	2前		2				○								兼1	
	日本国憲法	1後		2				○				1					
	ビジネス法務	3後		2			○									兼1	
	公共性と権力	1後		2			○									兼1	
	政治学Ⅰ	2前		2			○									兼1	
	政治学Ⅱ (含国際政治学)	2後		2			○									兼1	
	国際関係論	2前		2			○									兼1	
	ポストコロニアリズム/ナショナリズム	2後		2			○									兼1	
	グローバル化と地域	2後		2			○									兼1	
	自然科学知	数学入門	1後		2		○			1							
		生活の中の数学	1前		2		○			1							
		物理学入門	1後		2		○				1						
		情報科学入門	1前		2		○				1						
		統計学入門	1後		2		○			1							
		情報管理論 (含情報処理)	2前		2		○				1						
		家庭電気・機械	2前		2		○					1					
		バイオサイエンス入門	1後		2		○										兼1
		自然と環境	1前		2		○										兼1
		生物学入門	1前		2		○										兼1
		健康科学 (含栄養学概論)	1後		2		○										兼1
		衛生と安全	1後		2		○										兼2
		Computer Science	1前		2			○									兼1
		Nature and Environment	1前		2			○	○								兼1
		Health Science	1後		2				○								兼1
化学		1前		2			○									兼1	
科学と技術		2後		2			○			1						兼1	
都市と環境		2前		2			○									兼1	
生活空間デザイン論		1前		2			○									兼1	
感性デザイン論Ⅰ (ポップカルチャー)		1・2前		2			○									兼1	
感性デザイン論Ⅱ (ファッション文化史)	1・2後		2			○									兼1		
生活とファッション	1・2後		2			○									兼1		
食品加工・商品学	2前		2			○									兼1		
調理学概論 (含厨房機器・設備)	2後		2			○									兼1		
言語知	外国語 (初級英語Ⅰ)	1前		1				○			1					兼4	
	外国語 (初級英語Ⅱ)	1後		1				○			1					兼4	
	外国語 (初級独語Ⅰ)	1前		1				○								兼1	
	外国語 (初級独語Ⅱ)	1後		1				○								兼1	
	外国語 (初級仏語Ⅰ)	1前		1				○		1							
	外国語 (初級仏語Ⅱ)	1後		1				○		1							
	外国語 (初級中国語Ⅰ)	1前		1				○								兼1	
	外国語 (初級中国語Ⅱ)	1後		1				○								兼1	
	外国語 (初級韓国語Ⅰ)	1前		1				○								兼1	
	外国語 (初級韓国語Ⅱ)	1後		1				○								兼1	
	外国語 (中級英語Ⅰ)	2前		1				○			1					兼4	
	外国語 (中級英語Ⅱ)	2後		1				○			1					兼4	
	外国語 (中級中国語Ⅰ)	2前		1				○								兼1	
	外国語 (中級中国語Ⅱ)	2後		1				○								兼1	
	外国語 (中級韓国語Ⅰ)	2前		1				○								兼1	
	外国語 (中級韓国語Ⅱ)	2後		1				○								兼1	
	外国語 (初級日本語Ⅰ)	1前		1				○			1						
外国語 (初級日本語Ⅱ)	1後		1				○			1							
外国語 (中級日本語Ⅰ)	2前		1				○								兼1		
外国語 (中級日本語Ⅱ)	2後		1				○								兼1		
スポーツ科学知	スポーツ科学Ⅰ	1前		1			○									兼3	
	スポーツ科学Ⅱ	1後		1				○								兼3	
	スポーツ科学Ⅲ (課外活動等)	2前		1				○								兼1	
	スポーツ科学Ⅳ (スキー・スケート等)	2後		1				○								兼1	
	スポーツ科学Ⅴ (水泳等)	2前		1				○								兼1	
	スポーツ科学Ⅵ (フィットネス)	2後		1				○								兼1	
小計 (119科目)	-	0	210	0	-	-	-	9	11	1	0	0	兼52	-			

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目( C3 )	英語系 文学分野	Introduction to Global Studies	1後	2		○			2	1						オムニバス
		Language Diversity & Society	3・4前	2		○				1						
		English in the World	3・4後	2		○				1						
		Language & Culture through the Internet	3・4前	2			○								兼1	
		Language & Culture through Film	3・4後	2			○								兼1	
		British Society & Culture	2前	2			○				1					
		Issues in the Modern World 1	3・4前	2				○			1					
		Issues in the Modern World 2	3・4後	2				○			1					
		American Society & Culture	2前	2				○							兼1	
		Intercultural Communication	2後	2				○							兼1	
		Developing Global Thinking	3・4前	2				○			1					
		Religions & the World	3・4前	2				○			1					
		Women & the World	3・4後	2				○			1					
		Environment & Society	3・4前	2				○			1					
		Literature of the Environment	3・4後	2				○			1					
		Culture Studies	2前	2					○						兼1	
		Global Citizenship	2後	2					○						兼1	
		World Literature	3・4前	2				○			1					
		Emerging Literatures	3・4後	2				○			1					
		Issues in Japan Studies	2・3・4後	2				○							兼1	
	Business English	3・4後	2					○						兼1		
	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship I	2・3前	2					○		1						
	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship II	2・3後	2						○	1						
	英米文化	20世紀アメリカ文学研究	3・4前	2			○			1					兼1	隔年
		19世紀アメリカ文学研究	3・4後	2			○									
		アメリカの夢考察	2前	2			○			1						
		アメリカ文学文化の比較的アプローチ	2後	2			○			1						
		20世紀アメリカン・スタディーズ	3・4後	2			○			1					隔年	
		アメリカ黒人の歴史と文化	3・4前	2			○			1					隔年	
		ユダヤ系アメリカ人の歴史と文化	3・4後	2			○			1					隔年	
		アメリカ文化とジェンダー	3・4前	2			○			1						
		カルチュラル・スタディーズ	3・4前	2			○				1					
		イギリス風物誌	2前	2			○				1					
		児童文学とファンタジー	2後	2			○				1					
		イギリス文学文化の比較的アプローチ	2後	2			○				1					
		レズビアン・ゲイ・スタディーズ	3・4後	2			○				1					
		イギリス演劇と社会	3・4前	2			○				1				隔年	
		現代の批評と理論	3・4後	2			○				1					
		イギリスの女性	3・4前	2			○				1					
		イギリス短編小説	3・4後	2			○				1					
		映像と絵画から見るイギリス文学	2前	2			○				1					
イギリスの都市と田園		3・4後	2			○				1				隔年		
現代のイギリス文学		3・4前	2			○				1				隔年		
英米詩の世界	3・4後	2			○				1				隔年			
19世紀のイギリス文学	3・4前	2			○				1							
英米文学文化の学び方	1後	2			○				1							
海外英語研修 I	2前	2			○				1							
海外英語研修 II	2後	4					○		1							
国内英語研修	2後	4					○		1							
英語教育	言語学研究 I (音声学・音韻論・形態論)	3前	2			○				1						
	言語学研究 II (統語論・意味論・語用論)	3後	2			○				1						
	現代英語 I (新語や外来語の特徴)	3前	2			○				1						
	現代英語 II (英語の文体)	3後	2			○				1						
	比較言語学 I (英語変種の特徴:英・米・豪・加, etc.)	2前	2			○							兼1			
	比較言語学 II (日本語と英語の対照)	2後	2			○				1						
	比較文化学 I (英語使用圏の文化の特徴:英・米・豪・加, etc.)	2前	2			○							兼1			
	比較文化学 II (日本文化と英米文化の対照)	2後	2			○				1						
	第二言語習得研究(外国語としての英語の学び)	2前	2			○							兼1			
	言語教育政策論(海外の外国語教育)	2後	2			○							兼1			
	幼児英語研究(指導法・教材開発研究)	3後	2			○							兼1			
	小学校英語研究 I (教材開発研究)	3前	2			○							兼1			
	小学校英語研究 II (指導法研究)	3後	2			○							兼1			
	中学校英語研究(教科書分析)	3前	2			○				1						
高校英語研究(教科書分析)	3前	2			○				1							
英語科授業実践研究 I (カリキュラム論・授業論・授業観察)	2前	2			○				1							
英語科授業実践研究 II (英語指導インターンシップ)	2後	2					○		1							

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
専門科目(Ｃ3)	英語系	英語教育	生涯学習英語研究(教材開発研究、ICTを含む)	3後	2		○				1								
			教室英語(Classroom Englishを運用できる英会話力の養成)	2後	2			○			1								
			外国語教授法(指導原理)	3前	2			○			1								
			外国語評価論(教育研究調査法)	3後	2			○			1						兼2	オムニバス	
			英語教員養成研修Ⅰ	3前	2			○			1	2						オムニバス	
			英語教員養成研修Ⅱ	3後	2			○			1	2						オムニバス	
			海外英語教育インターンシップ	3前	4					○	1								
			英語科教育入門	1後	2					○	1								
			英語学Ⅰ(音声学:発音の理論と実践訓練)	2前	2					○		1							
			英語学Ⅱ(音韻論・形態論:語の仕組みと発音)	2後	2					○		1							
			英語学Ⅲ(統語論:文の仕組み)	2前	2					○		1							
			英語学Ⅳ(意味論・語用論:ことばの意味と使い方)	2後	2					○		1							
			通訳	通訳の理論と実践1	2前	2					○		1						
				通訳の理論と実践2	2後	2					○		1						
	通訳の理論と実践3	3前		2					○		1								
	通訳の理論と実践4	3後		2					○		1								
	通訳の理論と実践5	4前		2					○		1								
	通訳の理論と実践6	4後		2					○		1								
	国語教育	国語科教育入門	1後	2					○		1								
		国語教材研究Ⅰ(古文・漢文・現代文)	3前	2					○							兼1			
		国語教材研究Ⅱ(日本語文法・日本語の語彙・日本語の表記)	3後	2					○							兼1			
		国語科授業実践研究Ⅰ(カリキュラム論・授業論・授業観察)	2前	2					○		1								
		国語科授業実践研究Ⅱ(国語科音声指導法、国語科文章指導法)	2後	2					○		1								
		中学校国語研究(教科書分析)	3前	2					○							兼1			
		高等学校国語研究(教科書分析)	3後	2					○							兼1			
		国語教員養成研修Ⅰ(教員採用試験対策講座 一次試験対策)	3前	2					○							兼1			
		国語教員養成研修Ⅱ(教員採用試験対策講座 二次試験対策)	3後	2					○							兼1			
		日本語文章表現法	3前	2						○	1								
		書道Ⅰ	4前	2							○					兼1			
		書道Ⅱ	4後	2							○					兼1			
		日本語系	日本語・日本語教育	日本語学概論Ⅰ(音声言語を含む)	2前	2				○		1							
	日本語学概論Ⅱ(音声言語を含む)			2後	2					○		1							
	日本語教育概論Ⅰ(コースデザイン他)			2前	2					○							兼1		
日本語教育概論Ⅱ(四技能教育)	2後			2					○							兼1			
日本語音声学	2前			2					○							兼1			
現代日本語基礎文法	2後			2					○							兼1			
古典日本語基礎文法	2前			2					○		1								
日本語の文字と語彙	1後			2					○		1								
日本語話し言葉講座Ⅰ	2前			2												兼1			
日本語話し言葉講座Ⅱ	2後			2												兼1			
日本語フィールドワークⅠ(日本語の方言)	2前			2							1								
日本語フィールドワークⅡ(郷土資料調査)	2後			2							1								
認知言語学概論	2前			2					○		1								
心と言語表現	2後			2					○		1								
社会言語学	2前			2					○			1							
言語とコミュニケーション	2後			2					○			1							
現代社会言語学の諸問題	2前			2					○		1								
比較言語コミュニケーション研究	2後			2					○		1								
比較言語学Ⅲ(アジアの言語)	2前			2					○		1								
比較言語学Ⅳ(ヨーロッパの言語)	2後			2					○		1								
言語の獲得	2前			2					○		1								
談話の構造	2後			2					○		1								
日本文学・日本文化	昔話・童話の世界			1後	2					○		1							
	日本文学概論Ⅰ	2前	2					○							兼1				
	日本文学概論Ⅱ	2後	2					○		1									
	漢文学概論Ⅰ	2前	2					○							兼1				
	漢文学概論Ⅱ	2後	2					○							兼1				
	日本古典文学史	2後	2					○							兼1				
	日本近現代文学史	2前	2					○			1								
	日本近代文学の世界	2前	2					○			1								
	日本現代文学の世界	2後	2					○		1									
	女流文学の世界Ⅰ(古典編)	2前	2					○							兼1				
	女流文学の世界Ⅱ(近現代編)	2後	2					○											
	比較文学	2前	2					○		1									
キリスト教文学	3前	2					○												

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
日本語系	日本文化史Ⅰ	2前		2		○									兼1	
	日本文化史Ⅱ	2後		2		○									兼1	
	日本王朝文化の世界	2前		2		○									兼1	
	日本中世文化の世界	2後		2		○									兼1	
	日本江戸文化の世界	2前		2		○			1							
	変体仮名入門	2後		2		○									兼1	
	文芸創作	2後		2		○			1							
	Traditional & Contemporary Japan Studies	2前		2		○			2							
	ジャーナリズムの研究	3前		2		○										兼1
	演劇論	3後		2		○			1							兼1
日本の芸道	3前		2		○										兼1	
フィールドワーク文学地踏査	2前		2			○					1					
宗教・思想	宗教学Ⅰ (宗教学の方法論)	2前		2		○			1							
	宗教学Ⅱ (仏教・神道・ユダヤ教・イスラム教・新宗教)	2後		2		○			1							
	倫理学Ⅰ (基礎倫理学)	2前		2		○									兼1	
	倫理学Ⅱ (応用倫理学)	2後		2		○									兼1	
	哲学Ⅰ (東洋・古代・中世)	2前		2		○									兼1	
	哲学Ⅱ (近代・現代)	2後		2		○									兼1	
	思想史Ⅰ (科学史・社会史)	2前		2		○									兼1	
	思想史Ⅱ (政治史・経済史)	2後		2		○									兼1	
	哲学・神学・宗教学講読Ⅰ (英書講読)	2前		2		○									兼1	
	哲学・神学・宗教学講読Ⅱ (英書講読)	2後		2		○									兼1	
キリスト教図像学	2前		2		○			1							兼1	
アジア・アフリカ研究	アジア・アフリカ学への招待	1後		2		○			1							
	アジア・アフリカ学演習Ⅰ (文献講読)	2前		2			○		1							
	アジア・アフリカ学演習Ⅱ (文献講読)	2後		2			○		1							
	上級韓国語Ⅰ	3前		2		○									兼1	
	上級韓国語Ⅱ	3後		2		○									兼1	
	上級中国語Ⅰ	3前		2		○									兼1	
	上級中国語Ⅱ	3後		2		○									兼1	
	現代アジア社会論	2後		2		○			1							
	現代アフリカ社会論	2後		2		○									兼1	
	日本通交・通商史	2前		2		○									兼1	
外国史Ⅰ (アジア史)	2前		2		○									兼1		
外国史Ⅱ (アフリカ史)	2後		2		○									兼1		
AAフィールドワークⅠ	2前		2		○			1								
AAフィールドワークⅡ	2後		2			○		1								
経済学Ⅱ (含国際経済学)	2前		2		○			1								
開発経済学	2後		2		○			1								
公共政策	公共政策概論	1後		2		○					1					
	公共政策演習Ⅰ (文献講読)	2前		2			○				1					
	公共政策演習Ⅱ (文献講読)	2後		2			○		1							
	地方自治論	2後		2		○									兼1	
	都市計画論	2後		2		○					1					
	行政法	2後		2		○					1					
	行政学	2前		2		○					1					
	比較法学 (含国際法)	2前		2		○					1					
	経済学Ⅰ (ミクロ・マクロ)	2前		2		○			1							
	現代社会論 (男女共同参画社会)	2後		2		○			1							
ビジネス情報系	ビジネス実務総論Ⅰ	1後		2		○			1							
	ビジネス実務総論Ⅱ	2前		2		○				1						
	ビジネス実務演習Ⅱ	2後		2			○		1							
	プレゼンテーション演習Ⅰ (アサーティブ・コミュニケーション論演習)	2前		2			○		1							
	プレゼンテーション演習Ⅱ	2後		2			○								兼1	
	情報総合プレゼンテーション演習	3前		2			○			1						
	ビジネスデザインⅠ	2後		2		○			1							
	ビジネスデザインⅡ	3前		2			○		1							
	マーケティング論	2前		2		○				1						
	ビジネス英語	2後		2		○			1							
	広島地域ビジネス論	2後		2		○			1							
	インターンシップⅡ	3前		2			○		1		1					
	アメリカ・ビジネス研修Ⅰ	3前		2		○			1							
	アメリカ・ビジネス研修Ⅱ	3後		2			○		1							
	女性労働論	3後		2		○			1							
市民社会とNGO・NPO	3前		2		○									兼1		
ファイナンシャル・プランニングⅠ	2前		2		○									兼1		
ファイナンシャル・プランニングⅡ	2後		2		○									兼1		
情報文化論	3後		2		○									兼1		

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
専 門 科 目 (C3)	ビジネス情報系 情報科学	生活情報論	3前	2			○			1							兼1		
		情報社会論	2後	2			○										兼1		
		情報産業論	3前	2			○												
		情報倫理	1後	2			○				1								
		情報数学	2前	2			○			1									
		情報科学とテクノロジー	3前	2					○			1							
		プログラミングⅠ(基礎)	2・3前	2					○			1							
		プログラミングⅡ(応用)	2・3後	2					○		1								
		情報と問題解決	2後	2					○		1								
		データ解析	2後	2					○		1								
		オペレーティングシステム入門	1後	2					○		1								
		データベース概論	2・3後	2					○		1								
		システム設計	2・3後	2					○			1							
		ネットワーク概論	3前	2					○									兼1	
		ネットワーク演習	3後	2					○									兼1	
		コンピュータグラフィックス	2・3前	2					○			1							
		画像情報処理	2・3後	2					○			1							
		アニメーション作成	3前	2					○			1							
	Webデザイン演習	1後	2					○			1								
	情報社会の職業観・職業倫理	3後	2				○			1									
	情報総合演習(フィールドワーク含む)	3前	2				○			1	2						オムニバス		
	ITサポート演習	2前	2				○			1	2						オムニバス		
	家 政 学 分 野	都市文化系	都市文化入門	1後	2			○			1								
			日本史	2前	2			○				1							
			外国史Ⅲ	2前	2			○				1							
			外国史Ⅳ	2後	2			○										兼1	
			芸術史研究	2前	2			○				1							
			映画史	2後	2			○										兼1	
			マンガ・アニメーション研究	2前	2			○										兼1	
			現代美術論	2後	2			○										兼1	
			芸術文化フィールドワーク	2前	4			○			1	1							
			アート・ワークショップ実習	2後	1			○											兼1
			世界遺産学	2前	2			○				2	1						
			都市と文化財	2後	2			○					1						
			地域と食文化	2後	2			○				1							
			コミュニティとまちづくり	2前	2			○											兼1
			文化プロデュース論	2前	2			○											兼1
		アート・マネジメント実習	2後	1			○				1	1							
		文化系	社会教育演習Ⅰ	3前	1			○											兼1
			社会教育演習Ⅱ	3後	1			○											兼1
			コミュニティ論概説	2後	2			○				1							
			西洋建築史	2後	2			○				1							
日本建築史(含住居史)			2前	2			○										兼1		
観光概論			2前	2			○										兼1		
世界の舞台			2前	2			○										兼1		
舞台衣装			2後	2			○										兼1		
演劇実技Ⅰ			2前	2			○										兼1		
演劇実技Ⅱ			2後	2			○										兼1		
演劇実技Ⅲ			3前	2			○										兼1		
演劇実技Ⅳ	3後		2			○										兼1			
環 境 系	環境学	陶芸論	2前	2		○											兼1		
		陶芸技術Ⅰ	2前	2			○										兼1		
		陶芸技術Ⅱ	2後	2			○										兼1		
		陶芸技術Ⅲ	3前	2			○										兼1		
		陶芸技術Ⅳ	3後	2			○										兼1		
		臨床美術Ⅰ	3前	2			○										兼1		
		臨床美術Ⅱ	3後	2			○										兼1		
		環境学概論	1後	2			○				1							兼1	
		環境科学概説	2前	2			○											兼1	
		植物バイオテクノロジー	2後	2			○												
		人文地理学(含地誌)	2前	2			○				1								
		環境経済学	2後	2			○				1								
環境保全学	2後	2			○											兼1			
自然地理学	2前	2			○											兼1			
環境教育概論	2前	2			○											兼1			
比較環境政策	2前	2			○						1								
比較環境史	2後	2			○				1										
比較環境法	2前	2			○						1					兼1			
地域資源管理論	2後	2			○					1									
エコツーリズム実習	2前	2			○											兼1			



区分	授業科目の名称			配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門科目(C3)	家政学分野	環境系	環境学	環境計画実習	2後	2				○							兼1	私コホス		
				環境学基礎演習	2前	2				○			1						兼1	
				自然環境学実験	2前	2						○								兼1
				環境科学演習	2後	2						○								兼1
				環境フィールドワークⅠ	2前	2						○		1						兼1
				環境フィールドワークⅡ	2後	2						○		1						兼1
	動態地誌学	2前	2				○				1					兼1				
	その他	平和学	平和と人権	2前	2				○			1						兼1 兼1		
			平和学フィールドワークⅠ(市内・国内)	2前	2					○		1								
			平和学フィールドワークⅡ(平和運動論演習)	2後	2					○		1								
			平和学特別講義Ⅰ(戦争と人間)	2前	2				○			1								
			平和学特別講義Ⅱ(核と人間)	2後	2				○			1								
			平和学講義Ⅰ(Summer Cloud)	2前	2					○										
			平和学講義Ⅱ(SADAKO)	2後	2					○										
			Hiroshima StudiesⅠ(Abolition of Nuclear Weapons)	2前	2				○			2								
			Hiroshima StudiesⅡ(Peace Studies)	2前	2					○		2								
			Hiroshima StudiesⅢ(Research)	2後	2					○		1								
			地球市民論	1後	2					○		1								
			女性の政治参画	3前	2					○		1								
			フェミニズムの思想	2前	2					○										
キリスト教と女性			2後	2					○											
セミナー	オープンセミナー	1前	2					○		12	11	2				兼2	集中			
	卒業研究プレセミナーⅠ	3前	2					○		12	11	2				兼2				
	卒業研究プレセミナーⅡ	3後	2					○		12	11	2				兼2				
	卒業研究セミナーⅠ	4前	2					○		12	11	2				兼2				
	卒業研究セミナーⅡ	4後	2					○		12	11	2				兼2				
	卒業論文	4後	4					○		12	11	2				兼2				
小計(296科目)				—	12	586	0	—	—	17	12	2	0	0	兼57	—				
関連科目(C4)	フードコーディネーター	食品学概論	2前	2				○									兼1			
		フードスペシャリスト論	2前	2				○									兼1			
		食品官能鑑別論	2後	2					○								兼1			
		食品官能鑑別演習	2前	1					○								兼1			
		食品学実習(45時間)	2前	1						○							兼1			
		調理科学実習	3後	2						○							兼1			
		食品流通・消費論	2後	2					○			1					兼1			
		フードコーディネーター論	2前	2					○								兼1			
		フードコーディネーター実習	2後	1						○							兼1			
		医療秘書	医療秘書概論	1後	2					○									兼1	
	医療秘書演習		3前	2					○									兼1		
	医療事務論		2前	2					○									兼1		
	医療事務演習Ⅰ		2前	2						○								兼1		
	医療事務演習Ⅱ		2後	2						○								兼1		
	医療関係法規		2前	2					○									兼1		
	医療情報処理Ⅰ		2前	2						○								兼1		
	医療情報処理Ⅱ		2後	2						○								兼1		
	手話	3前	2						○								兼1			
	教職	社会教育課題研究Ⅰ	2前	2						○		1						兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1		
		社会教育課題研究Ⅱ	2後	2						○		1								
		社会教育計画Ⅰ	2後	2					○											
		社会教育計画Ⅱ	3前	2					○											
		生涯学習論Ⅱ	2前	2					○											
		情報メディアの活用	2前	2					○											
		図書館情報技術論	2後	2					○			1								
		情報検索演習	3前	1						○		1								
		情報サービス概論	3前	2					○											
		英語科教育法Ⅰ(学習指導要領)	3前	2					○			1								
		英語科教育法Ⅱ(模擬授業)	3後	2					○			1								
		英語科教育法Ⅲ(指導技術)	3前	2					○			1								
英語科教育法Ⅳ(授業評価)		3後	2					○			1									
国語科教育法Ⅰ(学習指導要領)		3前	2					○				1								
国語科教育法Ⅱ(模擬授業)		3後	2					○				1								
国語科教育法Ⅲ(指導技術)		3前	2					○				1								
国語科教育法Ⅳ(授業評価)		3後	2					○				1								
情報科教育法Ⅰ		3前	2					○				1								
情報科教育法Ⅱ		3後	2					○				1								
社会科教育法Ⅰ(社会:地歴分野)		2後	2					○												
社会科教育法Ⅱ(社会:公民分野)	2後	2					○													
社会科教育法Ⅲ(地歴)	3前	2					○													
社会科教育法Ⅳ(公民)	3前	2					○													
人間関係論Ⅰ(含家族関係学)	3前	2					○									兼1				

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
関連科目Ⅰ (C4)	人間関係論Ⅱ	3後		2		○									兼1
	生活経営学 (含家庭経営学・家庭経済学)	1前		2		○									兼1
	教育原理	2前・後		2		○									兼2
	教育心理学	2前・後		2		○									兼1
	教育社会学	3前		2		○									兼2
	教職実践演習	4後		2			○								兼3
	教育史	3後		2		○									兼1
	学習心理学	3前		2		○									兼1
教育と法	3後		2		○									兼1	
	小計 (51科目)	—	0	98	0	—	—	—	2	2	0	0	0	0	兼27
関連科目Ⅱ (C5)	日本語教育実習	4前			3			○							
	日本語教授法Ⅰ	3前			2	○									
	日本語教授法Ⅱ	3後			2	○									
	生涯学習論Ⅰ	2前			2	○									兼1
	生涯学習概論 (司書)	2前			2	○									兼2
	図書館概論	1後			2	○					1				
	図書館経営論	3前			2	○					1				
	図書館サービス論	2前			2	○					1				
	レファレンスサービス演習	3後			1		○								兼1
	図書館資料論	2後			2	○					1				
	専門資料論	3前			2	○									兼1
	資料組織概説	2前			2	○									兼1
	資料組織演習	2後			2	○		○							兼1
	児童サービス論	2前			2	○						1			
	図書及び図書館史	3後			1	○						1			
	図書館特論	3後			1	○						1			
	学校経営と学校図書館	2～4前			2	○									兼1
	学校図書館メディアの構成	2～4前			2	○						1			
	学習指導と学校図書館	2～4後			2	○									兼1
	読書と豊かな人間性	2～4後			2	○						1			
	教育学概論 (含博物館教育論)	1後			2	○									兼1
	博物館概論	2前			2	○					1				
	博物館経営論	2後			2	○									兼1
	博物館資料論	2前			2	○									兼1
	博物館情報・メディア論	2前			2	○					1				
	博物館資料保存論	2後			2	○									兼1
	博物館展示論	2後			2	○									兼1
	博物館実習Ⅰ	4前			1				○			1			
	博物館実習Ⅱ	4後			2				○			1			集中
	博物館実習Ⅲ	4後			1				○			1			
	教職論	1後			2	○									兼1
	教育課程論	2前			2	○									兼1
	教育方法の研究 (情報機器及び教材の活用を含む)	2前			2	○									兼1
	生徒指導の研究 (進路指導の理論及び方法を含む)	3前			2	○									兼1
	特別活動の研究	3後			2	○									兼1
	学校カウンセリング	3前			2	○									兼1
	道德教育の研究	3後			2	○									兼1
	介護等体験Ⅰ	3通			1				○						兼3
	介護等体験Ⅱ (事前・事後指導)	3通			1				○						兼3
	教育実習Ⅰ	4通			2				○						兼3
	教育実習Ⅱ	4通			2				○						兼3
	教育実習Ⅲ (事前・事後指導)	4通			1				○						兼3
	小計 (42科目)	—	0	0	77	—	—	—	1	3	0	0	0	0	兼16
合計 (519科目)			—	30	894	77	—	—	17	13	2	0	0	0	兼154
学位又は称号			学士 (国際教養学)			学位又は学科の分野			文学関係・家政関係						
卒業要件及び履修方法								授業期間等							
共通基礎科目 (C1) (18単位) を必修科目、共通教養科目 (C2) (30単位) を選択必修科目として計48単位を履修し、専門科目 (C3) の中からいずれかのメジャー科目群 (40単位) を選択必修科目、卒業研究プレセミナーⅠⅡ、卒業研究セミナーⅠⅡおよび卒業論文 (計12単位) を必修科目として履修し、残り24単位をC3、関連科目Ⅰ (C4) から選択科目として履修し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録上の上限: 原則として22単位 (半期))								1学年の学期区分		2学期					
								1学期の授業期間		15週					
								1時限の授業時間		90分					

授 業 科 目 の 概 要				
(国際教養学部 国際教養学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通 基礎 科目 (C1)	キリスト教入門Ⅰ	(1)本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2)その「正典」である聖書について、理解を深める。 (3)古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (4)イエス・キリストの教えと行いから、「クリティカル・シンキング」を学ぶ。 (5)一方で、人の”いのち”を活かし、尊厳・自由・平等をもたらす宗教が、他方ではなぜ人の”いのち”を奪い、尊厳・自由・平等を脅かすのかを、ともに考える。		
	キリスト教入門Ⅱ	(1)本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2)前期「キリスト教入門Ⅰ」に続いて、古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (3)人間の根本にある「宗教性」(霊性・スピリチュアリティ・帰依心)に気づき、「祈り」について学ぶことで、心と感性の豊かさを育てるきっかけとする。 (4)キリスト教的歴史観・世界観における「創造」と「終末」について学び、「いま・ここ」に生きる「意味」を各々が喜びをもって見出すきっかけとする。		
	キャリアプランニング (国際教養)	本講義では、初年次教育の一環として、広島女学院大学の学生として大学の建学の精神・歴史・教育理念などについての理解を深め、併せて大学生としていかに学ぶかを考え、自らで大学4年間をプランニングできるようになることを目指す。特に、国際教養学部の「国際的な視野をもって、社会的公正を常に希求する」という教育理念を理解し、そのために必要な知的感受性を身につける。		
	初年次セミナー	新入生が大学での学びを進めていく上で必要とされる学びの技法、すなわち聴くこと、読むこと、書くこと、整理すること、まとめること、表現すること等を修得することを目的とする。とくに、授業の聴き方・書き方・書くことをはじめとする技法、情報の整理のし方、まとめ方について学ぶ。その前提としての情報を得る場としての図書館の利用・活用のし方について実地体験する。		
	日本語表現技法	日本語で教育を受けてきた人々でさえ、日本語の使い方を誤っている場合も多い。漢字を正しく書くことだけでなく、その意味を理解し、熟語や四字熟語、慣用表現などを日常的に使用することに慣れるため、もう一度自分の日本語をみつめなおす。敬語などの基本的な表現を身に付け、手紙やビジネス文書など社会で必要とされている文書の意味を理解し、書く作業を通して、相手の理解を促すことを意識した表現方法を学ぶことを目的とする。		
	情報リテラシⅠ	「情報活用能力」の中でも「情報活用の実践力」を学習する。特に基本的な情報スキルを学習し、今後の大学におけるレポート作成、レジュメ作成および卒業論文における基礎的な力を習得することを目的とする。		
	情報リテラシⅡ	コンピュータの基本的な構造を理解し、情報の扱い方、ソフトの種類や用途などを自分で判断し、これらを利用して「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」の育成を目的とする。		
	基礎英語Ⅰ	This is an introductory integrated skills course, which combines reading and writing skills with listening and speaking. The class is designed to allow students to gain confidence in their use of all four English skills. 本講義は、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能全ての向上を目指す導入的コースである。本講義の目的は、受講生が自信を持って英語の4技能を使う力を身につけることである。		
	基礎英語Ⅱ	This is a continuation of the integrated skills course, which combines reading and writing skills with listening and speaking. The class is designed to improve students' use of all four English skills. 本講義は、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能全ての向上を目指す導入的コースの上級編である。本講義の目的は、受講生が自信を持って英語の4技能のさらなる向上を目指す。		
	基礎英語Ⅲ	This is a high-level integrated skills course, which combines reading and writing skills with listening and speaking. The class is designed to allow students to gain confidence in their use of all four English skills. 本講義は、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能全ての向上を目指す上級コースである。本講義の目的は、受講生が自信を持って英語の4技能を使う力を身につけることである。		
	基礎英語Ⅳ	This is a continuation of the high-level integrated skills course, which combines reading and writing skills with listening and speaking. The class is designed to allow students to gain confidence in their use of all four English skills. 本講義は、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能全ての向上を目指す特級コースである。本講義の目的は、受講生が自信を持って英語の4技能を使う力を身につけることである。		
	共通 教養 科目 (C2)	総合 知	環境と人間	環境を人間が意味づけることは、人為の<起発>点に位置しつつ、人為の全幅にわたる<こだま>することである。詩人オクタビオ・パスが「リズムは拍ではないーそれは世界のヴィジョンである」と語るときの<リズム>が、ここでの<起発>と<こだま>に当たる。その意味づけ同時に行う事象には、自然と人為とのそのつどあらたな調和への試行とも呼べる人間的くり返しが現われている、とも語りうる。本授業では、そのくり返しを、環境思想、文学、生物行動学、諸工学、環境地理学、認知心理学、生活環境制作等においてみていく。
現代女性と身体			私たちは与えられた性を生きているが、疑問を抱く者もいることは理解されはじめた。この授業では、自らの身体を通して、社会を再度見つめなおすことを行う。生む可能性・育てる可能性とその選択権をもった女性自身が、自らの性に関心を払うことで、自らの生き方を考えることにつながる。同時に、共に生き、共に育てる可能性のある男性のことをも理解することで、人として生きる権利の大切さを学ぶ。さらに、人として生きる権利、人権を通して、暴力は差別であり、差別は暴力であることを認識し、暴力のない世界をめざす心のあり方を学ぶ。	隔年

共通 教養 科目 (C2)	総合 知	現代ジェンダー考	ジェンダーということばを耳にする機会は増えているが、その定義は不確かなままである。単に、男女二分法ではないことをふまえて、ジェンダー意識は成長過程の中で植えつけられるものである現実から、ジェンダーとは何を意味するのかについて、さまざまな視点から考察をしていく。とくに、人は支えあって生きるものであるという認識から、人という個の単位を振り返りながら、多様化された現代社会において個が抱えている問題点を探る。	隔年
		ヒロシマ	原爆投下から半世紀以上が経過し、原爆が投下されたという事実と「ヒロシマ」との懸隔は広がりがつある。「ヒロシマ」についての正確な認識し、「ヒロシマ」に関わる未決の諸問題とその影響を理解することは、「ヒロシマ」に還元されない原爆投下の事実を継承するためにも重要な作業となろう。本講義では、広島史の中に「ヒロシマ」を位置づけ、原爆投下の経緯とその影響について幅広く検討する。	
		ボランティア論Ⅰ	1990年代以降、ボランティアへの関心が高まり、ボランティアが日常的な用語として定着してきた。精神論的なボランティア論があったとしても、ボランティア現場での具体的な振る舞いや制度設計などについての議論は少ない。本講義では、ボランティアについての概念や具体的なボランティアのあり方について討論形式を取り入れて検討し、ボランティアについて語りボランティアとして活躍できるようにすることを目指す。	
		ボランティア論Ⅱ	ボランティア論Ⅰを受けて、ボランティア活動の企画運営について実践的に学ぶ。企画運営力をボランティア・リーダーの資質と位置づけ、具体的なボランティア活動の実施を目指す。	
		キリスト教の時間Ⅰ	本学の建学の精神に関わる独自の教育プログラムとして伝統的に持たれてきた「キリスト教の時間」(毎週火曜日13:00~13:45・前期15回)への出席を通して、平和・人権・女性などに関する課題に触れ、独自の考察を進めることを目的とする。受講者には「キリスト教の時間」への出席とともに、テーマに沿った事前学習(予習)とレポート作成(復習)が求められる。前期のはじめと終わりに、イントロダクションと振り返りの時間を設け、受講者の出席を必須とする。「キリスト教の時間」の各回内容については別途予定表において定める。	
		キリスト教の時間Ⅱ	本学の建学の精神に関わる独自の教育プログラムとして伝統的に持たれてきた「キリスト教の時間」(毎週火曜日13:00~13:45・後期15回)への出席を通して、平和・人権・女性などに関する課題に触れ、独自の考察を進めることを目的とする。受講者には「キリスト教の時間」への出席とともに、テーマに沿った事前学習(予習)とレポート作成(復習)が求められる。後期のはじめと終わりに、イントロダクションと振り返りの時間を設け、受講者の出席を必須とする。「キリスト教の時間」の各回内容については別途予定表において定める。	
		特別講義Ⅰ	教養大学として学生に学んでほしいテーマを設定し、特別講師を招聘し、集中講義の形で話題を提供する。	集中
		特別講義Ⅱ	教養大学として学生に学んでほしいテーマを設定し、特別講師を招聘し、集中講義の形で話題を提供する。	集中
		特別セミナーⅠ	持論的なテーマについて、特別講師を招聘し、少人数のセミナー形式で議論する。	集中
		特別セミナーⅡ	持論的なテーマについて、特別講師を招聘し、少人数のセミナー形式で議論する。	集中
		教育学入門	今日の日本の学校教育が抱えている諸問題に関して、規範学的、歴史的、社会的、比較教育学な観点からアプローチする。このことを通じて自らの教育経験を客観的に捉える眼を養うことを目的とする。	
		心理学入門	これまでに心理学で明らかにされた研究成果を紹介しながら、人間の心とは何かについて考察する。講義では、知覚、学習、記憶、思考・言語、脳と行動を中心にあり、私たちが自分を取りまく環境をどのように認知し、どのように判断し、行動するのかという認知のメカニズムについて考える。また、パーソナリティ形成、社会的行動などを通して、自然環境や社会的環境への適応のメカニズムについても考察する。以上の講義内容を通じて心理学的な人間観に触れながら、自己理解を深めてほしい。	
		哲学入門	現代の私たちが直面している様々な問題(環境問題や生命倫理の問題など)は、技術的な進歩によって解決できるものばかりではなく、その内に価値観の対立を含んでいることがほとんどである。価値観の対立のポイントはどこにあるのか、また、思想的にはどのような考えに分類できるのか、分かりやすい形で取り出し、共に考えることで、解決策を探っていく。本授業の目的は、そうした具体的な問題について考えつつ、「自分とは異なる考えを持つ者(他者)」が存在することを自覚し、自分とは異なる他者との相互理解やコミュニケーションの可能性を考えていくことにある。	
		キリスト教Ⅰ	翻訳は、「WATER」という単語を「水」と訳して済むものではありません。原文に対する解釈を抜きにして翻訳することは、事実上不可能です。また、翻訳にはそれを取りまく文化や時代という背景が反映されます。この授業では、ヘブライ語やギリシャ語という古代語で書かれた聖書本文が、どのように各国語に翻訳されていったのかという歴史を学ぶことや、現代の様々な翻訳の試みに触れることを通じて、「キリスト教文化」というテーマに接近することを試みます。	
		キリスト教Ⅱ	聖書は不思議な書物です。遠い昔に遠い国で著された書物ですが、今・ここを生きる私たちに、人間の生き方や世界について理解するためのカギを与えてくれる書物でもあります。それは聖書が「神」について記すことで、じつは普遍的な「人間の問題」を描いているからではないでしょうか。この授業では、聖書が示す人間観や、聖書が描く人間像を学ぶことを通じて、受講者が自分自身の人間観や世界観を確立する一歩とすることを目指します。	
生命倫理	生命および医療の倫理について、講義前半では、いわゆる「ヒポクラテスの誓い」や、インフォームドコンセントをはじめとした、基本的な事項について説明する。講義の後半では、脳死の問題のような人によって見解が分かれる問題や、安楽死など、実際の医療の現場で判断が迫られるような問題について、実際に生じた事例を参照することで考えてゆく。この際、異なる倫理的アプローチによって、各事例に対して、異なる結論が生じることがあることを示しつつ、受講者自身の立ち場を意識させるようにしたい。			
アメリカの文化と歴史	優しく英語を学びながら、アメリカの文化、社会、歴史について学ぶ。 1. Orientation 2. Coming to America① 3. Coming to America② 4. The American Revolution① 5. The American Revolution② 6. The Constitution① 7. The Constitution② 8. Growth and the Civil War① 9. Growth and the Civil War② 10. Twentieth Century① 11. Twentieth Century② 12. Celebrations① 13. Celebrations② 14. The Legislature① 15. The Legislature②			
イギリスの文化と歴史	イギリスの代表的な文化について、その歴史をたどりながら紹介していく。イギリス文化についての基礎的な知識を身につけることを目的とする。 第一週：イントロダクション イギリスという国/第二週：イギリスとローマ帝国/第三週：イギリスとキリスト教/第四週：イギリスと建築/第五週：イギリスと王室/第六週：イギリスと王室/第七週：イギリスと戦争・外交/第八週：イギリスと戦争・外交/第九週：イギリスの階級/第十週：イギリスの階級/第十一週：イギリスの伝統行事/第十二週：イギリスの伝統行事/第十三週：イギリスの家庭/第十四週：イギリスの食べ物・飲み物/第十五週：その他、まとめ			

共通教養科目(C2)	人文科学知	ヨーロッパと文化	ヨーロッパの形成は中世にその淵源を求めることができるが、その構成要素としてのヘレニズム(ギリシア的なもの)へプライズム(キリスト教)及びゲルマン的精神はいかにして作りあげられ、近代・現代を通じて発展していったのか文化史的視点から考察する。	
		歴史学のみかたⅠ	「歴史」と聞くと即座に「苦手」と答える人は多い。大学入学までの歴史は固有名詞と年号の暗記が中心になりがちである。暗記科目とみなされてしまうのも、苦手意識もそれが原因だろう。一方で、最近では「歴女」なる言葉もある。まずは、苦手意識を除き、歴史を憶えるのではなく、学び、知ることの楽しさを見出すことを目的とする。歴史は物事の見方である。そのため、この国の成り立ちを通時的にたどるのではなく、個別の事象を結びつけ、時代を行き来しながら見てゆく。	
		歴史学のみかたⅡ	日常生活の中で、私たちは漢字を使い、食事の際に茶を飲むが、これらは中国から伝来したものである。アジアでは古くから、地域間において様々な形の関係性(移住、貿易、戦争など)が形成されてきた。言い換えると、アジアの歴史は、「海と陸の交流史」といえる。そこで本講義では、中国を中心とする東アジア地域とインド洋と東シナ海の間には存在し古くから重要な交通路として栄えた東南アジア地域とを対象に、①「帝国」、②「ヒトやモノの交流」、③「西方」からの影響、という3つの視点から、アジアの歴史的特徴を検討する。	
		歴史学のみかたⅢ	西洋史の立場から歴史の見方について考察する。わたくしたちが歴史を学ぶことは、どのような意味があるのか。その前提として歴史学とはいかなる学問としてわたくしたちの前にあるのか、その探究の方法とは、対象とはということについて考えてみたい。	
		色彩情報論	この科目では、講義と講義から得た知識を確認するための実習を合わせて行う。まず、色を情報の一つとして捉えその色のはたらきと色を認識するために光の物理的な性質、目のしくみ、照明、混色について概略を講義する。次に、色の三属性(色相、明度、彩度)を基に、PCCSのヒュートーンシステムを理解する。また、色の心理的効果、視覚効果、知覚的効果を講義と実習により理解する。さらに、配色調和という観点からのファッション、インテリア、環境での配色を通して、色を情報として効果的に利用できる力を獲得する。	講義2回×90分、13回×45分 実習13回×45分
		音楽の世界	古今東西の様々な種類の音楽を聴き、音楽の特徴を「耳」から捉えることによって、様々な音楽様式についての感覚を養う。同時に、生きた音楽に親しみつつ、音楽の起源や、音楽が形成され発展していく過程についても学ぶ。実際に、演奏・創作という体験も交え、幅広い観点から音楽を捉える。また、身の回りの「音」にも耳を澄まし、意識して「聴く」という行為を通して、日常の生活環境や文化についても考察する。これらの経験をもとに、現代社会における多様な芸術や文化の意味について根本から問い、探究していく。	
		日本美術史	日本美術の大づかみな流れをたどるとともに、その特質を、前近代においては中国・朝鮮半島の美術との、近代以降においては欧米をはじめ世界の美術との対比においてつかむ。そもそも、高校までに学ぶ美術も、世間で話題となる展覧会で接する機会が多いのも、多くは西洋美術である。しかし、この国には、美しいものを愛する長い伝統がある。その歴史を知り、あわせて日本美術史の底流としての日本人の美意識について見てゆく。	
		西洋美術史	西洋美術史における時代様式の特徴を感覚的に把握し、大きな枠組みと歴史・文化的な背景をひととおり理解できることを目的とする。ヨーロッパとその源流となった地中海諸文明(エジプト、エーゲ海、ギリシア、ローマなど)を扱う。ヨーロッパでは、ギリシア・ローマの古典美術が繰り返し参照されたが、それへの反発である反古典主義の動きもあり、このふたつの大きな流れを中心に美術史を理解することができることを特に強調したい。	
		American Culture and History	The purpose of this course is to acquaint students with the culture, history and diverse inhabitants of the United States through extensive reading. Students will improve their understanding of American history, as well as their abilities in reading, listening, speaking, and critical thinking. 本講義は、多読をとおしてアメリカ合衆国の文化、歴史、多民族性の理解を目的とする。受講学生は、アメリカの歴史の理解と同様に、英語のリーディング、リスニング、スピーキングの能力、また批評的考察力を培う。	
		British Culture and History	The purpose of this course is for students to gain a greater understanding of British culture in the modern day, and to see how history has shaped British culture. Themes from major British films will be used to introduce important aspects of culture in Britain. 本講義の目的は、受講学生の現代のイギリス文化への深い理解を養い、いかにイギリスの歴史がその文化を形成しているのか、ということ考察することである。主要なイギリス映画からテーマを選び、イギリスにおける重要な文化的側面を紹介する。	
		European Culture and History	European history began with Ancient Greek and Roman civilizations, which formed the basis of Western Civilization and European culture. This course will follow historical eras from ancient to modern times, and students will make Powerpoint presentations to the class on their selected topics. ヨーロッパ史は、西洋文明やヨーロッパ文化の基礎を形成する、古代ギリシャ、ローマ文明から始まった。本講義は、古代から現代にわたる歴史的背景を探り、受講学生は、自分たちの選択した主題についてのプレゼンテーションを授業中パワーポイントを用いて行う。	
		American Literature and Thought	The purpose of this course is to acquaint students with the literature and thought of the United States by reading and discussing works of cultural, historical, and literary significance produced by a wide variety of American writers. 本講義の目的は、多種のアメリカ作家が描いた、文化的、歴史的、文学的意義の高い作品を講読し、さらに議論することで、受講学生がアメリカ合衆国の文学や思想を理解することである。	
		Asian and African Literature and Thought	This course will use short stories from Asia and Africa to illuminate general themes and social problems. Students will be expected to read extensively, think critically, and also express their thoughts in well-constructed written reports. 本講義は一般的なテーマや社会問題の解明を試みるため、アジアやアフリカの短編小説を扱う。受講学生は、テキストの徹底的な精読や、批判的思考力を持って、よくまとまったレポートで自身の考えを表現する技術の向上を目指す。	
European Literature and Thought	This is a course in the classic works of European literature and thought. Excerpts from major works will be studied for content, style and theme, from The Bible to contemporary modernism. Students will read extensively, think critically, and also express their thoughts in written reports. 本講義では、ヨーロッパの文学や思想の古典作品を扱う。聖書から現代のモダニズムにわたる主要な作品の抜粋を、内容、形式、主題について学ぶ。受講学生はテキストを精読し、批評的に考え、レポートを提出する必要がある。			

共通教養科目 (C2)	人文科学知	日本文学入門	メジャー選択の目安となる日本文学・日本文化についての基本的な授業である。古典文学を中心とするが、近現代文学作品も視野に入れる。入門に相応しい作品を取り上げ、その作品・作家の特質を考えるとともに、古典文学作品の現代的意味を考える。日本文学を読み、味わうことの習慣化を図りたい。文学作品を読むことは、作家の人生観を知るだけでなく、読み解く中で、自身の生き方をも考えさせられる。読むという行為を通して自身の人生観を培う。		
		アメリカ文学史	現代アメリカ文学(アメリカ自然主義以降)の流れと作家、作品の内容、カテゴリー別の特徴などを、ビデオを見たり、作品を一部鑑賞したり、調査したり、講義を聞いたりしながら、学ぶ。 1. Orientation 2. 自然主義 3. モダニズムの始まり 3. Lost Generation 5. 危機の文学 6. 南部文学① 7. 南部文学② 8. 1950年代の文学(戦争文学) 9. Beat Generation 10. 黒人文学① 11. 黒人文学② 12. ユダヤ系アメリカ人文学 13. Post Modernism① 14. Post Modernism② 15. 復習とレポートの説明		
		イギリス文学史	イギリスにおける代表的な文学作品を、時代背景や文化と絡めながら歴史的に考察し、イギリスにおける文学・文化の特質を考える。できる限り実際のテキストに触れ、それぞれの特徴を把握する。範囲としては、古英語から現代の文学を扱う。授業計画は以下の通り。第1回文学史のイデオロギー、第2回古英語の時代、第3回中英語の時代、第4回ルネサンスⅠ、第5回ルネサンスⅡ、第6回17世紀前半、第7回17世紀後半、第8回18世紀前半、第9回18世紀後半、第10回19世紀初期、第11回19世紀中期、第12回19世紀後半、第13回20世紀前半、第14回20世紀後半、第15回 現代		
		日本語学の視点	この授業では、日本語学という学問がどのような学問なのかについての紹介を通して、日本語を学ぶことおもしろさや社会的意義を伝えることを主たる目的としている。一口に日本語を学ぶ、研究するといっても、どういった時代の日本語を扱うのか、話し言葉か書き言葉か、日本語の音声なのか文法なのか意味なのかなど、学びの視点は多様である。どのような視点から日本語を扱うことができるのかを把握し、常日ごろから様々な角度から日本語に関心を持ってもらえれば幸いである。		
		英語学の視点	この授業は英語学とはどのような学問領域であるかをみなさんに紹介することを目的とします。英語学は英語を対象とした言語学ですが、みなさんは「言語学」と聞いてどんなことを研究する学問だと思いますか? 古代文字の解読でしょうか? もちろんそれも言語学の対象ですが、もっと身近な、身の回りで普通に話されている言葉の仕組みを探ることも言語学の重要な目的です。この授業では、みなさんが今までに学習してきた英語の仕組みとみなさんが普段話している日本語と比べることによって明らかにしていきたいと思います。		
		比較言語	本科目は、言語学的に日本語と英語を比較することによって対照言語学の方法論を講義形式で解説する。1年次生向けの教養科目という科目の位置づけを考慮して、まずはこれまで文法学習をとおりて言語学的な特徴を学んできた英語を取り上げ、その仕組みに目を向けられるようにする。さらに、ふだん文法を意識せず用いている日本語との対応関係に注目し、それぞれの言語の類似点・相異点について疑問をもてるようにする。最終的には、その疑問点を解決することのおもしろさがわかるようになるのが目標である。		
		女性学入門	女性自身が自分らしくありたい、自分らしく生きたいと願っても、自分では選ぶことのできない属性である性別によって、自己選択・自己決定を強いられることや可能性に挑戦する機会すら奪われるような事例がある。しかしながら、そのことに気づかないまま、あるいは気づきながらもいたし方ないことと理解し、我慢しながら生活を続けている私たちがいる。身の回りで生じている問題をジェンダーの視点でみつめながら、男女共同参画社会のあり方を考えたい。		
	社会科学知	平和学入門	人はひとりでは生きていけないからこそ、お互いを理解し、お互いを尊敬しながら共に生きることができる社会、共生社会の実現をめざそうとする。私たちが暮らす社会を一人ひとりが自分らしく生きることができる社会へと、自ら主体となって変革する力となることができれば、幸いである。平和な社会とは、戦争や暴力がない状態をさすだけでなく、飢えや貧困、社会的抑圧や差別などの「構造的暴力」が克服された社会ではないだろうか。 私たちは日本社会に生き、国際社会に生きるものとして、今日の日本社会や国際社会の現状と課題についてどれだけのことを知らされているだろうか。あるいは、知ろうとしてきただろうか。開発途上国に暮らす子どもたちや女性に学ぶ視点から、開発途上国の低発展性の背景や要因を探るとともに、日本に暮らす私たちの生き方を問いなおしてみたい。国際平和と人権の確立をめざして、地球的視野で考え地域社会に貢献する社会変革の担い手としての自覚を促したい。		
		社会学入門	社会学と一口に言っても、対象も方法も多岐にわたる。この授業では、ウェーバーやデュルケム、パーソンズなどといった基礎的な人物と彼らが論じた基礎概念に絞って概説する。その際、一方的な説明に終始するのではなく、具体的な事例と発問を通して物事の追究を促す。授業の目的として以下の2つが挙げられる。まず、学史に沿った構成にすることで、社会学の基礎概念と問題意識(何を対象とした、どのような学問なのか)の理解を目指す。次に、具体的な事例を通して、自分の価値観や日常生活を相対化する力を身につける。様々な道具立てを用いて「あたり前」に目を向ける作業は、今後の勉学や社会生活でも活かされるだろう。		
		現代社会と人権	この授業は、個々の人間存在にとっては生来かつ固有の権利であり、人類全体にとっては普遍的価値である人権の、(1)基本的概念について学ぶこと、(2)思想的発達の歴史について学ぶこと、(3)人権侵害や差別克服の実例について学ぶこと、(4)現代社会におけるさまざまな人権問題(戦争と暴力、女性差別、性的少数者への差別、子どもと人権、同和問題、外国人差別、情報化社会と人権、病気と差別、経済格差と自己疎外、等)について学ぶこと、を通じて受講者それぞれが人権への関心を深めるとともに高い人権意識を涵養することを目的とする。		
		地理学概論	現代社会は空間の時代であると言っても過言ではない。グローバル化が進展するとされる一方で、地域分権やコミュニティの再生などが喧伝される。これまで知識の学としてみられていた地理学は、改めて現代社会における空間や地域の学として期待されている。本講義では、位置、場所(空間)、スケール、交通、地域などのキーワードを手がかりとして、地理学的な考え方について概説したい。		
		開発と文化	一般的に「開発」はインフラ整備や経済開発と捉えられる傾向にありますが、昨今は、「豊かな」社会の開発・発展においては「文化」的要素も重要であるとの見方が起こっています。本講義では、日本国内だけでなく東アジアや南アジア等において、地域の文化や歴史、暮らしの知恵等が「地域で生きぬく」ための精神的・実践的な支えとなることを再評価している人々の暮らしを事例としてとりあげながら、「開発」とはなにか、「文化」とはなにか、そして「豊かさ」とはなにかというテーマを共に考えていきます。	隔年	
		民俗学	本講義では、日本民俗学における代表的な研究者の研究対象と研究方法を紹介し、研究史を概観する。近年の研究動向をも紹介し、現代日本における民俗学の可能性と問題点を明らかにする。具体的なフィールドとして私たちの暮らし「安芸」を取り上げ、生業、信仰、民俗芸能などを周辺地域と比較し、「安芸」の民俗の特徴を明らかにする。その上で、当該地域の人生儀礼、年中行事、民俗芸能から具体的事例を提示し、民俗的理解とその置かれている状況の理解を目指す。		

共通教養科目 (C2)	社会科学知	経済学入門	本授業では、経済学をはじめて学ぶ学生を対象に、経済学的な考え方の基本を講義する。この授業は、経済学の基本的概念を理解し、経済学的思考を学び、新聞やテレビの経済ニュースなどが理解できる経済学の考え方を身に付けることを目的とする。授業では、分かりやすい経済学入門書を利用し、ミクロ経済学（個々の家計や企業がどのように意思決定を行ない、それらが相互にどのように関わろうかを研究する学問）やマクロ経済学（個別の経済活動を集計した一国経済全体を扱う学問）の内容を学びつつ、その知識を応用し実社会の経済問題について考察してみることを目指していく。	
		経営学総論	現代社会における企業やビジネス組織の仕組みやマネジメントに関する知識を体系的に学習する。また、働くことの意義や意味について学び、自らの職業観の醸成をめざす。	
		Area Studies 1 (America)	This course is designed to acquaint students with American culture, history, and society through extensive reading of a wide variety of different works. By participating actively in the lessons, students will increase their vocabulary and their familiarity with English idioms and phrasing. 本講義の目的は、多種多様な作品の多読をとおして、アメリカの文化、歴史、社会を理解することである。授業に積極的に参加することによって、受講学生は英語の慣用語や語彙力を増やすことができる。	
		Area Studies 2 (Asia and Africa)	This course will introduce Asia and Africa through films, chosen for particular themes as well as providing visual background information about the various countries. Students will discuss the themes, gain insight into Asian and African countries, and be encouraged to make cross-cultural comparisons. 本講義は、様々な国の背景を視覚的な教材を用いて情報を提供し、また特定のテーマを扱った映画を題材とし、アジアやアフリカを学ぶことを目的とする。受講学生は、各テーマを議論し、アジアやアフリカに関する洞察力を身に付け、異文化間を比較する力を培う。	
		Area Studies 3 (Europe)	This course is designed to acquaint students with European culture, history, geography, and current affairs through presentations. Students in this class will improve their research, presentation, and speaking skills as they research and present on a variety of topics relating to Europe. 本講義の目的は、受講学生のプレゼンテーションをとおして、ヨーロッパの文化、歴史、地理、時事問題を理解することである。学生は本講義において、ヨーロッパに関する様々な主題についてのリサーチ、プレゼンテーションを行うため、リサーチ、プレゼンテーション、スピーキングの技術を向上することができる。	
		金融論	本講義の目的は、金融の基礎知識を学び、現実の経済社会における金融の役割を理解することにある。学期の前半では金融市場のメカニズムおよび銀行などの金融機関の行動について学習する。ここでは、金利機能などの理論的側面と共に、実際の銀行などによる企業金融、プロジェクト・ファイナンスなどについても学習する。また、金融市場で重要な問題となる情報の非対称性や金融制度の問題についても検討し、金融部門に対する健全性規制の在り方について議論する。学期の後半では、貨幣の需要・供給のメカニズムや金融政策について学習する。特に、今日のグローバル化した経済の下での金融・財政政策のあり方について理解を深める。	
		国際金融論	本講義では、為替レート、国際収支、国際金融市場、国際金融制度などの問題を学ぶ。学期の前半では、為替レートや国際収支表などに関する基礎的な知識を学ぶ。為替レートについては、変動相場制や固定相場制のもとで短期的・長期的にどのような要因によって為替が決定されるのかを学習する。次に国際収支表の枠組みを学び、経常収支や資本・金融収支の意味を理解する。これらをもとに開放マクロ経済政策および国際金融政策を議論する。学期の後半では、国際金融市場における金融取引、国際資本移動などについては学び、グローバル化した国際金融における諸問題を検討する。さらにIMF、世界銀行などの国際金融制度についても学習する。	
		経営実務	企業などのビジネス組織の規模や業種、業態を問わず、会社法などの法律やルールに則り、経済取引によってもたらされる資産・負債などの増減を管理し、一定期間内の収益・費用を記録するための貴重方式である帳簿をつけ、財務諸表を作成することは組織として当然のこととされている。この帳簿の意味を理解し、そこに記された数字の意味や流れを理解することは、ビジネスワーカーの基本的能力の一つである。このような経営実務の基本となる簿記の理解と経営業務の全体を把握し、会計学への糸口とする。	
		ビジネス実務演習 I	ビジネス活動とそこで働く人間のビジネスワークについて概説し、企業などのビジネス組織における積極的なビジネス・コミュニケーションの必要性、人間関係調整の重要性について考察を深めることを目的とする。また、クリエイティブなビジネス・ワーカーとして求められる実務能力の開発とキャリア形成について探求し、「わかることからできること」を目標とする。 「ビジネス実務士」「上級ビジネス実務士」の資格取得に向けた必修科目である。	
		プレゼンテーション概論	現代社会における企業などのビジネス組織において、ビジネスワーカーに必要とされる技能の一つにプレゼンテーションがある。単に情報機器を使用したものをプレゼンテーションとする傾向に対して警鐘を鳴らし、本来のプレゼンテーションのあり方、それに関する知識や技法についての理論を体系的に学習することを目的とする。また、実践したプレゼンテーションには必ず評価がついてくることから、PDCAサイクルから評価の意味を考察し、フィードバックの重要性を理解する。 「プレゼンテーション実務士」の称号取得に向けた必修科目である。	
インターンシップ I	ビジネス活動とそこで働く人びとのビジネスワークについて、「インターンシップ（就業体験実習）」を通じて理解を深め、自らの職業意識の形成を図るとともに、職業適性、職業生活設計、職業選択について考える契機とする。事前学習として、ビジネス組織についての理解、ビジネス・コミュニケーションの基本について理解を深め、ビジネス・ワーカーとして求められる実務能力開発やキャリア・プランニングを探求する契機とする。 受講生は、夏期休業中に1～3週間程度の期間で、本学独自の研修先での「インターンシップ」に参加すること、ならびに事後学習としての「研修報告」（研修レポート提出と報告会参加・発表）が義務づけられる。			
Social Anthropology	Culture forms the background to all our behavior as individuals and society. It has diverse forms and expressions. It is inherited and learned. It can be changed or remain permanent. In this discussion course, students will consider aspects of culture that control their lives. 文化とは、我々全ての個人として、集団としての態度の基盤を形成する。文化によって、姿勢や表現は異なる。それは継承され記憶される。それは変化したり、永遠にそのまま残る。本講義では議論をとおして、受講学生が自分たち自身の生活に強くかかわっている文化を理解することを目的とする。			

共通教養科目 (C2)	社会科学知	Social Psychology	The purpose of this course is for students to consider aspects of psychology that are relevant to all humans. However, students will think about how different cultures may look at these aspects of social psychology in different ways. Students will learn not only social psychology, but also improve their presentation skills in this course. 本講義の目的は、全人類にかかわる心理学の側面を考察することである。受講学生は、異なった文化が異なった方法でいかに社会的心理学の側面において見受けられるか、ということを検討する。学生は、本講義において社会心理学を学ぶだけでなく、プレゼンテーションの技術を培うことができる。		
		World Economy	The purpose of this course is for students to gain insights into the world economy, and how it affects people in different parts of the globe. The course covers the role of governments, institutions and individuals in the world economy. Students will also improve their presentation skills in English. 本講義の目的は、世界経済に対する洞察力を養い、いかに世界経済が世界のあらゆる場所に影響しているか、ということを理解する。本講義は、世界経済において、政府、慣習、個人の役割を網羅する。学生は、英語によるプレゼンテーションの技術の向上を目指す。		
		日本国憲法	人権保障の礎としての憲法の役割を理解してもらえらる講義としたい。日本国憲法の規定する国民主権の内容、伝統的な基本的人権の種類と内容、新しい人権をめぐる議論について歴史的な経緯を踏まえて講義する。基本的人権の保障に関する主要な判例を取り上げる。日本国憲法の制度化する国家の統治構造(国会・内閣・裁判所)を解説する(その際、国会法、内閣法、裁判所法、国家行政組織法等にも言及する)。地方自治・地方分権に関する現在の我が国の動向について講義する。		
		ビジネス法務	企業などのビジネス組織は、法令などを遵守できる能力のあるビジネスワーカーを求めている。不祥事が発生し、刑事責任や損害賠償などの民事責任、社会からも厳しい批判を受ける事例が跡を絶たない。生産者・消費者・取引先企業など、さまざまな利害関係をもつ人々の立場や利益を無視することは許されず、業務のリスクを察知し、法的にチェックし、問題点を解決に導くコンプライアンス能力が必要とされている。ビジネス活動の基礎となる法律知識と法的なものへの考え方を身につけ、「ビジネス法務検定試験」チャレンジへの手がかりとする。		
		公共性と権力	現代政治の前提となっている主権国家とこれを基礎とする公共空間の編成はヨーロッパで形成された。本講義では歴史的・思想的観点からヨーロッパにおける主権、市民と公共性をはじめとする諸観念の形成を検討するとともに、あわせて今日転換期を迎えている主権国家と公共性のシステムの変容の行く末を展望する。		
		政治学 I	日々伝えられる政治ニュースは、断片的な経過であることが多く、熟考を経ないまま通りすぎてしまいがちである。政治への関心を開花させる第一歩は、多量の情報を読み取る力を身につけることである。そのためには、基礎知識を習得することが欠かせない。授業では、①権力・自由・平等・民主主義といった政治理論を取り上げた後に、②政治制度や政策決定過程といった政治の仕組みを概説し、③現代社会における時論的なテーマを設定して考察する。到達目標は、現実の政治状況を独力で観察できるようになることと、身近な問題が政治を通じて解決される見通しを自分なりに描けるようになること、この二点である。	隔年	
		政治学 II (含国際政治学)	国際社会における出来事は、「遠い空の下の話」として、関心の外に置かれてしまうことが多い。しかし、現代に生きる我々の日常は、政治・経済・文化のあらゆる面において、国際的な動きと無関係ではいられなくなっている。同時に、戦後、飛躍的な経済成長を遂げた日本は、国際舞台で様々な貢献を迫られてもいる。授業では、国際政治の基礎概念・歴史・仕組みを幅広く学習し、冷戦後の世界状況を理解することが第一の目標となる。その際、日本の位置確認を意識的におこなうよう留意する。こうして、国際社会の動向を独力で分析し、自分の問題として考察できるようになることが、第二の目標である。	隔年	
		国際関係論	この講義は、現代国際関係を成り立たせているものは何か、今まで現代国際関係はどのような変化を遂げて来たのかを、歴史的に解き明かし、受講者たちが国際関係というものの輪郭を捉えるための基礎的な知識を提供することで、国際社会で起きる様々な出来事を受講者自らの手で把握する力を養うことを目的とする授業である。したがって、この講義は、17世紀以降、近代国際関係が成立するまでの歴史的背景を解説し、国際関係における様々な理論を考察することで、受講者の国際社会に関する理解を深めることを試みる。	隔年	
		ポストコロニアリズム/ナショナリズム	この授業は国際関係論を受講した人を対象とする。この授業ではまず、「歴史」の生成過程を概観したうえで、「今日」を読み解く一つの材料として「歴史」を捉え、近代国民国家の成立と現在に至るまでの変容を具体的に考察する。近代市民革命の展開とともに、従来の身分制的支配関係が崩れ、商品交換関係を媒介とする自由で平等な近代市民社会をいち早く熟させた近代国民国家は、自国の経済規模に似合う市場を求めて徐々に膨張を開始した。この序列に新たに参加しようとする新興工業国との間に二度にわたる大戦を経験した「大国」間のパワー・ポリティックスは現在変わったのか。自国だけでは自立した外交政策をとり得ない「小国」の視点から近・現代史を追っていく。	隔年	
		グローバル化と地域	今、グローバル化は我々の生活に浸透しています。ゆえに、地域社会を考える際にも、グローバル化の流れに着目することが不可避となっています。グローバル化に取奪される地域(ローカル)ではない、ローカルがローカルとして生きていくことのできるグローバルな社会は可能なのでしょうか。本講義では、“Act Locally, Think Globally”という視点と、主体的に地域がグローバルにつながっていくという意味での“Think Locally, Act Globally”という視点の双方から地域のあり方について考えていきます。	隔年	
		自然科学知	数学入門	本講義では情報科学への応用を考慮しつつ最低限の数学の基礎知識の習得を目指す。内容：複素平面の基本、複素数と平面図形、数列と関数の極限～無限級数、数列と関数の極限～漸化式と数列の極限、数列と関数の極限～関数の基本、数列と関数の極限～関数の極限、行列と一次変換～ベクトルの復習、行列と一次変換～行列の基本、行列と一次変換～行列と一次変換、行列と一次変換～行列のn乗計算、確率分布～条件確率(1)、確率分布～条件確率(2)、確率分布など	
			生活の中の数学	実社会でのできごとを教理的に捉える。身の回りには、沢山の数学が潜んでいます。動きの中には解析学が、形の中には幾何学が、規則的なパターンには代数学が、…といった具合です。本授業では、それらの数学の一端を愉しみます。一見すると、数学とあまり関係のないようなことを話題に取り上げていきます。意外な話題から始まり、最後には数学の現実的な価値や有用性を感得するのが本授業の目的です。	
			物理学入門	物理学とは自然現象を科学的に探究する学問である。この科目では、物理現象を数式で表現するという科学的な物の見方を理解し、物理現象を法則から予測するために必要な知識を修得する。まず、基礎知識として物理量と単位、有効数字の概念を学ぶ。次に、物理での力の定義を始めとして、つりあいとモーメント、物体の運動(等速、等加速度運動、単振動)をどのように数式で表現するか理解する。さらに、物理での仕事の定義および力学的エネルギーの保存、温度と熱の関係、電気、波動という基礎的な物理現象について講義する。	
			情報科学入門	情報化社会における情報科学について、基礎から学習し情報化社会に生きる社会人としての常識を身に付けることを目的とする。「情報とはなにか」から「情報技術とはなにか」そして、「コンピュータの基礎」から「ネットワークの基礎」までを学習し、情報科社会で生きることについて学習する。	



共通教養科目 (C2)	自然科学知	統計学入門	「数学入門」を履修済みであることが望ましい。特に数列の知識を必要とする。統計理論に基づくデータ解析は、農学・工学・理学等の理系の分野はもとより、心理学・経済学・社会学等の文科系の分野でも予測、評価、管理等の目的で広く利用されている。本講義はデータ解析の場面で利用される基本的な統計的手法・考え方について学習するための統計入門コースである。講義では、得られた標本データを解析・整理・要約するための記述統計学、その解析結果から母集団における状況を推測するための推測統計学について、その基礎的内容を具体例に基づいて解説する。	
		情報管理論 (含情報処理)	情報社会において、理性的に自立した市民として良い情報発信者となることは必要である。本講義では、情報とはなにか、その概念、価値、深化についてまず明らかにし、情報の意味づけ (情報処理) について考える。さらに、会社、工場、家庭での情報処理システムについて解説する。情報処理の実践では品質という情報管理に用いられるABC分析を実際に行い、情報管理の必要性を理解する。その上で、ハード面の進歩、情報システムの変遷を通して複雑な目的で情報を管理する現代社会の姿について情報システムの立場から概観する。	
		家庭電気・機械	電子レンジ、薄型テレビ、IH調理機器など電化製品は次々と開発され、またガソリン車から電気自動車へと家庭で使われる機械は進化を始めている。この科目では、これらの電気機器や機械を適切に利用し、安全かつ能率的にその機能を発揮させるために必要な電磁気、エネルギー変換、材料、機械の知識を修得する。さらに、電力を利用する際のエネルギー消費について、日本の現状と将来への予測を通して環境負荷や省エネルギーに配慮した生活への意識を深める。また、学習指導案を作成し、技術・家庭及び家庭科の指導が行える力を養う。	講義 8回×90分、7回×30分 実験 5回×60分 実習 2回×60分
		バイオサイエンス入門	近年になり、私たちの生活に密接に関わりを持つようになってきたバイオテクノロジーは、遺伝子の発見とその知識の応用から確立されてきた。「バイオテクノロジー入門」では、遺伝子の働きや個体発生のメカニズムに焦点を当て、バイオテクノロジーの基礎となる知識を身に付ける。さらにこうした基礎的知識を応用して行われるクローン技術や遺伝子組換え技術といった近年発展してきたバイオ技術にも目を向け、今後益々発展するバイオテクノロジーを理解するための基礎的知識を身に付ける。	
		自然と環境	自然環境は、多種多様な生物により形作られ、その生物たちにより環境が維持されている。自然環境を理解するためには、個々の生物とともに、より大きな枠組である生態系の営みを理解する必要がある。「自然と環境」では、「1. 地球の歴史と生物の進化」、「2. 多様な生物とその分類」、「3. 生態系の特性」をテーマに、自然環境の成り立ちや自然環境の重要性を考え、自然環境の保護や環境保全に取り組むための基礎的知識を身に付ける。	
		生物学入門	共通教養科目・自然科学分野として、生物学の理解を深めることを目的とする。そもそも、生体とはどのような機能を有しているのかを知るきっかけとする。そのため、生活の構造、機能にかかわる分野を重点的に理解することを目的とする。また、遺伝子操作作物などを含む食糧問題と環境に関する基礎的知識の習得も図る。	
		健康科学 (含栄養学概論)	『食』をめぐる情報が氾濫する現代社会において、『食』について様々な角度から分析し評価を行うことで、『食』を選ぶ力・選食力を養うとともに、望ましい食事のあり方を学ぶ。あわせて食品の安全性に関する問題や地球環境に配慮した『食』の重要性も学習する。	
		衛生と安全	社会における食への関心は年々高まっている。また、その一方で食を取り巻く環境は、食品の多様化、流通の国際化とともに大きな変化を絶えず続けている。本授業は食が備える要件のうちで最も大切な食の安全に関する知識を習得することを主な目的として行う。具体的には、関連する法規や行政および食の安全にかかわる微生物学的、または理化学的な各項目を扱い、加えて衛生とヒトの健康という側面からも学ぶ。	
		Computer Science	Students will improve their understanding of computer science and technology by conducting research and writing reports. They will also become familiar with some of the research methods required to write academic papers. 受講学生は、リサーチを行い、レポートを書くことによって、コンピューター・サイエンスとテクノロジーの理解の向上を目指す。学生はまた、学術論文を書くために必要なりサーチの方法を学ぶことができる。	
		Nature and Environment	The purpose of this course is for students to study the relationship between humans and nature. Especially, students will learn about the impact that humans have on our environment. These are important issues and students will need to look critically in order to understand the problems, and suggest solutions. 本講義の目的は、人間と自然の関係を考察することである。受講学生は特に、人間が環境に与える衝撃を精査する。これらは重要課題であり、学生は問題を理解し、解決策を提示するために洞察力を持って観察する必要がある。	
		Health Science	The purpose of this course is for students to study about relevant issues in modern health science, and to understand that health is very much a global issue of great concern. Students will learn the important skill of how to express their ideas in well-constructed essays. 本講義の目的は、現在の健康科学に関する問題を考察し、健康が、強い関心が寄せられている世界的な課題事項であるということを理解する。受講学生は、よくまとまったエッセイで自分の意見を表現できる重要な技術を習得する。	
		化学	化学物質はどのようにできているのか、どうして化学反応が起こるのか、物質にはどのような状態と性質があるのかなど、生活に関係する化学的な事象について理解し、無機化学、有機化学の知識を習得する。まず、私たちを取り巻く物質を構成している原子・分子についての理解を深め、化学結合、酸塩基反応などの化学反応、物質の状態について知識を習得する。さらに、生体を構成している有機化合物についての基礎的知識を習得したうえで、生活から切り離すことができない油脂、炭水化物、たんぱく質などについて、科学的な目で見る能力を培い、応用へと発展する力を養うことを目的とする。	
科学と技術	自然科学の発展を歴史的にたどりながら、人類が対象としての自然をどのように認識してきたかをさぐる。特に現代科学・技術の源となる近代科学の特徴について、それを成立させた主要な理論、思想について基本的な知識を持つことが目指される。また、社会との関わりの中で科学・技術の営みを捉える視野を養うため、それぞれの時代の文化的背景や、科学活動に影響を与えた経済的、政治的要因なども適宜説明する。世界史および高校生程度の理系科目の理解があることが望ましいが、特に予備知識は問わない。			
都市と環境	人々が集まり、建物が密集する都市。多くの問題を抱えながらも都市は存在する。本講座では、都市に特有の環境を、水や大気、物質、エネルギー、生物などの自然科学的な視点で描きつつ、都市と農村、過去と現在などの対比も行うことによって、周辺地域とのつながりの中で存在する都市の特徴を明らかにする。地球環境問題が大きく取り上げられるようになってからは、環境負荷の少ない持続的な都市も模索されている。それらも紹介しながら現代の都市を環境の側面からとらえ直し、これからの都市はどうあるべきか、新しい都市像を描いていきたい。			

自然科学知	生活空間デザイン論	生活する空間を設計する、とはどういうことなのか、そのことを建築家による生活空間設計の実践諸例を通してさまざまな考えていくこと、このことが本講義の目的です。本講義では、設計（conceptの創案→designの諸相の展開）の＜根拠＞への問いがみなさんに生まれはじめることを目指すとともに、その＜根拠＞への問いが現代社会を問う問いであるということ、現代思想の根とつよく関係する問いであるということを知るようになることも目指します。	
	感性デザイン論Ⅰ（ポップカルチャー）	ひとは個々の感性によって、ファッション、インテリア、プロダクト・デザイン等、生活にかかわるデザインを制作・選択している。 この授業では、生活デザインを創造することや選択すること、ひとの感性との関係に着目し、特に日本の少女文化をたどるなかで、身近な生活デザインが、日本人女性の思考や生き方にどのように関わってきたのかを学ぶ。	隔年
	感性デザイン論Ⅱ（ファッション文化史）	現代社会において、過剰なまでに氾濫するモノを選択するうえで、デザインは大きな要素を占めている。現代だけでなくひとはつねに新しいデザインを求めてきた。インテリア、ファッション等においても、デザインはわたしたち消費者を刺激する強い力といえる。 この授業では私たちにどうもつとも身近なファッションデザインをとりあげ、特に若者の日常生活から発生・流行した“ストリート・ファッション”に注目し、戦後のファッションの歴史と、彼らの価値観の変化、および若者を取り巻く環境の影響について考察する。	隔年
	生活とファッション	生活の中には様々な「ファッション」が渦巻いている。「ファッション」という言葉に包括される事象を細かく具体的に分類し、生活にどのような影響を与えているか、また、どういった目的で生活に利用しているか、されているかを理解する。特に、昨今マナーについての理解が希薄となっている若者層に「ファッション」という視点を通して、TPOに即した常識力を獲得させることを重視する。	隔年
	食品加工・商品学	食生活に占める加工食品の割合は年々増加し、加工食品なしに食生活を営むことは、現代では不可能に近い。資源の有効利用や新食品素材の開発と共に、効果的な保存法についても積極的に考える必要がある。この講義では食品の加工原理や加工工程、保存法とその原理、食品の包装、加工食品の規格や表示などについて、農産、水産食品、嗜好品などの例を解説し、さらにさまざまな食品の保存法を紹介、最後に加工食品の商品化とその問題点を検討する。	
	調理学概論（含厨房機器・設備）	調理に必要な基礎知識を食品の調理性と調理操作の面を中心に科学的な裏付けとともに学び、人体に対する栄養、安全面への影響や評価についても理解することを目標とする。また、嗜好を満たしつつ栄養素の適切な摂取が可能な食事を実現していくための食事計画の基礎を学び、心身ともに健康で望ましい食生活の設計が実践できることを目指す。また、調理には非加熱操作と加熱操作があるが、それらの調理操作を理解したのち、調理設備、調理機器や調理に用いるエネルギー源などについて解説する。	
言語知	外国語（初級英語Ⅰ）	The purpose of this course is for students to improve their English reading skills while gaining insight into aspects of society around the globe. Students will apply the knowledge gained from reading exercises to a variety of tasks using all four English skills. 本講義の目的は、世界の様々な社会の側面に対する洞察力を養い、英語の読解力の向上を目指すことである。受講学生は、英語の4技能全てを用いながら、読解演習から様々な課題をとおして得た知識の応用力を高める。	
	外国語（初級英語Ⅱ）	The purpose of this course is for students to continue to improve their English reading skills while gaining further insight into aspects of society around the globe. Students will apply the knowledge gained from reading exercises to a variety of tasks using all four English skills. 本講義の目的は、世界の様々な社会の側面に対する深い洞察力を養い、英語の読解力のさらなる向上を目指す。受講学生は、英語の4技能全てを用いながら、読解演習から様々な課題をとおして得た知識の応用力を高める。	
	外国語（初級独語Ⅰ）	ドイツ語の発音・基本的文法を学び、日常会話に必要な表現力、理解力（読む、書く、聴く、話す）を養う。また、単に語学的な面だけではなくドイツ語圏諸国に関することがらをビデオ、テープ等を使用して紹介してゆく。	
	外国語（初級独語Ⅱ）	ドイツ語の発音・基本的文法を学び、日常会話に必要な表現力、理解力（読む、書く、聴く、話す）を養う。また、単に語学的な面だけではなくドイツ語圏諸国に関することがらをビデオ、テープ等を使用して紹介してゆく。	
	外国語（初級仏語Ⅰ）	①これまで学んできた英語という外国語に加え、フランス語を学習することで、英語圏以外の国の存在を肌で感じ、世界の複数性を理解する。②フランス語4技能のもっとも初歩的な基礎を確実に学ぶことで、その後の興味に応じて、自分で学習できる力を身につける。③フランス語を学ぶことで、その根底にある文化・社会・芸術・歴史に親しみ、大学で学ぶさまざまな学問への関心の幅を広げると同時に、国際的な知識をより豊かなものにし、専門的研究のなかで上手に役立てる。	
	外国語（初級仏語Ⅱ）	①これまで学んできた英語という外国語に加え、フランス語を学習することで、英語圏以外の国の存在を肌で感じ、世界の複数性を理解する。②フランス語4技能のもっとも初歩的な基礎を確実に学ぶことで、その後の興味に応じて、自分で学習できる力を身につける。③フランス語を学ぶことで、その根底にある文化・社会・芸術・歴史に親しみ、大学で学ぶさまざまな学問への関心の幅を広げると同時に、国際的な知識をより豊かなものにし、専門的研究のなかで上手に役立てる。	
	外国語（初級中国語Ⅰ）	中国語の発音、基礎的な語彙、文法、表現を学び、簡単なコミュニケーション能力を身につけるとともに、言語表現の背景にある中国の文化、社会、生活について理解する。特に実生活に使用できる基礎的な表現の習得に重点を置き、積立式に語彙、文法、表現力を習得できるように、各課においては、既習の内容を取り入れた応用的な会話練習を展開する。視聴覚教材の使用、役割練習などを通じて、会話の行われる場面を再現して、会話習得の効果を上げる。	
	外国語（初級中国語Ⅱ）	中国語の基本的文法と日常会話の初歩を学びながら、読解力表現力の基礎を養う。	
	外国語（初級韓国語Ⅰ）	この授業は初めて韓国語を学ぶ人のための入門クラスで、韓国語の基礎的コミュニケーション能力を獲得することをその目的とする。まず初級Ⅰでは、人工語である韓国語の創出起源を理解し、表音文字である各文字の発音と表記の熟達に努める。とくに、文字の発音に重点を置きながら、基本的な文法と語彙を用いて、簡単な日常会話を行う。主な内容は、動詞・形容詞・存在詞・指定詞（用言＝述語）の区分と語尾の基本的な変化、すなわち、丁寧語・否定文・疑問文・助詞の使い方などである。必要に応じて映画・K-popといったメディアも活用し、学習した言語を早く使ってみる。	
	外国語（初級韓国語Ⅱ）	韓国語初級Ⅱでは、初級Ⅰで学んだ成果をもとに、基礎的な日常会話の能力を獲得する。また、日本語との対照言語学的観点からの理論的な面白さを満喫する一方で、実際に使える実践的な表現能力の養成を目指す。初級Ⅱでは、とくに、基本的な文法と語彙をもとに、読み・書き・聞き・話す四機能をバランスよく伸ばしていく。主な内容は、初級Ⅰで学んだ用言の基本的な活用に加え、過去形、数詞、よく使う言い回しなどである。Ⅰと同様、必要に応じて映画・K-popといったメディアも活用する。	

言語知	外国語（中級英語Ⅰ）	This course is designed to improve reading abilities. Students in this class will improve reading fluency as they tackle texts about a variety of topics, from the Internet to the environment. Students will increase their vocabulary and their familiarity with English idioms and phrasing. 本講義の目的は、読解力の向上である。受講学生は、インターネットや色々な題材から様々な主題を扱ったテキストに取り組みながら、正確な読解力を養う。学生は、英語の語彙を増やし、イディオムや語句を習得することができる。	
	外国語（中級英語Ⅱ）	This course is designed to further improve reading abilities. Students in this class will improve reading fluency through exposure to a variety of written texts, from essays about entertainment to longer works of fiction. 本講義は、さらなる読解力の向上を目指す。受講学生は、娯楽の読み物から中編、長編小説まで、様々なテキストを精読することで、確かな読解力を身につける。	
	外国語（中級中国語Ⅰ）	この授業は、初級を終えた者を対象とし、基本的な文法や単語、会話を復習しながら、次の学習段階へ上がるための基礎固めをする。この授業では、正しい発音ができるように徹底した指導を行なうとともに、基礎文法を学びつつ読解力をつけ、更に、書く、聞く、話すなど、中国語の総合的な能力を高めていく。授業は、選定したテキストを使い、その内容に沿って進めていくが、毎回の内容を確実に身に付け、応用できるようにするために、様々なトレーニングを行なっていく。具体的には、毎回学習した文法や例文のパターンを使って、自分で文章を書いたり、それを口頭で発表したりする練習を行う。	
	外国語（中級中国語Ⅱ）	この授業は、前期よりレベルアップした語彙や文章、文法および表現などを学び、話す、読む、聞く、書くなどの中国語の総合能力をさらに伸ばしていく。授業では、語学だけではなく、その背景にある中国の文化や現代社会を理解し、より生きた中国語を学ぶために、テキストの内容を進めていくと同時に、読みやすい中国語の文章や時事記事を取り入れて、語彙のチェックや音読練習、ならびに要約および文章構成の理解などの練習も行なう。また、中国語の映画、ビデオなど視聴覚教材も使用し、中国語の聞く、読む能力を養成すると同時に、それらの内容を自分でまとめて口頭で発表するという話す能力も鍛えていく。	
	外国語（中級韓国語Ⅰ）	この授業は韓国語初級ⅠⅡの講義を履修した人のためのクラスで、韓国語を総合的に学ぶことをその目的とする。韓国語中級Ⅰでは、初級で学習した発音や基礎文法、語彙をさらに発展させながら、文法（尊敬語・略待上称形・連体形など）、会話などを学ぶために、とくに、単調な反復・暗記になりがちな学習方法を止揚して、いくつかのシチュエーションを想定し、そのシチュエーションに即した文法と語彙、さらに韓国社会の事情などを関連づけて考察していく。また、映画やK-popなどの資料を必要に応じて使うことで、韓国文化への理解をも深めていく。	
	外国語（中級韓国語Ⅱ）	この授業は韓国語中級Ⅰを履修した人、ないしはそれに準ずる言語能力を評価された人のためのクラスである。中級Ⅱでは、中級Ⅰまで学んだ基本的な用言の活用や言い回しに加えて、さらなる語彙や慣用句で構成されたシチュエーション別会話を引き続き行う一方、韓国の新聞記事、コラム、漫画などの読解にも力を入れていく。こうして外国語としての韓国語、外国文化としての韓国文化に接することで、自国文化と自国語、そして自分の社会を見つめ直す機会にしたい。	
	外国語（初級日本語Ⅰ）	本授業では、大学生活をおくるために必要な日本語力を身につけ、大学の様々な場面において、日本語を使用してその場面の目的を達成できるようになることを目的とする。本授業では、特に「話す」技能をとりあげ、先生への依頼、許可願、事務での手続き、友人との約束など大学生活において経験すると予測される場面において、どのように日本語で話すのかを学ぶとともに、母語との違いについても考察し、異文化理解へとつなげることもめざす。また、「話す」練習だけでなく、「読む・聞く・書く」技能も必要に応じてとりあげる。	
	外国語（初級日本語Ⅱ）	本授業では、大学生活をおくるために必要な日本語力を身につけ、大学の様々な場面において、日本語を使用してその場面の目的を達成できるようになることを目的とする。本授業では、特に「書く」技能をとりあげ、レポート、論文、先生や友人へのメール、事務での手続きなど大学生活において経験すると予測される場面において、どのように日本語を使用するのかを学ぶとともに、母語との違いについても考察し、異文化理解へとつなげることもめざす。また、「書く」練習だけでなく、「話す・聞く・書く」技能も必要に応じてとりあげる。	
	外国語（中級日本語Ⅰ）	本授業では、初級日本語ⅠおよびⅡの理解力を確認しながら、大学生活において必要な日本語力の向上をめざす。	
	外国語（中級日本語Ⅱ）	本授業では、中級日本語Ⅰの理解力を確認しながら、レポートや論文の書き方、論の展開の仕方などを取り上げながら、実践的能力の向上をめざす。	
スポーツ科学知	スポーツ科学Ⅰ	スポーツ科学Ⅰでは、スポーツを歴史的、社会的、生理的、心理的な視点から理論的に学習する。その内容として、高校までの学習内容を発展させながら、人間の身体と健康について学ぶ。また、部活やサークルでスポーツを行なう学生が少なくないことから、特にスポーツが心身にもたらす影響と効果的なトレーニングについて学習し、安全にスポーツを行なう方法について学ぶ。さらに、発達段階に応じた身体活動について必要な知識理解を深めていくことで、適切な判断と行動を身につけ、生涯を通じてスポーツによりよく親しめるようになる。	
	スポーツ科学Ⅱ	スポーツ科学Ⅱでは、スポーツ科学Ⅰで学んだ理論を生かし、実践を通して生涯に渡り自立的な運動者となることを目指す。その内容として、バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・ニュースポーツ等、各種目のルールや技術獲得の方法を理解し、工夫された練習を通して技術を獲得する。また、技術獲得の過程で、仲間と協力して教えあいや作戦を立てることによりスポーツの楽しさや爽快感を体験する。さらに、自分の体力を知り、体力を高める生活を心がける。	
	スポーツ科学Ⅲ（課外活動等）	スポーツ科学Ⅲでは、豊かな自然環境のなかで、自然を活用しながら、身体や五感を使って体験的に活動することを目的とする。内容として、適切な事前計画を自ら立案し、キャンプ、ハイキング、サイクリング、オリエンテーリングなどの各種の活動を集団で行う。正課外の活動には危険が伴いがちであるため、自然の中で安全に活動するための知識を学ぶと共に、集団の中で責任ある行動を身につける。このような一連の活動を通して、豊かな情操と健全な心身の育成を図ることを目指す。	
	スポーツ科学Ⅳ（スキー・スケート等）	スポーツ科学Ⅳでは、ウィンタースポーツの代表格であるスキー・スケート等について、心構えや身のこなしなどのトレーニングを実施する。またウィンタースポーツの初歩から上達のために本格的にスキーにチャレンジしたい人まで個人のレベルに対応しながら、安全で合理的な実践能力を育てる。さらに、ウィンタースポーツの醍醐味を味わうと共に、お互いが協力し合って集団生活の楽しさを体験しながら生涯スポーツとして楽しむようになることを目指す。	
	スポーツ科学Ⅴ（水泳等）	スポーツ科学Ⅴでは、水遊び、浮く・泳ぐ運動の運動特性および水泳の技術的特性について学習し、水中レクリエーションを通して水中での身体をコントロールする感覚を身につける。それらの実践を通して個々の技能の向上を図りながら、水中における各種運動や4泳法の基礎的な泳ぎ方を学習する。授業ではレベル別に小グループに分け、それぞれのレベルに合わせて各自の泳ぐ能力の向上を目指す。また、水泳の心得や救助法・救急法についても学習し、水泳が生涯楽しめるスポーツとなる機会を提供する。	

共通教養科目 (C2)  専門科目 (C3)  文学分野  英語系	スポーツ科学知	スポーツ科学VI (フィットネス)  スポーツ科学VIでは、身体的、精神的かつ社会的にも総合的に良好な状態であるために必要とされる科学的知識を理解する。また、自分の身体や生活について考え見つけ直す機会とし、生活習慣の改善、健康への配慮を喚起すると共に、正しい運動方法・理論並びに安全管理を学び、今後の活動に役立たせるようにすることを目指す。さらに、運動不足の原因と解消方法について考え、生涯を通じて楽しくスポーツに関わり活動水準を高めるための、対象に応じた応用的なトレーニング方法を学ぶ。	
	Introduction to Global Studies	The purpose of this course is for students to gain an insight into the global studies field. (オムニバス方式/全15回) (24. John Herbert/5回) Students can learn about language and global society; (2. 小松正昭/5回) literature, environment and the world; (3. Ronald Klein/5回) and a variety of themes in global studies. 本講義の目的は、グローバル・スタディーズの分野に関する洞察力を養う。(オムニバス方式/全5回) (24. ジョン・ハーバート/5回) 言語や地球規模の社会 (2. 小松正昭/5回) 文学、環境、世界 (3. ロナルド・クライン/5回) グローバル・スタディーズ	オムニバス
	Language Diversity & Society	The purpose of this course is for students to learn about how the language used in society differs depending on factors such as age, gender, region, and situation. Students will consider issues of identity, and consider how different groups use language in different ways. 本講義の目的は、年齢、ジェンダー、宗教、背景のような要因によって、言語が社会でいかに異なって用いられているか、ということを理解する。受講学生は、アイデンティティーの問題を熟慮し、異なった集団がいかに異なった方法で言語を使用しているか、ということを探査する。	
	English in the World	The purpose of this course is for students to learn about the growing diversity of English in the world. Students will discover how the journey of English around the globe has made it so different in each place, and examine the differing roles of English in different parts of the world, touching on themes connected with politics, economics and social studies. 本講義の目的は、世界で広がる英語の多様性について理解することである。受講学生は、地球上での英語の進む道がそれぞれの場所がいかに異なっているか、ということや、世界での異なった場所での異なった英語の役割を精査し、政治、経済、社会学に関係するテーマを扱う。	
	Language & Culture through the Internet	The purpose of this course is for students to discover the ways the Internet is used around the world. This includes the use of blogs, popular websites and search machines, Internet media and social network systems. Students will be asked to consider the impact of the Internet on culture and English language around the globe. 本講義の目的は、世界でのインターネットの利用状況を考察することである。ここでは、ブログ、人気のあるウェブサイト、検索マシン、インターネット・メディアやソーシャル・ネットワーク・システムの使用を含む。受講学生は、世界で文化や英語に及ぼすインターネットの強い影響を検証することが求められる。	
	Language & Culture through Film	Students will examine issues in language, society and culture by focusing on four films set in different countries. The themes introduced in each film are applicable across the globe. Students will therefore apply the knowledge learned about one country to situations in other countries around the world. 受講学生は、異なった国々で撮影された4本の映画に焦点を当て、言語、社会、文化に関する問題を検討する。それぞれの映画で扱われたテーマは世界共通のものである。よって、学生は、映画から学んだある国の状況を、世界中の国々へ応用して考えることができる。	
	British Society & Culture	The purpose of this course is for students to learn about the society and culture of Britain. By examining Britain through a variety of themes, students will be encouraged to make cross-cultural comparisons that will allow them to make decisions about Britain's past, present and future role in the world. 本講義の目的は、イギリスの社会、文化を学ぶことである。受講学生は、様々なテーマをとおしてイギリスを考察し、世界でのイギリスの過去、現在、未来の役割を決定しうる異文化間の比較を検討する。	
	Issues in the Modern World 1	The purpose of this course is for students to discover some of today's major issues facing people around the globe. Students will read and research about these issues, form their own opinions, and then express those opinions using blogs. 本講義の目的は、世界中の人々が直面している今日の主要な問題を精査することである。受講学生はこれらの課題に関するテキストを読み、リサーチをし、自分自身の意見をまとめ、ブログを使ってその意見を表現する。	
	Issues in the Modern World 2	The aim of this course is to stimulate discussion about contemporary issues as they occur in real time throughout the semester. Each week students will report on the most important stories of the week. The topic will require background information which students will research in order to have informed opinions. 本講義では、半期をとおして、今現在起こっている問題を議論する。受講学生は、毎週その週に起こった最も重要な事柄を発表する。学生は、自分たちの意見を表現するために、選んだ主題の情報や背景をリサーチする。	
	American Society & Culture	This course will look at America through its cultural history, where relevant issues, such as Black/White relations, Federal/States rights, labor/management, progressive/conservative issues continue to be contested. Cultural history also includes inventions, fashions, music and entertainment of the times. 本講義は、現在なお議論が続くアメリカ合衆国における人種問題、連邦政府と州政府の関係、労使問題、革新派と保守派の議論等の現代に密接する問題を扱い、アメリカの文化的歴史を概観することである。	
Intercultural Communication	The aim of this course is to provide topics in cultural communication issues that affect all cultures. Each topic requires students to read, think critically, and react to what they have learned. Topics allow students to consider the implications for communication between differing cultures. 本講義の目的は、全ての文化に影響を及ぼす文化的コミュニケーションにかかわる主題を扱う。学生は、各主題の作品を読み、批評し、彼ら自身が学んできたことについて熟考する。また受講学生は、異文化コミュニケーションと密接に関係する課題に取り組む。		

専 門 科 目 （ C 3 ）  文 学 分 野  英 語 系  G l o b a l  S t u d i e s  i n  E n g l i s h	Developing Global Thinking	<p>Students will study a particular country in depth, reporting to the class on a variety of cultural themes. Topics will include: political history, economics, education, religion, marriage, food, and women's issues. The aim is to foster global thinking by viewing the world from a different cultural perspective.</p> <p>受講学生は、授業で様々な文化的なテーマに関する発表を行うことで、特定の国を深く考察する。主題には、政治的歴史、経済、教育、宗教、結婚、食文化や女性に関する問題を含む。目的は、異なった文化的展望から世界を観察することで、国際的な思考力を養うことである。</p>	
	Religions & the World	<p>All religions try to answer questions basic to all humans: Why are we here? What happens when I die? How shall I live my life? Religions have answered these basic questions in different ways. This course will provide students with an overview of the five major religions of the world and several minor ones.</p> <p>全ての宗教は、全人類の根本的な問題に対する解決の試みである。例えば、我々はなぜここにいるのか？死んだらどうなるのか？いかに生きるべきか？宗教はこのような基本的な疑問に対し、それぞれ異なった方法で答えている。本講義では、世界の主要な五大宗教と、少数派によるいくつかの宗教を概観する。</p>	
	Women & the World	<p>Students in this course will create an Index of women-related issues in their chosen countries. Each class students will report their findings from their designated countries. Statistics, policies, and information will be entered into an ongoing Index, which will compare countries.</p> <p>本講義の受講学生は、自分自身で選択した女性にかかわる問題のインデックスを創作する。毎週学生は、自分たちの選んだ国から発見したことを発表する。統計、政策、情報は進められているインデックスに加えられ、それぞれの国々を比較することができる。</p>	
	Environment & Society	<p>The purpose of this course is to explore the relationship between human society and the environment. We will examine critical issues about the use and preservation of natural resources, and ties between economics and the environment, as well as environmental justice, the nuclear industry, the impact of war on the environment, and global warming/climate change.</p> <p>本講義の目的は、人間社会と環境の関係を探ることである。授業では、環境における正義、原子力産業、環境に与える戦争の影響、そして地球温暖化と気候変動の問題と同様に、天然資源の利用と保存、また経済と環境の結びつきに関する重要な問題を精査する。</p>	
	Literature of the Environment	<p>The purpose of this course is to introduce students to the study of environmental literature. This course is designed to deepen students' understanding of literature as well as their appreciation of the environment. Writers from varied backgrounds with differing concerns (climate change, resource exploitation, nuclear issues, environmental justice) will be studied.</p> <p>本講義の目的は、環境文学の理解である。本講義は、受講学生の文学の理解だけでなく、環境に対する鋭い洞察力を養う。異なった主題（気候変動、天然資源の開発、核問題、環境的正義）を持つ様々な背景を持つ作家の作品を扱う。</p>	
	Culture Studies	<p>The purpose of this course is to introduce students to the field and theory of cultural studies, and in particular the way identity is shaped by social class, gender and sexuality, ethnicity and race. Students will learn about how culture and identity are expressed and represented in art, film, literature, and music.</p> <p>本講義の目的は、カルチュラル・スタディーズの分野と理論、特に、社会的階級、ジェンダー、性、民族性や人種によって形成されたアイデンティティーを理解することである。受講学生は、芸術、映画、文学、音楽において、いかに文化とアイデンティティーが表現されているかを考察する。</p>	
	Global Citizenship	<p>This course is designed to acquaint students with the possibilities and perils of living in a global age. Students will examine how in recent times the world has changed politically, technologically, economically, environmentally and culturally, and to see what those changes mean for living as a global citizen.</p> <p>本講義の目的は、グローバル・エイジにおける生活方法の可能性と危険性を理解することである。受講学生は、現代いかに世界が政治的、技術的、経済的、環境的、文化的に変化しているかを考察し、これらの変化がグローバル市民としての生活に何を意味するか、ということを探求する。</p>	
	World Literature	<p>The purpose of this course is to compare the literature produced by writers from around the world. This course is designed to deepen students' appreciation for literature while helping them appreciate the global role played by Japanese literature.</p> <p>本講義の目的は、世界中の作家による文学を比較することである。本講義は、受講学生の文学への鋭い洞察力を養い、日本文学の世界的役割の考察を行う。</p>	
	Emerging Literatures	<p>The purpose of this course is to explore works of literature produced by writers from the developing world and former colonized territories. This course is designed to deepen students' appreciation for literature as well as to broaden their understanding of different cultures and ways of life in Southeast Asia, Africa, and the Americas.</p> <p>本講義の目的は、発展途上国や、かつて植民地であった地域出身の作家によって書かれた文学を探求することである。本講義は、受講学生の文学に対する鋭い理解を深めるだけでなく、東南アジア、アフリカ、アメリカ大陸における異なった文化や生き方に対する幅広い見識を培う。</p>	
	Issues in Japan Studies	<p>The purpose of this course is for students to critically consider some of the differing elements that come together to form current Japanese society. Students will study not only the internal dynamics of Japanese society, but also consider Japan's role in the world.</p> <p>本講義の目的は現在の日本社会を形成する様々な要因を考察することである。受講学生は日本社会の内部にある原動力だけではなく、世界での日本の役割も熟慮する。</p>	
	Business English	<p>The purpose of this course is to introduce students to the English used in a business setting. The class will prepare students for the speaking, writing, and listening tasks associated with the business world. Class discussion will play a major role in the weekly lessons.</p> <p>本講義の目的は、ビジネス場面で使われる英語の修得である。授業では、ビジネス界に関連する、スピーキング、ライティング、リスニングの課題が出される。毎週クラス討論を主な活動として行う。</p>	
	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship I	<p>The purpose of this course is to prepare students for their fieldwork, volunteer program or internship.</p> <p>本講義の目的は、フィールドワーク、ボランティア、インターンシップへの取り組みである。</p>	

専 門 科 目 (C3)	英 語 系	英 米 文 化	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship II	The purpose of this course is for students to actively participate in their fieldwork, volunteer program or internship, and to report the results of their experiences. このコースの目的は、学生がフィールドワーク、ボランティアやインターンシップに積極的に参加し、その結果を報告することである。	
			20世紀アメリカ文学研究	映画と短編(日本語と英語)を通して20世紀のアメリカ文学を考える。20世紀に生きた人たちが、どのように生きようとしているか、生きて行く中で、どのように扱われているかを、20世紀に活躍したアメリカの作家たちの作品を通して、考える。あわせて、アメリカ文化、歴史、社会を考える。	隔年
			19世紀アメリカ文学研究	本講義では、19世紀から20世紀初頭の代表的アメリカ人作家及び彼らの代表作品を概観する。作家の略歴、時代背景、社会思想、そして代表作を学び、作品の抜粋(原文)を読んでいく。アメリカ文学史上における個別的な細目と歴史の流れとのダイナミックな関係を理解し、その時代のアメリカ人の精神性を汲み取ることを試みる。	
			アメリカの夢考察	アメリカの文化について学びながら、英語力の向上、及び、調査・発表の力の向上を図る。 1. Orientation 2. American Food① 3. American Food② 4. Baseball① 5. Baseball② 6. The World of Disney① 7. 映画鑑賞 8. The World of Disney② 9. Hollywood① 10. Hollywood② 11. The Statue of Liberty① 12. The Statue of Liberty② 13. The Melting Pot① 14. The Melting Pot② 15. レポートの書き方	
			アメリカ文学文化の比較的アプローチ	現代アメリカ文化に関して学びながら、同時に英語の読解力を高める。 1. Orientation 2. アメリカの音楽① 3. アメリカの音楽② 4. ロデオ① 5. ロデオ② 6. 交通関係① 7. 交通関係② 8. 教育① 9. 教育② 10. インディアン① 11. インディアン② 12. ディズニー① 13. ディズニー② 14. ハリウッド① 15. ハリウッド②	
			20世紀アメリカン・スタディーズ	映画と短編(日本語と英語)を通して20世紀のアメリカ文学を考える。あわせて、アメリカ文化、歴史、社会を考える。特に、個人がどのように扱われているかに焦点を当てて考える。 1. Orientation 2. "Long Black Song" 3. "Long Black Song" 4. "Long Black Song" 5. The Crucible映画鑑賞 6. The Crucible 7. The Crucible 8. Human Stain 9. Human Stain 10. Human Stain 11. "Hands"の英語での鑑賞(3回) 12. "Hands" 13. "Hands" 14. 追加作品鑑賞 15. レポートの書き方	隔年
			アメリカ黒人の歴史と文化	アメリカ黒人の歴史と文化を、歴史を遡ることから始め、苦難の歴史を経て、現代を生きる姿を考えていく。 1. Orientation 2. 映画① 3. 映画② 4. アフリカからアメリカへ 5. アメリカでの奴隷生活 6. 反奴隷の戦い① 7. 反奴隷の戦い② 8. 反奴隷の戦い③ 9. King of "I Have a Dream"観賞 10. 文学にみられる差別①(和訳観賞) 11. 文学にみられる差別② 12. 文学にみられる差別③ 13. 映画鑑賞① 14. 映画鑑賞② 15. レポートの書き方	隔年
			ユダヤ系アメリカ人の歴史と文化	ユダヤの歴史を辿りながら、ユダヤの発祥、苦難の歴史、その中で団結して立ち上がる彼らの姿を学ぶ。 1. Orientation 2. 映画① 3. 映画② 4. ユダヤの根源から発展 5. ユダヤの苦悩: 流浪の繰り返し 6. ユダヤの文化の特徴(抑圧の根拠は?) 7. ボグロム(ヒットラーと虐殺)と移民 8. アメリカにおけるユダヤ人の活躍とRed Purge 9. 映画① 10. 映画② 11. ユダヤ系アメリカ人の文学 12. ユダヤ系アメリカ人の作品① 13. ユダヤ系アメリカ人の文学② 14. ユダヤ系アメリカ人の文学③ 15. レポートの書き方	隔年
			アメリカ文化とジェンダー	本授業では、演習形態を取る。19世紀以降のアメリカで活躍した女性を取り上げ、各々の略歴、時代背景、社会思想、そして代表作についての講義の後、グループディスカッションを行なう。歴史的、地理的、人種的な観点も含めてジェンダーについて考え、アメリカ文化とジェンダーの関係についての理解を深めることを授業の目標とする。授業では、6名の女性(マーガレット・フラー、ハリエット・ビーチャー・ストウ、ルイザ・メイ・オルコット、ケイト・ショパン、ヒサエ・ヤマモト、トニ・モリスン)を扱う予定である。	
			カルチュラル・スタディーズ	「文化」を常に流動的、生産的、政治的なものとして捉えながら、カルチュラル・スタディーズの実践を行い、日常の事柄を批判的に読む能力を養う。マテリアルとしては文学作品や映画、理論、批評などを扱う。題材は多岐に渡るが、それぞれを自分の問題として考える視座を養う。授業計画は以下の通り。 第1回「文化」とは何か?、第2回他者-植民地主義Ⅰ、第3回他者-植民地主義Ⅱ、第4回メディア、第5回SF-身体、第6回大衆文化、第7回都市と田舎、第8回映像と表象、第9回性Ⅰ、第10回性Ⅱ、第11回 歴史と語りⅠ、第12回歴史と語りⅡ、第13回民族と抵抗、第14回人種とイデオロギー、第15回階級闘争とヘゲモニー	
			イギリス風物誌	イギリスにおける様々な社会的、文化的事項を概観しながら、文化の多様性に触れ、物事を多角的な視点で捉える能力を養う。授業計画は以下の通り。 第1回イギリス/イギリス人とは?、第2回地理と風土、第3回歴史と人種、第4回王室と政治、第5回階級、第6回宗教、第7回食べ物、第8回住宅、第9回余暇とエンターテインメント、第10回スポーツ、第11回教育システム、第12回都市と田舎、第13回芸術、第14回音楽と映画、第15回ファッションと若者文化	
			児童文学とファンタジー	『不思議の国のアリス』などの子供向けに英語で書かれたファンタジー作品を読み、ファンタジーについて書かれた批評やファンタジーを扱う映画などを見ることで、ファンタジーの世界がどのように現実を織り込みながら、工夫された表現やイメージで構成されていくかについて考える。また、個々の子供向けファンタジーの作者たちがどのようなきっかけや動機からそれらのストーリーを作りだしたかを見ることで、作者がファンタジーを通して何を求めていたかについて考える。そして同時に、ファンタジーの読者がファンタジーを読むことで得られる体験の意味について考える。授業で扱える作品は数に限りがあるため、授業外で受講生は各自ファンタジー作品を読み、読書レポートを提出する。最後に、受講生は授業で学んだ内容を元にしながら、短いファンタジー作品を創作してもらう。そして、その作業を通して気付いたことなどをレポートにまとめる。	
イギリス文学文化の比較的アプローチ	イギリスにおける文学や文化を、主に日本や他のヨーロッパ諸国における文学や文化と比較、考察し、文化の多様性を学ぶ。その際、英語文献の多読を通して、英語力も養う。また、日本語の文学や文献を多読することで、文献の読解力を高める。授業計画は以下の通り。 第1回比較文学、文化の流れ、第2回小説の勃興Ⅰ-イギリスと日本、第3回小説の勃興Ⅱ-イギリスと日本、第4回書簡体小説Ⅰ-イギリスとフランス、第5回書簡体小説Ⅱ-イギリスとフランス、第6回近代劇Ⅰ-イギリスと日本、第7回近代劇Ⅱ-イギリスと日本、第8回近代劇Ⅲ-イギリスとフランス、第9回自然主義文学Ⅰ-イギリス、フランス、日本、第10回自然主義文学Ⅱ-イギリス、フランス、日本、第11回 耽美主義-イギリス、フランス、日本、第12回モダニズムと短詩Ⅰ-イギリス、アメリカ、日本、第13回モダニズムと短詩Ⅱ-イギリス、アメリカ、日本、第14回現代文学Ⅰ-イギリスと日本、第15回現代文学Ⅱ-イギリスと日本				

専門科目 (C3)	文学分野	英語系	英米文化	レズビアン・ゲイに関する詩や小説、批評、映画などを用いて、レズビアン・ゲイの表象や言説からセクシュアリティの問題を考察する。題材としてはギリシャの少年愛からグローバリゼーションまで、さまざまなものを扱う。授業計画は以下の通り。 第1回レズビアン・ゲイ・スタディーズ/クィア・スタディーズとは？、第2回レズビアン・ゲイの表象、第3回少年愛、第4回語り手、第5回「男性」と「女性」？Ⅰ、第6回「男性」と「女性」？Ⅱ、第7回マスキュリティと男同士の絆、第8回フェミニズムとレズビアン、第9回同性愛パニック、第10回サブカルチャーの暗号、第11回 ヴィジュアル、第12回パフォーマンス、第13回異装とパロディ、第14回 エイズ、第15回グローバリゼーションとセクシュアリティ		
				イギリス演劇と社会	イギリスにおける演劇作品の講読や上演の鑑賞を通して、英語力を養いながら、イギリス演劇と社会の関係を考察する。最初にイギリス演劇の流れを見た後、ルネサンスの演劇を2つ、18世紀、19世紀の演劇を2つ読むことで、それぞれの英語の特質や文化的背景を考える。扱う作品は、Doctor Faustus、Hamlet、The School for Scandal、The Importance of Being Earnestとする。これらの上演史も考察することで、各時代のイデオロギーも考察する。	隔年
				現代の批評と理論	ニュー・クリティシズムから現代の批評理論までの流れを概観しながら、代表的な理論家のテクストを読み、歴史的、文化的な側面からそれぞれの特徴を明らかにする。また、それぞれの批評理論に潜む言説を考察する。授業計画は以下の通り。 第1回批評と鑑賞、第2回T. S. Eliot, Wimsatt and Beardsely、第3回Ferdinand de Saussure、第4回Roland Barthes、第5回 Gerard Genette、第6回Jacques DerridaⅠ、第7回Jacques DerridaⅡ、第8回Jacques LacanⅠ、第9回Jacques LacanⅡ、第10回Michel FoucaultⅠ、第11回Michel FoucaultⅡ、第12回Judith Butler、第13回Alan Sinfield、第14回Edward Said、第15回Jean-François Lyotard	
				イギリスの女性	前半は、イギリスの歴史の中で女性がどのように扱われてきたかを見る。イギリスにおける女性の歴史はヨーロッパ文化の根幹となる古代ローマ・ギリシャの文化からの影響と共に、国教であるキリスト教が深くかかわっている。父権的なキリスト教の世界で、どのようにして女性たちが不利な立場に立たされ、長い歴史の間に苦勞を強いられてきたか、どのような悲しみや怒りの声が発せられてきたか、そして20世紀に入ってどのような流れで女性たちの立場や権利が少しずつ改善されていくかについて学ぶ。後半では、現代のイギリスにおける女性の立場について、文献や文学、映画などを使って考える。	
				イギリス短編小説	イギリスで活躍した作家によって書かれた短編小説を読むことで、ネイティブのために書かれた英語に取り組み、語彙力と読解力を上げる。また、同時に小説の背景に存在するイギリスの歴史や文化、価値観などに触れ、イギリスという国と国民性に対する理解を深める。さらに、文学作品を扱うことで、文学の楽しみ方、行間の読み方などを学ぶ。キャサリン・マンスフィールドはニュージーランドで生まれ育った作家だが、出版活動を主にイギリスで行ったために、この授業では彼女の作品も取り上げることにする。	
				映像と絵画から見るイギリス文学	この科目では、イギリス文学と文化を理解する手段として映画などの映像や絵画・写真などの視覚的ツールを利用する。イギリスの古典文学であるオースティンの『プライドと偏見』と『エマ』、ディケンズの『大いなる遺産』などを使う。これらはいずれも作品が書かれた当時の時代背景やストーリーを忠実に映像化したものと、時代を現代(20世紀)に移してストーリー自体も時代に合わせて書きかえた版の映画とが存在する。特に『ブリジッド・ジョーンズの日記』はヘレン・フィールディングが現代版『プライドと偏見』を描くという取り組みで1996年に出版したものである。また、『クルーレス』と『大いなる遺産』は時代を現代に移しただけでなく、オリジナルではイギリスだった舞台もアメリカに移行している。このように描きかえられた作品を原作と比べることで、オリジナルと映画でどのようにメッセージが共有されているか、もしくはずれているか、そしてその理由は何かについて考える。	
				イギリスの都市と田舎	イギリス人にとって都市と田舎とはどのようなイメージや意味を持つ場所なのかを考える。そのために、イギリスの都市や田舎の成り立ちの簡単な歴史を見る。イギリスの田舎には貴族や豪族がカントリーハウスを持ち、季節によってロンドンと田舎とを行き来した。そのような歴史がイギリス人にどのような影響を与え、都会と田舎のイメージを作り上げて行ったかを見る。また、商業や産業の発展とともに栄えた都市に対してイギリス人が持つイメージについても考える。最後に、イギリスのいくつかの都市や田舎それぞれの地方色を学ぶ。	隔年
				現代のイギリス文学	スーザン・ヒルなどの現代イギリス作家の作品を中心に扱う。原文の英語を読むことで読解力と語彙力を上げると共に、文学作品を扱うことで文学の読み方を学ぶ。また、1970年代前後に書かれた作品を扱うことで、現代(20世紀)のイギリスに生きる作者がどのようなものを描き、どのようなメッセージを伝えようとしたかについて考える。ストーリーの背景にあるイギリス独特の文化や価値観や風土などに注目すると共に、人間の孤独を扱う短篇では、孤独という感情が現代の日本人にとってどれくらい理解・共感できるものなのかについて考える。そのことにより、現代社会における文学の役割についても考えてみる。	隔年
				英米詩の世界	英米の代表的な詩を講読し、英語力を養いながら、英米の文化を考察する。また、テクストを批評的に読む能力を養う。扱う題材は以下の通り。 英米詩の諸相、ルネサンスのソネット—Wyatt, Sidney, Shakespeare、形而上詩人—Donne, Herbert, Crashaw, Sons of Ben—Jonson, Herrick, Roundheads—Milton, Marvell, Neo Classicism—Dryden, Pope, The Graveyard School—Blair, Young, Gray, Ode—Cowper, Collins, Romanticism—Blake, Wordsworth, Coleridge, Byron, Shelly, Keats, American Romanticism—Poe, Emerson, Longfellow, Whitman, Dickinson, Victorian age—Tennyson, Arnold, Modernism—Pound, Eliot, Cummings, After World War II—Ginsberg, Hughes, Plath	隔年
				19世紀のイギリス文学	19世紀の文学とその社会的背景を見ることで、当時の文学が社会に深く結びついていた様子を学ぶ。特に小説が当時の社会の動きや社会的問題、社会の中での個人の存在のあり方などを写しだす様子に注目する。そして、当時の社会における小説の役割について考える。また、同時に受講生は原本からの引用を読むことで英語力を上げ、ナラティブを分析することで文学作品の読み方も学習する。	
英米文学文化の学び方	1. 教養としての英米の文学を学ぶ。また、2. 発展的に作品を考えることを学ぶ。実際の授業は次の通り。1. オリエンテーション2. 英米文学の研究の仕方 3. 英米文学の研究の仕方 4. 英米文学の研究の仕方 5. 英米文学の研究の仕方 6. 作品解釈の練習：映画鑑賞 7. 作品解釈の練習：映画鑑賞 8. 作品解釈の練習 9. 作品解釈の練習 10. 作品解釈の練習 11. 作品解釈の練習 12. 作品解釈の練習 13. 作品解釈の練習 14. 作品解釈の練習 15. 復習とレポートの説明(レポートの書き方、実際のレポート参照)					

専門科目 (C3)	文学分野	英米文化	海外英語研修Ⅰ	海外の文化に直接接することで、教養を高める。そのための準備を事前授業として行う。 1. オリエンテーション 2. ホームステイの基礎知識 3. ビザ申請に関して 4. Survival English 5. Survival English 6. Survival English 7. I-20、ビザの申請など 8. 受け入れ証明書 9. Do's and Don'ts 10. 海外旅行傷害保険など 11. TC、Credit card、現金 12. 健康管理、緊急事態対処法 13. 出入国、航空券、そのほか切符他 14. 携行品、Home stay先への手紙、メール、緊急カード提出他 15. 出発直前指導、最終確認		
			海外英語研修Ⅱ	海外の文化に直接接することで、教養を高める。そのための準備を事前授業を踏まえて実際に海外の大学機関での実践を体験する。8月初めより、約1カ月に渡って、海外(主に、アメリカ、イギリス、カナダ)の大学機関において、集中的英語研修を行う。その間の詳細なプログラムは、開催大学機関によって示される。プログラムの基本は、4技能をまんべんなくカバーすることで英語活用能力の向上を図り、生活の面での文化的理解を深めることである。		
			国内英語研修	日本で行われる様々な英語研修プログラムに参加することで、英語力を養いながら、英米の文化に触れる。特に、英語コミュニケーション力を向上させ、様々な状況において自分の意見を英語で表現する能力を付ける。学生は事前指導を受けた上で、各自の希望に即した英語研修プログラムに参加する。その後、事後指導とレポート作成によって、研修の総括を行う。		
		英語系	言語学系	言語学研究Ⅰ(音声学・音韻論・形態論)	この授業は、「英語学Ⅰ(音声学:発音の理論と実践訓練)」、「英語学Ⅱ(音韻論・形態論:語の仕組みと発音)」で習得した知識を基礎として、中学校、高等学校等で英語を教えるのに役立つような言語学の諸分野のうち音声学、音韻論、形態論に関する発展的な内容を扱う。 英語の音声学・音韻論・形態論的知識は、英語の音声、語彙等の指導において必要であるが、適切かつ効果的な指導ということを考えた場合、母語をはじめとした他言語との比較が不可欠である。この授業では、対照言語学的視点から英語の音声面・語彙面における指導法を考える。	
				言語学研究Ⅱ(統語論・意味論・語用論)	本科目は、「認知意味論」について講義形式で解説する。まず認知意味論における意味の扱いについて、構造主義的意味論に代表される「チェックリスト意味論」と比較しながら考察する。さらに、プロトタイプ、イメージ・スキーマ、メタファーとメトニミーといった認知意味論の根幹をなす概念群について学ぶ。最終的に、認知意味論において構文の意味がどのように説明されるのかを考察する。認知意味論を学ぶことによって、人間の世界のとらえ方が言語にどのように反映しているのか理解することが目標である。	
			現代英語Ⅰ(新語や外来語の特徴)	中学校、高等学校等で英語を教えるには、音声・音韻、形態、統語、意味といった言語学的知識に加え、言葉が社会において実際にどのように使用されているかという実態を知ることにも必要である。現代の日本語では、いわゆる「カタカナ語」が多数使用されるが、この種の語彙の知識は英語の語彙習得の面でプラスに作用することもあれば、英語以外に起源を持つ語や英語でも本来とは違った意味で使用される語の場合は英語の習得にマイナスに作用することもある。また、日本語化される際の発音の変化も無視できない。この授業では日本語におけるこの種の語彙の特徴を明らかにし、英語の指導における扱い方を考える。		
			現代英語Ⅱ(英語の文体)	本科目は、対照言語学的視点から英語と日本語の文体的な特徴を解説する。単なる英文和訳・和文英訳の演習ではなく、英語と日本語の形式と意味の対応関係に注目して、「英語らしさ」と「日本語らしさ」を意識できるようにする。例えば、日本語における動的な表現(動作)と英語の静的な表現(状態)の対応に注目し、それぞれの言語の「癖」を認識できるようにする。日本語と英語の言語的特徴を理解し、英語を自然な日本語に訳したり、日本語を自然な英語に訳したりできるようになることが目標である。		
			比較言語学Ⅰ(英語変種の特徴:英・米・豪・加、etc.)	This course addresses the phonological and lexical differences among the native English varieties, i.e. British English, North American English and Australian English. Examples of actual language data will be provided to help students perceive and understand the distinctive qualities by aural comprehension activities.		
			比較言語学Ⅱ(日本語と英語の対照)	本科目は、英語と日本語の比較をとおして両言語の共通点と相違点を講義形式で解説する。まず助詞レベルの比較から始め、文レベルの比較に発展させる。具体的には、助詞レベルについては、日本語の位置の表す助詞の「に」と「で」の意味的な区別とそれぞれの英語における対応形式について考察する。文レベルに関しては、存在と経験を表すhave構文、壁塗り構文、結果構文などを扱う。英語と日本語を対照することで両言語の統語的・意味的特徴を理解することが目標である。		
			比較文化学Ⅰ(英語使用圏の文化の特徴:英・米・豪・加、etc.)	This course addresses the social and cultural differences among the native-English using nations and societies: British culture, North American culture and Australian culture. Examples of social conventions and systems, annual events and common practice among local people, etc. will be illustrated to help students understand the distinctive features of each culture.		
			比較文化学Ⅱ(日本文化と英米文化の対照)	日本とアメリカの社会文化的に典型的な事柄を取り上げて、考察していく。その中から、根底にあるものを探っていく。 1. Orientation 2. Food 3. Sports 4. Entertainment: Disney 5. Movies: Hollywood 6. Democracy and politics 7. Ethnic Issues 8. Watching movies: Mississippi Burning 9. Education 10. Religion 11. Natives 12. Music 13. Transportations 14. Life style 15. How to write reports		
		英語教育	第二言語習得研究(外国語としての英語の学び)	本コースは、外国語としての英語を効果的に指導するために、その基礎となる第1言語獲得および第2言語獲得、そして外国語としての英語学習についての理論的考察を行うことを目的とします。子どもはどのように母語を獲得するのでしょうか。親のことは模倣して、それとも生得的に備わっているのでしょうか。第2言語や外国語としての英語はどのように獲得するのでしょうか。このような言語獲得の基本的理論について、人間と動物の脳のはたらき、幼児の言語発達から検討します。さらに、小学校英語活動に関連して、適切な英語学習の学習開始年齢、臨界期、形態素の獲得順序、外国語学習における個人差について検討します。指導法は、講義およびグループで、なぜこの課題が必要なのか、問題はどこにあるのか、どのようにすれば問題を解決できるかなど、学習者自ら考える学習者主体の討議形式で行います。		
			言語教育政策論(海外の外国語教育)	英語力とは何か、どんな要因が英語力に影響しているのでしょうか。世界の国々では、TOEFLやTOEICのスコアで国際比較が行われています。最近ではCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)が用いられています。英語力は、単にそうしたスコアだけで測定されるものではないことは言うまでもありません。英語力には、学習能力だけでなく、個人が幼い時より培ってきた文化的背景、植民地政策・歴史的背景、学習環境、指導法、そして外国語教育政策などが大きく影響しています。そこで、本コースは、外国語としての英語学習の環境について政府で定められている教育制度、学習時間、クラスサイズ、学習科目、教員養成制度、語学力の評価などについて、日本、韓国、中国、EU諸国について比較検討し、日本の外国語教育政策についての示唆を考えることを目的とします。指導法は、講義およびグループで、なぜこの課題が必要なのか、問題はどこにあるのか、どのようにすれば問題を解決できるかについて学習者自ら考える学習者主体の討議形式で行います。		



専門科目(C3)	学芸分野	英語系	英語教育	幼児英語研究(指導法・教材開発研究)	本科目は、就学前の幼児を対象とした英語の指導法及び教材の作成の仕方について指導する。特に、幼児の心理的並びに身体的な発達と興味関心に配慮しながら、TPR、歌、ゲーム、チャンツ、お絵かき、なぞなぞ、フォニックス、Nursery rhymes、Story-tellingなどの実践例を参考にしながら具体的な指導の手順や教材の扱い方について指導する。	
				小学校英語研究Ⅰ(教材開発研究)	本科目は、小学校高学年(第5学年、第6学年)の児童を対象とした英語活動において用いる英語教材について、文部科学省による『英語ノート』、現職教員の自作教材、市販の教科書などの各種資料を参考にしながら、各教材のねらい、構成、使用方法及び教材を作成する場合の留意点などに習熟させることを目的とする。	
				小学校英語研究Ⅱ(指導法研究)	本科目は、小学校高学年(第5学年、第6学年)の児童を対象とした英語活動において用いる英語の指導法について、文部科学省による『英語ノート』、現職教員の自作教材、市販の教科書などの各種資料を参考にしながら、学習意欲の高め方、授業過程と指導手順、言語活動の構成と実施手順、学びの成果の確認方法などに習熟させることを目的とする。	
				中学校英語研究(教科書分析)	本科目は、文部科学省検定済み教科書を用いて、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を統合した教材研究の方法論について具体的な指導を行うことを目的とする。中学校の学年(Book 1~3)ごとに幾つかの単元を取り上げて、文構造(言語の使用場面と言語の働きを含む)、文法事項、発音、語彙などを中心に、授業における具体的な指導法と関連付けながら教科書の本文や練習問題の扱い方を指導する。たとえば、To不定詞の形容詞的用法を教える際に、対話練習の中で生徒がその知識を活かしたセンテンス(e.g. "I'm thirsty. Is there anything to drink in the refrigerator?")を口頭で発表できるように指導するためには文法説明に加えてどのような言語活動が必要であるかを解説するなどして、教える側としての教科書の読み方と授業の作り方を実践的に学ばせる。	
				高校英語研究(教科書分析)	本科目は、文部科学省検定済み教科書を用いて、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を統合した教材研究の方法論について具体的な指導を行うことを目的とする。新設科目の中の必修科目である「コミュニケーション英語Ⅰ」から幾つかの単元を取り上げて、文構造(言語の使用場面と言語の働きを含む)や文法事項の説明及び題材の内容理解(e.g. 話し手や書き手の考えや意見の理解、本文全体ならびに段落の要約、重要な箇所の和訳, etc.)などを中心に、内容中心の口頭導入(oral introduction)のやり方をはじめ教科書本文や練習問題の扱い方を指導する。例えば、ある単元の本文の第一段落もしくはトピックセンテンスにおいて特定の文構造や文法事項(e.g. 仮定法過去)を用いられた場合、それは題材の導入としてどのような効果があるのか、あるいは、筆者は何らかの意図をもってその文法事項を扱っているのかなど、教える側としての教科書の読み方と授業の作り方を実践的に学ばせる。	
				英語科授業実践研究Ⅰ(カリキュラム論・授業論・授業観察)	本科目は、小学校外国語活動をはじめ中学校及び高等学校における英語の授業に関する臨床的な知識を深化・拡充させるとともに、熟練教師や教育実習生による英語の授業を観察することにより英語の授業に関する分析的な視点や評価の視点を構築させることを目的とする。その際、マクロな視点から外国語教育政策、学校文化、教師文化、社会文化的ニーズなどを、ミクロな視点から授業過程の流れ、英語教師の認知や力量、学習者の学力や興味・関心、教室内談話の特徴などをそれぞれ考察することにより、英語の授業に対する多面的な見識を育成する。	
				英語科授業実践研究Ⅱ(英語指導インターンシップ)	本科目は、学外において英語の授業を実際に観察したり担当したりすることにより、英語の授業についての実践的な経験を積ませることを目的とする。従って、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学などの各学校種をはじめ、生涯学習センター、語学学校、予備校、私塾、家庭教師など、英語教育を実施するあらゆる教育機関や施設を研修の現場とみなす。そして、研修開始時に策定した作業工程に従って、ポートフォリオ、授業の観察記録、学習者のカルテ、勤務/参加記録などの教育資料を作成し蓄積することにより、総合的な英語の授業力の基礎を培う。それゆえ、学外の英語教育機関において所定の研修時間(第6週~第13週)にわたり、1週間につき90分以上の実地研修とそのための事前準備を義務付け、当該期間中に授業実践、授業観察、教材研究、教材作成などの諸活動に関わることが必須となる。それゆえ、本科目はブレ教育実習の役割を持つものである。	
				生涯学習英語研究(教材開発研究、ICTを含む)	本科目は、「生涯学習」という観点から英語学習の方法論について講義形式で解説する。国際社会に生きる者にとって、英語は教科としての位置づけを越え、社会に出てからも積極的に活用することが期待される。したがって、学生自身が大学卒業後に生涯学習の一環として英語を楽しく有意義に学習し続けるため方法について考える必要がある。また、成人英語学習者を対象とした英語指導に関わる職業に就いた際には、その方法の応用が求められる。本科目は、生涯学習としての英語の学習方法と指導法に習熟させることを目的とする。	
				教室英語(Classroom English)を運用できる英会話力の養成)	本科目は、各教育課程の英語の授業を英語で展開する際に求められる、教室特有の言い回しや語句を円滑かつ効果的に使用することができるよう実践的に指導することを目的とする。特に、始業と終業、注意喚起、指示、質問、説明、総括、賞賛、叱責などの教授行動を中心とした英語の口頭表現力を育むとともに、学校行事、科目名、クラブ活動、文房具など学校生活に関わりのある語彙の指導も行う。	
				外国語教授法(指導原理)	本科目は、英米を中心に過去1世紀の間に開発・実践された主要な外国語教授法の原理・原則ならびにその実践例を通史的な視座から比較検討することを目的とする。その際、英語で書かれた文献や専門用語を正確に理解するための語彙力と文章読解力の育成も図る。	
外国語評価論(教育研究調査法)	本科目は、教育事象を科学的に記述、分析、評価するための、数量的(定量的)あるいは質的(定性的)な調査研究の方法論をはじめ、ExcelやSPSSを用いた成績管理及び基礎統計データの算出方法(平均値、標準偏差、相関係数、t検定、etc.)などについて概説する。その際、数量的な調査研究の一例として2群間における学習者特性(例:英語力)の共時的な相違あるいは経年的な変化を統計学的に検証するための実験計画とデータの分析方法を、質的な調査研究の一例として教育実習期間中に生じる諸問題の解決や改善を目指したアクション・リサーチの実施手順を、それぞれ詳述する。また、教育現場において必要とされる、児童・生徒個々人の情報や成績の管理に関する演習も行う。 (オムニバス方式/15回) (10.波多野五三/7回)①教育評価の対象: Quality or quantity?、②英語力の定義、③~⑥アクション・リサーチ1~4、⑦評価活動と授業改善 (59.林桂子/4回)①共時的調査実験1、②共時的調査実験2、③経年的調査実験1、④経年的調査実験2 (桐木健始/4回)①~④情報管理1~4	オムニバス				

専門科目 (C3) 文学分野 英語系	英語教育	英語教員養成研修Ⅰ	本科目は、英語教師としての総合的な英語の理解力と発表力の強化を図ることを目的とする。そのため、英語教育に関する専門文献(学術書、紀要論文、新聞記事などの抜粋。)の内容を正確に把握しその要旨を英語や日本語で要約するとともに、その内容についての自分の解釈、意見、主張などを日本語及び英語で論述できる読解力と発表力を養う。また、文献中の専門用語や英語の文法事項に関しても、英語の指導者としてより深く理解できるよう導く。さらに、各都道府県の教員採用試験第一次選考(教科に関する専門教養)及び私立中学校教員採用適性検査に対する受験対策も併行して行う。(オムニバス方式/15回) (10.波多野五三/3回) ①英語教師に求められる専門知識と英語力、②英語教育に関する専門用語1、③英語教育に関する専門用語2 (22.山本武史/4回) ①文献読解1、②発表1、③文献読解2、④発表2 (27.田中秀毅/4回) ①文献読解3、②発表3、③文献読解4、④発表4 (59.林桂子/4回) ①～④広島県・広島市の専門教養英語科 過去問題集1～4	オムニバス
		英語教員養成研修Ⅱ	本科目は、英語教師に求められる英語のスピーキング力及び論理的な文章表現力を養成するとともに、模擬授業の設計力(学習指導案の作成)及び英語の授業の展開力を強化することを目的とする。そのため、英語教育及び教育全般に関する諸問題について英語で集団討論や質疑応答を行うなどして、自分の意見や主張を英語で正確かつ適切に表現できる口頭発表力と文章表現力を養う。その際、できるだけ専門用語を用いて論述できるよう導く。さらに、英語の授業の展開力を高めるために、教材の研究と学習指導案の作成が的確かつ効果的に進められるよう指導する。加えて、本科目においては、都道府県の教員採用試験第二次選考(面接及び実技試験)に対する受験対策も併行して行う。 (オムニバス方式/15回) (10.波多野五三/5回) ①英語教育を取り巻く諸問題:問題意識の高揚、②学習指導案1、③模擬授業&講評1、④学習指導案2、⑤模擬授業&講評2 (22.山本武史/3回) ①スピーチ&質疑応答1、②集団討論1、③個別面接1 (27.田中秀毅/3回) ①スピーチ&質疑応答2、②集団討論2、③個別面接2 (59.林桂子/4回) ①～④小論文1～4	オムニバス
		海外英語教育インターンシップ	本科目は、アメリカやイギリスはもとよりインド、シンガポール、マレーシア、香港、フィリピンなどアジアにおける第二言語としての英語使用圏において、学生自身が英語を学習しながら英語の授業の支援を行ったり観察したりすることにより、英語の授業についての実践的な経験を積ませることを目的とする。従って、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学などの各学校種をはじめ、大学付属の語学学校、地域の学習センター、保育園など、英語教育を実施するあらゆる教育機関を研修の現場とみなす。そして、研修開始前に策定した作業工程に従って、ポートフォリオ、授業の観察記録、学習者のカルテ、勤務/参加記録などの教育資料を作成し蓄積することにより、総合的な英語の授業力の基礎を培う。そのため、海外の英語教育機関において所定の研修期間(夏休暇中の2～4週間)にわたり教室内外での英語学習ならびに実地研修(授業の支援や観察など)を義務付ける。それゆえ、本科目はブレ教育実習の役割を持つものである。	
		英語科教育入門	本科目は、英語教育の理論と実践に関わる主要な問題を取り上げてそれらを分かりやすく解説することにより、英語教育全般について興味と関心を抱かせるとともに、外国語科(英語)の教員免許状取得希望者ならびに教育職員採用試験の受験希望者などを対象として、英語教師に求められるミニマル・エッセンシャルズを概説することを目的とする。	
		英語学Ⅰ(音声学:発音の理論と実践訓練)	この授業は中学校、高等学校等で英語を教えるのに必要な英語学の知識のうち、音声学に関するものを扱う。音声学の知識は、言語の音声面の指導(リスニング、スピーキング)は言うまでもなく、正書法の指導においても必要である。また、この分野の性質上、理論の習得とともに実践的な訓練も欠かせない。この授業は、まず第一に、日本語と比較することによって英語の分節素およびプロソディーの音声学的特徴を明らかにし、同時に実践的な発音と聴き取りの練習を通して英語らしい発音の習得と聴き取りの力を身につけることを目的とする。さらに第二の目的として、英語の教授者として音声面の指導を適切かつ効果的に進められるようするための基礎を築く。	
		英語学Ⅱ(音韻論・形態論:語の仕組みと発音)	この授業は中学校、高等学校等で英語を教えるのに必要な英語学の知識のうち、音韻論、形態論に関するものを扱う。形態論的知識は語彙力の効果的な増強に不可欠である。また、音韻論的知識は、言語の音声面の指導(リスニング、スピーキング)、正書法の指導において必要であるだけでなく、形態論的知識とあわせて派生語における正しい強勢配置および正しい異形態選択に有効である。この授業は、まず第一に、音韻論・形態論的知識の習得を通して語彙に関する幅広い知識を獲得することを目的とする。さらに第二の目的として、英語の教授者として英語の音声面・語彙面の指導を適切かつ効果的に進められるようするための基礎を築く。	
		英語学Ⅲ(統語論:文の仕組み)	本科目は英語学における「統語論」の分野について講義形式で解説する。前半では高等学校までで学習する英語の基本文型を足がかりにして、文を構成する要素の線形順序の問題について考察する。それから、文の構成要素の結びつき方(構造)に焦点を当て、語・句・節の順序で考察する。後半では、統語理論(変形成文法)の考え方や機能文法における文の情報構造についても概説する。統語論を学ぶことにより、英語の文の成り立ちを深く理解できるようになることが目標である。	
		英語学Ⅳ(意味論・語用論:ことばの意味と使い方)	本科目は英語学における「意味論」と「語用論」の分野について講義形式で解説する。前半は意味論を、後半は語用論を扱う。意味論では、語・句・節で表される意味の問題、同義性や多義性のような意味と形式の関係、下義関係や非同立関係のような意味どうしの関係について考察する。語用論では、直示の問題、発話行為論の考え方、前提・含意について考察する。意味論と語用論を学ぶことによって、場面に合った英語の意味を理解できるようになることが目標である。	
		通訳	通訳の理論と実践1 通訳するとはどういうことなのかを理論的に学習する。またその理論に則って実務的な練習を行う。通訳するということは、単に言語を変換することではない。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるようにトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。通訳の技法としては、逐次通訳を理論的に理解し、実際に日英、英日の通訳の難しさを体験してみる。	
通訳の理論と実践2	通訳するとはどういうことなのかを理論的に学習する。通訳するということは、単に言語を変換することではない。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるようにトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。通訳の技法としては、逐次通訳を理論的に理解し、実際に日英、英日の通訳の難しさを体験してみる。			
通訳の理論と実践3	逐次通訳と同時通訳の違いを理論的に学習する。逐次通訳はメモ取が必要条件であり、同時通訳は記憶力が必要となってくる。いずれにしてもリテンション能力を高める必要があるため、その訓練を行う。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。			

専 門 科 目 (C3)	英 語 系	通 訳	通訳の理論と実践 4	歴史の中で通訳者が果たしてきた役割は大きい。その歴史を学び、通訳者として必要な素養を意識する。通訳をするには、記憶力が必要となってくる。リテンション能力を高める必要があるため、その訓練を行う。 通訳をするためには、常に母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。		
			通訳の理論と実践 5	歴史の中で通訳者が果たしてきた役割は大きい。その歴史を学び、通訳者として必要な素養を意識する。通訳をするには、記憶力が必要となってくる。リテンション能力を高める必要があるため、その訓練を行う。 通訳をするためには、常に母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。		
			通訳の理論と実践 6	日本の裁判で通訳者が果たす役割は大きい。その事例を学び、通訳者として必要な素養と職業倫理を意識する。このクラスでは、今まで学んできたことの総集編である。会議通訳、コミュニティー通訳（医療通訳、司法通訳）等、社会に役に立つ通訳者としての心構えと実際の通訳現場を体験する。 通訳をするためには、常に母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。		
			国語科教育入門	中学校・高等学校の国語科教員の道を歩もうと真剣に考えている学生、あるいは迷っている学生を対象にし、国語科教員免許取得に対する学生の意識を高め、その後の学びをより効果的にすることを、目的とする。講義では、国語科教育の目標をまず把握させる。その上で、国語科教育に携わる者の基本的な心構えを提示するとともに、国語科教員に求められる知識や技能について考えさせ、その獲得の方途を示す。さらに、これからの国語科教育の進むべき方向性についても考えさせる。		
			国語教材研究Ⅰ（古文・漢文・現代文）	中学校・高等学校国語科教育の基礎理論の理解の上に、主として中学校・高等学校教科書に取り上げられた教材（現代文・古文・漢文）について、授業の実際の観点から、教材研究を行う。中学校教材では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、授業構成にどのように関わっているかを中心に研究を行う。高等学校教材では、主に国語総合採録の現代文・古文・漢文教材について、実際の授業展開に必要な能力を養成するための研究を行う。		
			国語教材研究Ⅱ（日本語文法・日本語の語彙・日本語の表記）	中学校・高等学校国語科教育の基礎理論の理解の上に、主として中学校・高等学校教科書に取り上げられた教材（現代文・古文・漢文）について、授業の実際の観点から、教材研究を行う。中学校教材では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、授業構成にどのように関わっているかについてより深い研究を行う。高等学校教材では、国語総合・現代文B・古典B採録の現代文・古文・漢文教材について、実際の授業展開に必要なより高い能力を養成するための研究を行う。		
	文 学 分 野	日 本 語 系	日 本 語 教 育	国語科授業実践研究Ⅰ（カリキュラム論・授業論・授業観察）	国語科教員として授業を構想し、それを実践に移すための基本的な考え方を提示し、授業者に求められる技能および知識を獲得するための支援をする。講義では、授業を行うために求められる力を授業構想力と授業実践力とに二分して示し、それぞれの内容を具体的に示す。また、すぐれたカリキュラムの例や授業実践例を示しながら、カリキュラム構築から授業実践への道筋を理解させる。さらに自らの授業を鍛え高めるための国語科授業観察のポイントを提示し、授業を見る目を養う。	
				国語科授業実践研究Ⅱ（国語科音声指導法、国語科文章指導法）	国語科教員として授業を実践するために必要な技能や知識を身につけさせる。特に、「話すこと・聞くこと」の指導および「書くこと」の指導を効果的に行うための、音声言語指導法と文章表現指導法を習得させることに重点を置く。音声言語指導法では、聞くことの技能の系統的指導、場に応じて適切に話すことの指導、円滑に話し合いを進めるための指導等のあり方を示す。文章表現指導法では、目的や相手に応じて適切に表現する力が高めるための作文指導法を、課題や条件の示し方や実際の例文を引きながら提示する。	
				中学校国語研究（教科書分析）	中学校の国語の教科書を、教える立場から、様々な角度により徹底的に分析することを授業の目的とする。学習指導要領と教科書との関わり、教科書の歴史、教科書と思想、教科書の構造分析、教科書間の記述・内容の違いとそれへの対応、授業における教科書のあり方の問題などをとおして、教科書の現状を明らかにし、中学校の国語教員になるための資質、特に教案作成能力や教育力の向上を図る。	
				高等学校国語研究（教科書分析）	高等学校の国語の教科書を、教える立場から、様々な角度により徹底的に分析することを授業の目的とする。学習指導要領と教科書との関わり、教科書の歴史、教科書と思想、教科書の構造分析、教科書間の記述・内容の違いとそれへの対応、授業における教科書のあり方の問題などをとおして、教科書の現状を明らかにし、高等学校の国語教員になるための資質、特に教案作成能力や教育力の向上を図る。	
				国語教員養成研修Ⅰ（教員採用試験対策講座 一次試験対策）	中学校・高等学校国語科教員になるために、教員採用試験の対策を行い、合格率を高めることを目的とする。授業では、教員採用試験の一次試験試験対策として、教職と教科に関する専門教養について学習する。特に国語科の専門教養においては現代文は、説明的文章（評論）の読解、古文は文学（中古文）の読解、漢文は文学・思想の読解を学習の中心に置く。	
				国語教員養成研修Ⅱ（教員採用試験対策講座 二次試験対策）	中学校・高等学校国語科教員になるために、教員採用試験の対策を行い、合格率を高めることを目的とする。授業では、教員採用試験の二次試験試験対策として、個人面接、集団討論、模擬授業に対応できる能力を育成する。個人面接では、志望動機の自覚の深化、集団討論においては自己と他者の関係の意識化及びコミュニケーション能力の向上を図る。また、模擬授業能力育成のために、学習指導案の作成から授業構築の理論と実際を系統的に行う。	
				日本語文章表現法	中学校や高校の国語の授業において展開される、作文指導、文章表現指導のスキルを学ぶ。そのためには、教師自らが、正しい日本語文章表現の知識や技術を身につけておかなければならない。本授業では、個々の受講者に、毎回、作文を書かせ、その作文に基づき、グループ研究、グループ発表を行い、お互いに添削し合い、批評し合うことによって、個々の日本語文章表現能力を高めていく。このような作業をとおして、正しい日本語文章表現を身につけ、さらにそれを教授していく方法を学ぶ。	
				書道Ⅰ	書道Ⅰでは、日本で生まれ育った仮名文字について理解し、基本的な用法、用筆を身につける事を第一の目的におく。仮名は、わが国固有の文化遺産で漢字の草体から仮名独特のフォルムを創出し、これを表音文字として国語を表現した。先賢の叡知がわが国の文字を形作った。それを美術的表現の素材としてはぐくんできた特殊性に目を向けていく。この授業では、美術的観点から見た仮名文字に焦点をあて、活字体ではなく、美的な平仮名、変体仮名を研究していく。読める、正しい筆づかいで書ける、演習形式で学ぶ。	
				書道Ⅱ	書道Ⅰで学んだ事を基にして、それを一歩前進させ、和歌等を題材にして、連綿の方法を学び、墨継ぎなどを考えあわせながら作品作りをめざしていく。四行書から始まる、散らし書き、短冊と形を変え、より高度な美的表現を研究していく。その過程に於いて、書く楽しさ、奥深さを感じて、日本古来の仮名芸術のすばらしさを自身で感じ味わう。そして、次の世代にこの貴重な遺産を少しでも伝承していける様学生に考える場を設ける。日常生活においても「実用の書」としての1書、年賀状等に活用できる事を学ぶ。	

専門科目 (C3)	文学分野	日本語系	日本語・日本語教育	日本語学概論Ⅰ (音声言語を含む)	この授業では、日本語学の様々な研究分野のうち「現代語の文法・文法論」「古代語の文法・文法史」「現代語の語彙・語彙論」「古代語の語彙・語彙史」について概説的に学び、日本語研究を行う上での基礎知識を獲得することを目的としている。また、日本語の特徴を多角的に捉えることにより、他の言語との共通点と相違点が何かについての学びを深めてほしい。なお、この授業は、日本語・日本語教育メジャーの必修科目である。本メジャーの修了を目指すものは必ずこの授業の単位を修得しなければならない。	
				日本語学概論Ⅱ (音声言語を含む)	この授業では、日本語学の様々な研究分野のうち「現代語の音声・音韻論」「古代語の音韻・音韻史」「文字表記」「社会言語学・方言学」「文章・談話」について概説的に学び、日本語研究を行う上での基礎知識を獲得することを目的としている。また、日本語の特徴を多角的に捉えることにより、他の言語との共通点と相違点が何かについての学びを深めてほしい。この授業は、日本語・日本語教育メジャーの必修科目である。本メジャーの修了を目指すものは必ずこの授業の単位を修得しなければならない。	
				日本語教育概論Ⅰ (コースデザイン他)	日本語教育とはどのような仕事なのかを把握するとともに、日本語教師に必要な資質と能力は何なのかについて考えることを目的とする。前期の日本語教育概論Ⅰ(コースデザイン他)では、日本語教育の現状、日本語教育の歴史、コースデザインの方法について学習する。日本語教育に関心を持っている者の受講が望ましい。なお、この授業は、日本語学・日本語教育メジャーならびに日本語教員養成課程の必修科目である。日本語教員養成課程の修了を希望する者は、2年次のうちにこの授業の単位を取得しておかなければならない。	
				日本語教育概論Ⅱ (四技能教育)	日本語教育における「読む」「聞く」「書く」「話す」の四技能のそれぞれに焦点をおいた授業の計画、使用教材、教室活動や指導の方法などについて考えることを目的とする。日本語教育に関心を持っている者の受講が望ましい。なお、この授業は、日本語学・日本語教育メジャーならびに日本語教員養成課程の必修科目である。日本語教員養成課程の修了を希望する者は、2年次のうちにこの授業の単位を取得しておかなければならない。	
				日本語音声学	「1) 音声学に関する基本的知識を身につけた上で、日本語の分析、日本語教育の場において、必要なデータを得るための聞き取りスキルを身につけること」「2) 音韻論についての基本的な知識を学び、話者が従っている規則性について最低限の分析を行うことができる程度の能力を身につけること」を目的とする。なお、この授業は、日本語教員養成課程の必修科目である。日本語教員養成課程の修了を希望する者は、3年次が終わるまでにこの科目の単位を取得しておかなければならない。	
				現代日本語基礎文法	我々が普段無意識に使っている日本語が持つ様々な性質を、言語学的内省を用いて考察することにより、言語の基本的な性質と日本語文法の大まかな姿を捉えることを目的とする。なお、この授業は、日本語教員養成課程の必修科目である。日本語教員養成課程の修了を希望する者は、3年次が終わるまでにこの科目の単位を取得しておかなければならない。また、国語科教育教員免許(中等教育)取得に必要な、教科に関わる専門科目のひとつでもある。	
				古典日本語基礎文法	この授業では、日本語の古典文法の基礎について学ぶ。高校までに学習してきた日本語の古典文法を、確実に習得させたい。さらに、大学で日本語に関する学びに適応させるべく、発展的に学習させる。日本語古典文法の知識は、日本語の古典語研究は言うまでもないが、古典文学の読解、研究においても、現代日本語の研究においても、日本語古典文法の知識は、必要である。国語教育においても必須である。日本語の古典文法の基礎を身に付けることによって、それらの研究に対応できる能力を身に付けさせたい。	
				日本語の文字と語彙	日本語の文字や語彙は、日本語研究のなかでも、表記研究、語彙・意味研究の基礎となる、重要なテーマである。この授業では、日本語の文字や語彙について、基礎的な知識を身に付けさせるとともに、文字や語彙について、自ら問題を発見し、問題解決へと展開できるよう指導していく。日本語の文字については、漢字、仮名など、日本語表記において文字が果たす役割について考える。また、日本語の語彙については、位相、出自、意味分野などによる語彙分類を通して、語彙とは何かについて多角的に考えていく。	
				日本語話し言葉講座Ⅰ	この授業の目的は、「日本語音声表現の改善」である。私たちは、自分の思いや考えを伝えるために話をする。話すということは、声を手段として相手に意志を伝えることである。声で伝える基本は、発声・発音である。「声が小さい」「音が不明瞭」では、相手にきちんと伝わらないし、相手の同意や共感を得られない。発声・発音のトレーニングも必要である。相手に届く力のある伸びやかな声や正確な発音を体で覚えるために、実際に声を出しながら授業を進める。その上で、話し言葉の表現技術を学び、魅力的で説得力ある話し言葉を目指す。	
				日本語話し言葉講座Ⅱ	書かれた文章を音読で紹介した時、内容が相手にうまく伝わらなかった。ひと前で話をするとき、内容を十分に理解してもらえないことがある…。書き言葉に比べ、発した瞬間に消えてしまう話し言葉はなかなかやっかいなものである。音読の際や、仲間内の気ままたおしゃべりでない「少し改まった場」での話し言葉をより効果的に表現するための方法が求められる。この授業では、話し言葉の基礎である発声・発音の訓練も含め、よりの確に意味を伝えるための表現技術を学ぶことで、魅力ある話し言葉の遣い手となることを目標とする。	
				日本語フィールドワークⅠ (日本語の方言)	この授業では、実際に学外で方言の調査を行うことにより、日本語の方言研究の方法の基礎を学ぶ。日本語の方言研究は、土地の人々から、情報を提供していただいで初めて成り立つ学問である。方言調査には、基本的なルールやマナーもあり、また効果的な調査方法も存する。これら、方言研究には欠かせない、調査技術を習得させることを目的とする。また、実際に学外で、土地の人々と積極的に会話させることによって、その土地土地の言葉の背景にある文化や歴史について深く理解させることを目的とする。	
				日本語フィールドワークⅡ (郷土資料調査)	日本語の歴史的研究に使う資料には、様々なものがあるが、その一つに郷土資料がある。郷土資料は、その土地土地の言葉の歴史を研究する上で、欠かせない資料である。郷土資料のなかには、既に公刊されて、図書館等で見ることが出来るものもあるが、その多くは、旧家や寺社、各地の郷土資料館、博物館等に納められている。未発掘の資料も多い。特に、角筆文献は、郷土資料として、日本語の歴史的研究には重要な資料である。この授業では、学外でしか見ることが出来ない、郷土資料を研究資料とするための方法を、実地調査に基づいて身に付けさせることを目的とする。	
				認知言語学概論	この授業では、認知言語学の理論に基づいて日本語の表現を分析することを目的としている。まず、認知を「人間が頭や心によって行う営み」として定義した上で、比較能力、参照点に基づき対象を把握する能力といった、言語の営みを動機付けている認知能力がどのようなものかを見ていく。また、同じく認知能力を重視する生成文法理論とどのような点が異なるのかについて考えていく。次に、認知言語学の理論にもとづき、多義語や類義語の意味分析の方法を学ぶ。特に履修条件は設けていないが言語の概念を対象とするので言語学に関心のある者の受講が望ましい。	
心と言語表現	この授業では、心の働きと言語表現との関係について、様々な角度から学び、言葉の本質について理解を深めることを目的としている。第1回～第4回は、単語とそれが表す意味との結びつきについて、第5回～第7回は、単語を超えた句や文という形の表現とこれが表す意味との結びつきについて、第9回～第13回までは、人間をキーワードに、人間の進化や人間の成長、他の動物と人間との相違などを踏まえ、言語と心の結びつきを考える。第14回は、言葉の研究を基盤とする言語学と心の研究を基盤とする心理学の接点を取り上げる。					

専門科目 (C3)	文学分野	日本語系	日本語・日本語教育	社会言語学	本授業では、日常生活において意識的・無意識的に行っている様々な言語行動について、語用論の視点から観察し、分析するための理論と方法を学習し、習得することを目的とする。挨拶、謝罪、依頼など、日常生活で行う言語行動にどのような規則性があり、異文化間ではその規則性にどのような共通点と相違点があるのかを分析する。授業は、講義ならびに受講生とのディスカッションを中心に進める。	
				言語とコミュニケーション	本授業では、会話から受ける相手の印象について会話を実証的に分析し、会話・談話の分析の視点、分析力を養うことを目的とする。日常生活では、よく話す人、おとなしい人、うるさい人などと相手に対して主観的な評価を行うことがあるが、そのような評価が生じる背景には、実際の会話においてどのようなやりとりによるコミュニケーションが行われているのか、接触場面と内的（母語）場面におけるなど様々な会話例から探る。授業は、講義ならびに受講生とのディスカッションを中心に進める。	
				現代社会言語学の諸問題	社会言語学は主に年齢・性別・地域・職業・階級などの社会的要因がどのように言語に影響し、どのような言語表現が成立するかということを研究の対象とするものであったが、グローバル化する現代社会が言語に与える影響は多様で複雑なものとなっている。そこでこの授業では、従来の社会言語学の研究対象や研究課題を概観し、特に現代社会における言語様式や言語変化を対象にして、社会における言語の役割、対人関係における言語の役割などを考察していく。	
				比較言語コミュニケーション研究	言語に依存するコミュニケーションに関しては、使用する言語やコミュニケーションに介入する要因に基づき、言語コミュニケーションスタイルが成立しているが、グローバル化された現代では、一つの言語コミュニケーションの理解だけでは数々の問題が生じることになりかねない。そこでこの授業では、グローバル社会で使用される英語と日本語との比較において、それぞれの言語コミュニケーションの特徴を理解し、さらに比較することによって、適切な言語コミュニケーションが図れるようになるための背景を考察していく。	
				比較言語学Ⅲ(アジアの言語)	この授業では、日本語と深い関わりのある韓国語、中国語と日本語を比較し、その共通点、相違点を見いだすことを目標とする。まず、非常に似ていると言われる日本語と韓国語を比較し、語順、助詞の使い方などを比較する。次に、日本語と中国語を特に語順の観点から比較する。次に、日・韓・中の共通点を探る。更に、アジアの様々な言語を概観し、特に、モンゴル語のような、日本語あるいは韓国語と類似している言語を取り上げ、その特徴を探る。	
				比較言語学Ⅳ(ヨーロッパの言語)	この授業では、ヨーロッパの様々な言語について概観する。英語、ドイツ語、オランダ語をはじめとするゲルマン系の言語、フランス語、イタリア語、スペイン語をはじめとするロマンス系の言語、更にハンガリー語、フィンランド語についての基本的な文法構造や、文法規則についての知識を身につけることをめざす。更に、このような様々な言語の特徴を比較し、相違点、共通点を見だし、言語とは何か、について深く考えるきっかけになることを目標としている。	
				言語の獲得	この授業では、ヒトがどのようにしてことばを話せるようになるのかを、文法、音声、意味、形態の順に見ていく。それぞれの部門で、ヒトの成長に合わせて見ていく。つまり、何歳頃かのようなことばを話せるようになるのか、を見ていく。次に、言語獲得における、周りの人たちがどのような役割を果たすのか、を考察する。更に、言語獲得についての臨期期、あるいは感受性期についても概観し、言語についてより深い興味を持てるようになることを目標とする。	
				談話の構造	談話はディスコースとも呼ばれ、人々は日常生活のコミュニケーションの中でさまざまな談話を用い、それに接しているが、談話を正確に理解するためには、その談話がどのように生成され、また、どのような背景的要因があるのかを知っておく必要がある。そこでこの授業では、特に日常的な言語コミュニケーションにおける談話を用いて、その談話が特定の場面や状況でどのように生成されているのか分析するために必要な背景的要因を探るものである。	
				昔話・童話の世界	講義の前半では昔話をとりあげ、その生成のあり方をいくつかの物語からケーススタディとして学ぶ。具体的には「浦島太郎」、「一寸法師」、「桃太郎」などよく知られたものをとりあげる。また、中心はあくまでも日本のものに置くが、比較対象としてペロージャグリムの採集したヨーロッパの民話も考察する。後半では童話作品のいくつかをとりあげ、各作家に固有のテーマや物語構築の特質を考察してゆく。ここでも日本の童話—特に宮沢賢治—が中心となるが、『指輪物語』や『不思議の国のアリス』なども比較のためにとりあげる。	
				日本文学・日本文化	日本文学概論Ⅰ	日本の美意識の徴標である、「艶」「優」「妖艶」「幽玄」「長たかし」「あはれ」「をかし」「無常」などの文学理念は各時代を代表する美意識として用いられてきた。本講義ではこうした美的理念を歌合の判詞を中心として説明するとともに、上代・中古・中世文学の作品を対象とし、日本文学を支えたものは何かを、文学理念・文学思潮・文学用語を中心としてその意味を考え、その基底に流れる日本的なものの見方・感じ方・考え方を考察する。
日本文学概論Ⅱ	ここでは、日本の抒情文学について通時的に学んでいく。万葉集に始まり、勅撰和歌集、連歌、俳諧といった古典詩歌の世界から、近代詩、近代短歌、近代俳句までをその対象とし、それぞれに固有の形式や様式、あるいは表現上の特徴について学んでいきたい。古典和歌については、ある程度の知識はあるだろうが、日頃あまり目にするのではない現代短歌や現代俳句にも積極的にアプローチしたい。					
漢文学概論Ⅰ	なぜいま「漢文」を読むのだろうか。この問いを考えるために、この授業では、「漢文」を知るためには何が必要なのか、「漢文」を読むとはどういうことなのか、ということをも具体的な作品の読解を通して考える。漢文の構造・語法についての理解を深め、辞書・工具書・注釈書の利用方法を説明し、その上で、『論語』『史記』『桃花源記』『唐詩』を読み、「漢文」を読むことの意義について答える。また、日本人が漢文から学んだことは何であったかをも考える。					
漢文学概論Ⅱ	なぜいま漢文を読むのだろうか。前期に引きつづき、この問いを考えるために、作品を読解しながらそれぞれの作品からどのような問題を読みとることができるのか、またその問題がどのように表現されているのかということも考える。なお、対象とする作品には主に中学校・高等学校の漢文教材を用いることとする。思想・史伝・漢詩・中国小説、時に日本人の著した漢文をも対象とし、問題の所在・作品の解釈・作品の批評を通して読み解く。					
日本古典文学史	上代・中古・中世・近世の文学を概観し、日本古典文学の基礎的知識・素養を身につける。それぞれの時代を代表する作品を取り上げ、主題・人物像・美意識・人生観・恋愛観・歴史観を視野にいれ、作品・作家の特徴を考察するとともに、前代から何を受け継ぎ、次代へいかなる影響を与えたのかその史的意義について考える。古典撰取の方法等、引用など表現方法にも留意する。抒情文学・叙事文学・自照文学・劇文学の5つの文学体系に分けて講義する。					
日本近現代文学史	まず、日本近現代史を軸にして、(国家) (制度) (内面)などの観点から「近代」「現代」なるものを多角的にあぶり出し、その上で日本における(近代文学)の成立を見定める。その後、(近代文学)としての明治期から大正12年頃、(現代文学)としての大正13年から昭和30年頃までの代表的作家、作品の考察を通して、時代の変容から生じる作品の質の変化を追う。また、最終的には、歴史的背景等にも目配りしつつ、(近現代文学)に密着した諸問題を浮き彫りにしていくことを目指す。					

専門科目(C3) 文学分野 日本語系 日本文学・日本文化	日本近代文学の世界	明治維新から始まる日本の近代化の歴史は、日本の西洋化の歴史であるとも言えることができる。日本の伝統的土壌に西洋文明が移入されていくその過程においては、多くの摩擦や軋轢が生じることとなったが、そういった歴史的展開の中で、明治大正期の文学者たちの多くは、正にこの〈東〉と〈西〉との異文化の遭遇による葛藤の問題に誠実に対峙し、またその問題の本質に迫ろうと試みた。2012年度の本講義では芥川龍之介の作品を具体的に挙げていくことによって、如上の観点から日本近代文学の世界へのアプローチの一側面を提示したい。
	日本現代文学の世界	① 現代日本人作家のなかで、もっとも世界的知名度の高い作家の一人、村上春樹の短編を読むことから、広い意味での文学に親しむ。② いくつかの短編を読むことで、そこに共通して通底しているテーマを捉え、村上春樹という作家のもつひとつのパターンを知る。③ 村上春樹は夏目漱石の影響を強く受けていると言われており、漱石のみならず、太宰や三島など近現代文学の作家とどのように結びついているのか、その関連性をさぐる。そうすることによって、村上春樹という作家を日本文学の流れのなかに位置づける。
	女流文学の世界Ⅰ(古典編)	古典の時代、男性中心と言ってよい社会の中で、女性たちは何を考えどう生きたのかを考える。前半は和歌の贈答を取り上げる。贈答歌には大きくは2つの決まり事がある。1つは相手の詞を自歌に取り込む。2つは男性の求愛を 切り返し、否定・反論する。その応酬の中で、歌才とともに女心が垣間見える。額田王・和泉式部・小野小町・式子内親王の歌を対象として、歌人は歌に何を託したのかを考える。後半は、『平家物語』の女性たちの愛別離苦の哀しみを通して、祇王・横笛・巴御前・小宰相・重衡北の方の生き方考える。
	女流文学の世界Ⅱ(近現代編)	近年、女性作家の活躍はめざましいものがある。本講義では、有吉佐和子、吉本ばなな、山田詠美、柳美里の4人の女性作家の代表的作品を取り上げる。女性作家の視点で人間存在や時代を見ればどのように映るのか、また、日本近現代文学史において「女流文学」はどのような意義をもつのかを、特に昭和30年代以降に焦点をおいて考察していきたい。男性作家とは異なった視野で形勢した作品の多様性や独自性に着目することによって、受講生にも幅広い視野を得ることを期待する。
	比較文学	① ベロエ童話とグリム童話を比較することで、17世紀ルイ14世支配下のフランス文化と19世紀初頭のプロテスタント市民文化の違いを認識し、それぞれの歴史・社会・文化についての知識を深める。② 童話というものが本来もっている、中世以来の口承文学の伝統について学ぶ。キリスト教が普及する以前のヨーロッパに根付いていた世界観を学び、古いヨーロッパに触れる。③ また、あらゆる時代において童話というものが新しく語られてきたが、その変化を観察することで、子どもや弱者に対する社会的態度の変化を確認し、西欧における近代とは何かを考察する。
	キリスト教文学	太宰治が「聖書一巻によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さを以て、はっきりと二分されている」(『HUMAN LOST』)と述べたように、日本の近現代文学史の流れを考えるのに、聖書やキリスト教との関わりを辿ることは重要な一視点であるとする。本講義では、聖書やキリスト教と格闘した代表的な作家、またその作品を時系列的に取り上げていくことによって、近現代の日本文学におけるキリスト教受容の諸問題を浮き彫りにすると同時に、キリスト教文学の魅力についても明らかにしていきたい。
	日本文化史Ⅰ	世界文化遺産に登録されている厳島神社を文化的な観点から捉えることで、地域の文化を理解する視点を身につけるのみならず、地域と自分との関わりを考えることのできる能力を培うものとする。また、厳島神社の神事・祭礼や文化財を通して、自らの感性の素晴らしさに気付くようにする。『平家物語』、清盛だけではなく、厳島神社の全貌を明らかにする。講義を主体とするが、参考資料としてビデオなどの映像資料をも視聴する。
	日本文化史Ⅱ	中世から現代にいたる時期の幾つかの文化的事象を取り上げ、日本人である自分の発想や振舞い方の原点について考え分析できる能力を培うものとする。また、日本文化の優れたところや問題点を理解したうえで、外国人に対応できる習性を身につけることを考える。日本人は明確にものを言わないと批判されることが多いが、その由来を生活習慣・人間関係から考える。講義を主体とするけれども、参考資料としてビデオなどの映像資料をも視聴する。
	日本王朝文化の世界	本講義では、平安時代の貴族社会で重視されていた漢籍の学問や和歌、音楽、舞踊といった様々な教養について、学習内容や方法とともに、それぞれの教養がどのような目的をもって学ばれていたのかを、平安時代の貴族の執筆した漢文日記や物語をはじめとする文字資料や、鎌倉時代以降に成立したとされる絵巻物を始めとする絵画資料を通して学習するとともに、それぞれの教養の発祥と変遷についても学びながら、東アジア全域から見た日本文化の歴史と特徴、位置づけについて理解を深める。
	日本中世文化の世界	400年を超える中世文学の作品から今年度は『新古今和歌集』と『平家物語』を対象とする。俊成の主導で始まったいわゆる定家を中心とした新風和歌の「新」なるものに焦点をあてて考察する。定家の本歌取りと、従来の「古歌を盗む」と言われた本歌取りとはどのような異質なものを示し、本歌取りの効果を具体的に考え新古今的なものを考察する。軍記物語である『平家物語』は歴史物語でもあることを視野に入れ、史実とは異なる虚構に注目し、その意図・効果を考える。平家作者は平家が滅んだ理由を歴史家として、どう捉えたのかを作品の表現を通して考察する。
	日本江戸文化の世界	中心となるのは文学作品—特に元禄期の西鶴、芭蕉、近松—だが、ここでは文学だけを取り上げるのではなく、むしろそれらを包括する文化—絵画、音楽、芸能—の中での意義を考察していきたい。特に絵画や芸能ではパワーポイントを用いて、視覚的、音楽的な側面をも重視し、江戸文化の持つさまざまな側面を総合的に身につけていきたい。また、できるだけ機会を設けて歌舞伎等の鑑賞も行いたいと考えている。
	変体仮名入門	古典文学研究の基礎として、写本等を読むことができるために変体仮名を学ぶ。代表的な古典文学作品は活字になっていて、容易に読むことは出来るが、『平家物語』の諸本の中にはまだ活字になっていない写本も多くある。こうした、テキストを翻訳することも古典文学における重要な基礎的研究である。「仮名手引」を参考にして、和歌を対象にして読む練習をし、後半は散文に挑戦する。授業の前半は宿題の解答をし、後半は翻訳をする。毎時間小テストを行い、確実に力をつける。
文芸創作	① あらゆる文学作品にはそれに先行する作品が必ずあるということを認識してもらうために、実際に、元となった作品と、それに影響を受けて書かれた作品を何組か読む。ここでいう影響とは、単なる類似ではなく、後続の作家が作作的に真似たり、変更したり、破壊したりしているものをさす。つまり、創作がその原型の意図的な批判となっているものごとである。② いくつかの作品の読解を通して、創作、創造というものが批判の積極的な形態のひとつであることを確認する。③ 何度か原型となる文学作品の一つを選び、そこから、自分自身の作品を書いてもらう。	

専 門 科 目 (C3)	日 本 語 系	日 本 語 ・ 日 本 語 教 育	Traditional & Contemporary Japan Studies	主に英語で授業を行う。日本の伝統文化と現代の日本の問題をともに学ぶ。日本の伝統的な文化が現代の私たちの精神構造にいかに関わり、そのことが、国際化のなかにあつてどのような問題を生み、日本が世界にいかに関与できるかを考える。(オムニバス方式/15回) (5. 金田文雄/7.5回)現在の日本文化で「伝統的な」とされるものは、もちろん例外もあるが、その多くは江戸時代に生み出されたものである。例えば、①現在のスタイルの雛祭りや5月の節句②和服③銭湯などであるが、こうしたいわゆる伝統文化を取り上げ、ともに考えていく材料にしたいと思う。 (7. 篠原収/7.5回)日本の近代化、戦後復興に果たした女性の役割について、労働という観点から探求し、男女雇用機会均等法施行後の女性雇用労働の現状と課題について考察する。 ①江戸時代から明治・大正時代の女性労働②戦前・戦中・戦後の女性労働③男女雇用機会均等法以降の女性雇用労働の現状と課題	オムニバス	
			ジャーナリズムの研究	新聞記事に「名文」は要りません。誰が読んでも分かりやすく簡潔な「明文」が求められています。テレビ、ラジオのニュース原稿も同じです。マスメディアの読者・視聴者は子どもからお年寄り、専門家、ニュースの当事者まで幅広い人々がいます。専門家を納得させ、初心者にも理解できる文章をどう書くか。その前提は記事の内容です。何を書くか。何が読まれるニュースなのか。取捨選択、取材、執筆までを体験しながらメディアの文章を学びます。入社試験の小論文、プレゼンテーションの文章にも言及したい。		
			演劇論	前半では古典的な演劇論である世阿弥の『風姿花伝』を購読することで、日本の代表的な芸道論を学ぶとともに、能、歌舞伎、浄瑠璃などの形式や特質について学んでいきたい。また、後半では主として日本の近代以降の演劇を取り上げ、そのテーマや特質について考察してゆく。なお、シェクスピシア劇の現代日本における上演の在り方についてもあわせて考えたい。		
			日本の芸道	本講義では、現代の日本社会で「伝統芸能」「伝統文化」に位置づけられる様々な芸芸(音曲、舞踊、書道、香・華・茶道など)が発祥し、わが国独自の文化として確立するまでの歴史と変遷について、時代ごとの記録や文学作品を読み解きながら知識を深める。各芸道の近年の規模と活動に関する情報も紹介し、今日的な課題や将来に向けての可能性、芸道としての(あるべき姿)について考える。なお、一部の芸芸については、地域社会の指導者を招いて実演会を催したり、復元された道具類を教室内で使用したりして、体験的な学習を試みる。		
			フィールドワーク文学地踏査	文学踏査を目的とした授業である。対象とする作品はその世界を知ることが中心になるが、作品の中心となる場所を巡ねることを目的とし、そのための準備をする。具体的には、その地へ行くための行程を決め、作品世界としての、その地の紹介文を作成し、ガイドのプレゼンテーションを行う。		
	文 学 分 野	宗 教 ・ 思 想	そ の 他	宗教学Ⅰ(宗教学の方法論)	本講義では「宗教」現象についての様々な立場や方法論を学ぶことを目標とする。諸宗教の比較および類型化、呪術と宗教について、政治と宗教について、都市化と新宗教、多元主義と原理主義、聖なるものと世俗化、などの観点から宗教の起源や本質についての考察を進める。 「キリスト教学入門Ⅰ」において提示した、「一方で、人の”いのち”を活かし、尊厳・自由・平等をもたらす宗教が、他方ではなぜ人の”いのち”を奪い、尊厳・自由・平等を脅かすのか」という問題について、より詳細な考察を試みる。	
				宗教学Ⅱ(仏教・神道・ユダヤ教・イスラム教・新宗教)	「宗教学Ⅰ」において修得した方法論にたつて、諸宗教を理解することを試みる。さまざまな伝統宗教や新宗教の教義・歴史・形態を学ぶことを通して、宗教の起源や本質についての考察を進める。 また、カルトやスピリチュアル・ブームについて、多角的な視点からの理解を試みる。また、グローバル化の時代における原理主義の問題について、討議と考察を行う。	
				倫理学Ⅰ(基礎倫理学)	「徳とは何か」ということをテーマとして、講義形式で授業を行う。主として、古代ギリシア哲学とヨーロッパ中世のキリスト教哲学の中に、「徳」についての議論が見られるため、この時代を中心に倫理学史観点から「徳」について考えてゆく。その過程で、「徳は教えられるのか」という問題、卓越性としての徳と実践的な選択を可能にする思慮との関係、そして人間の幸福とはどのようなものであるのか、ということについて、歴史的にどのように考えられてきたのかを明らかにしてゆく。講義後半では、現代の徳倫理学について紹介し、現代において「徳とは何か」に対する答えがどのようなものであるのかを考えてゆく。	
				倫理学Ⅱ(応用倫理学)	「功利主義と義務論」をテーマとして、講義形式で授業を行う。近現代の倫理学において、功利主義と義務論は基本的なものである。今回の講義では、功利主義を軸にして、功利主義とは何か、また功利主義の種類などをおさえた上で、義務論を対比させてゆく。功利主義とその反対者としての義務論という構図によって、功利主義の利点と限界、その補完的立場としての義務論という一つの見方を提示したい。以上の点を考えて行くために、古典的に用いられてきた例や、具体的に身近な例を用いることで、功利主義と義務論がそれぞれどのように応答するかを考えて行く。	
				哲学Ⅰ(東洋・古代・中世)	近世以降の哲学では、「私たちは物事を正しく知ることができるか、そして、正しく知ることができるのであれば、それはどのようにするか」という問題を扱ってきた。こうしたテーマに取り組んできた哲学的に重要な思想家(大陸合理論、イギリス経験論、カントからヘーゲルにつながるドイツ観念論の思想家たち)を取り上げ、具体例を挙げながら、分かりやすく論じる。近世から近代、20世紀の哲学へと哲学がどのように展開してきたのか、当時の時代背景と重ね合わせて、歴史の流れが見えるように解説する。	
				哲学Ⅱ(近代・現代)	20世紀以降の哲学に大きな影響を与えてきた、マルクス、フロイト、ニーチェの思想を足掛かりに、その延長線上に位置する様々な思想についての分かりやすい見取り図を提示することを目的とする。扱うテーマは社会理論、精神分析、言語哲学、実存哲学、分析哲学、構造主義など、多岐にわたるので、それらの思想がもっている特徴的な概念装置について、解説することが授業の中心になる。そして、現代の私たちが直面している様々な困難に取り組む際の、思考の道具を提供することを目的としている。	
				思想史Ⅰ(科学史・社会史)	今日、唯一の超大国としてアメリカ合衆国が世界の政治・経済を動かしていることは否定できない。特に、「自由と正義」を理念とする民主主義の国として、また、産業社会(大衆消費文化)を世界に先駆けて実現した国として多くの国に影響を与えて続けている。その独立革命以来、世界中から移民が押し寄せた国、国民意識の形成に悩む国でもある。こうした、アメリカの歴史を知ることを通して、これからの世界の行方について考えてみたい。	
				思想史Ⅱ(政治史・経済史)	近代を代表する思想家の思想に焦点をあて、その思想家が生きた時代の政治と経済との動きを明らかにし、それぞれの時代にあつて政治と経済とがどのように関連し、その中で思想家たちがどのように生き、どのような思想を育んだのかを明らかにする。具体的には、近代の黎明期の代表的な思想家であるT.ホップズ、J. ロック、近代の確立期におけるK. マルクス、近代の爛熟期におけるM. ウェーバーについて、それぞれ、近代市民革命、産業革命、第一次世界大戦についての歴史的考察に基づき、政治、経済、思想の関連を明らかにする。	

専門科目 (C3)	文学分野	その他	宗教・思想	哲学・神学・宗教学講読 I (英書講読)	本講義では、欧米の哲学・神学・宗教学に関する著作の原典(主として英語)を丁寧に読み進めることを通して、欧米の哲学・神学・宗教学領域の基本的な概念や思想を知ることが目標とします。また、読解したことを元に討議を行ったり、関連事項についての調査・研究を進めることによって、より深く理解することを試みます。また、付随して、英語の読解力の向上を目指します。 ※哲学・神学・宗教学講読 II とは異なるテキストを用います。	
				哲学・神学・宗教学講読 II (英書講読)	本講義では、欧米の哲学・神学・宗教学に関する著作の原典(主として英語)を丁寧に読み進めることを通して、欧米の哲学・神学・宗教学領域の基本的な概念や思想を知ることが目標とします。また、読解したことを元に討議を行ったり、関連事項についての調査・研究を進めることによって、より深く理解することを試みます。また、付随して、英語の読解力の向上を目指します。 ※哲学・神学・宗教学講読 I とは異なるテキストを用います。	
				キリスト教図像学	キリスト教の教えは、言葉だけでなく、絵画や彫刻など視覚的な表現でも語られてきた。この授業では旧約聖書、キリスト、マリア、聖人たちをとりあげ、聖書などの文言と比較しながらその変遷をたどり、図像というもうひとつのテキストが示す思想や社会の変化を読み取っていくこととした。図像学は絵の意味を知る上で不可欠な知識であり、事実美術の補助学として蓄積をつんできたが、ここではさらに高度な思想史の方法としての図像解釈についてもいくつかの事例を提示する。	
				アジア・アフリカ学への招待	本講義では、アジア・アフリカ学への導入として、なぜいまアジア・アフリカなのか、アジア・アフリカとは何か、について、これまでの研究史を整理する形で検討していく。特に、アジア・アフリカへの「まなざし」という観点からアジア・アフリカができあがっていく過程を概説する。同時に、アジア・アフリカ学という領域の固有の仮題について明らかにしていく。	
				アジア・アフリカ学演習 I (文献講読)	「オリエンタリズム」関連の文献を中心として、アジア・アフリカに関する基本文献の読解を行う。一部文献については、英語原典にあたることとする。	
				アジア・アフリカ学演習 II (文献講読)	文化情報リテラシーの観点から、インターネットや映像などを含む広義のテキストを読解し、アジア・アフリカについての情報のあり方について検討する。同時に、アジアの一員としてアジア・アフリカへの日本の関わり方についても検討する。	
				上級韓国語 I	この授業は、韓国語初級と中級を履修した人を対象とする。したがって、この授業の目標は、講義で習得した韓国語を道具にして隣国への理解を深めることに寄与することである。目標の実現に近づくために、朝鮮半島に関連する視覚資料をふんだんに使用するが、その主な内容は、人口に膾炙する文学作品とリアルタイムの情報を伝える新聞記事・ニュース・ドラマの組み合わせになる。日本語・日本文化との比較でもあるこの授業は、新聞や雑誌を活用しながら、韓国の「今」に触れる機会にしたい。	
				上級韓国語 II	この授業は、韓国語初級と中級、そして上級 I を履修した人、ないしはそれに準ずる言語能力を評価された人のためのクラスである。本校で開設されている韓国語授業のなかで頂点にあるこの授業は、受講者個々人の朝鮮半島に対する深い関心と学問的な好奇心によって支えられる。授業の内容は、上級 I と変わらず、文学作品、新聞記事、ニュースなどを用いて行うが、できるだけ韓国語使用を心がける。最後は、この授業の直接目標ではないが、韓国語能力試験の一定水準(中程度)の評価を獲得することを本講義の一つの過程にしたい。	
				上級中国語 I	この授業は、「中級中国語」を習得した学生を対象とし、中国語の総合能力をさらに伸ばしていくとともに、専門分野に役立つ中国語能力を身に付けることを目標とする。具体的には、中国文化並びに中国語圏文化の理解を深めていき、聞く、話す、読む、書くなどの能力がバランスよく上達することを目指しながら、専門分野に関わる比較的平易な中国語で書かれた文章を読み、正確に内容が理解できる読解力と中国語表現力を向上させる。さらに学生に中国語でものごとを考えてもらい、自分の専門に関するテーマについて中国語で簡単なレポートを書く練習を行っていく。	
				上級中国語 II	この授業は前期に引き続き、読む・聞く・話す・書く力を総合的に高めていくと同時に、より複雑な専門知識や専門文章を中国語で理解することを目標とする。授業は基本的にすべて中国語で行ない、中国に留学したような環境を作り、学生に中国語で考え、中国語で表現する力を鍛えていく。授業は演習形式を採用し、毎回中国社会や文化、あるいは学生の専門分野に関するテーマ一つ決めて、それにめぐって自分の意見を述べたり、他人の意見に対して反論したりする練習を行なう。また学生 1 人ひとりに発表のチャンスができるだけ多く与えるようにし、実践力を伸ばしていく。	
				現代アジア社会論	古代において「東方」を指す言葉であったアジアは、その後地域名となった。アジアは歴史的背景、自然環境からみても何らかの統一体であったことはない。しかしながら、1990年代以降、「アジア」の影響力は増し、「アジア」の理解なしに現代社会の理解はできないと言っても過言ではない。本講義では、アジア諸国についての基本的な知識を修得し、エネルギー、経済、文化などいくつかのトピックに基づいて、ステレオタイプではないアジア像についての理解を深める。	
				現代アフリカ社会論	アフリカ大陸には約10億の人々が、多様な価値観をもち多面的な社会位相を示しながら暮らしています。アフリカは戦争や内戦、貧困や飢餓といった負のイメージで捉えられることが多いのですが、アフリカに暮らす人々は、我々と同じく、さまざまな苦難を乗り越えながらも前向きに生きていこうとしています。アフリカ経済も2000年以降、急速な成長を遂げており、世界の関心が改めてアフリカに向かいつつあります。アフリカでの政治・経済・社会・文化などの具体的な事象を取り上げ、多様な視点からアフリカに接近し、アフリカを総体として理解することを目指します。アフリカを知ること、日本を新たにするようになるかもしれません。	
				日本通交・通商史	私たちの多くは、日本や中国という、ヨーロッパで作られた「国民国家」の枠組みを自明として、政治、経済、文化や歴史を考えてきた。しかし、近年のグローバル化の潮流やアジアの経済発展によって、歴史学では「国民国家」に基づく歴史観(「一国史」)やヨーロッパ中心史観を見直し、その枠組みを超えたグローバルヒストリーが注目されている。 本講義では、様々な「国民国家」を含むインド洋から東シナ海という「海域アジア」において、それぞれの社会をつなぐヒトやモノの流れから、日本とアジアとの相互関係の歴史を検討し、「一国史」としての日本史とは違う歴史像を描くことを目的とする。	
				外国史 I (アジア史)	漢族社会と周辺諸民族社会の交渉によって形成された伝統的中華世界の構造と、征服王朝出現以後のその変容について通観し、中華世界の構成原理、前近代アジアの国際関係の構造を理解する。本講においては、農耕社会と遊牧社会の共進的な交渉による中華文明の自己拡大の過程、元朝以降の諸民族権力の対抗関係の中で中華世界が複数の視線によって再定義される過程を叙述するとともに、陸と海のシルクロードを通じた中華世界の外縁における文明交渉にも注意しつつ、中華世界の形成、変容、構造の特徴を考察する。 また、帝国主義のアジア侵略によって中華世界が解体に向かう中で、中華世界を形成してきた諸民族と国家の関係が、国民国家の原理を介在させる国内関係—国際秩序構造として再編されていく過程を通観し、20世紀以降の国際秩序形成における中国史の位置づけについて考察する。	



専門科目(C3)	文学分野	その他	外国史Ⅱ(アフリカ史)	本講義は、日本では未だ情報の限られているアフリカの歴史、特に近・現代の歴史に焦点を当てて、当該地域に対する理解を深めることに主眼を置いている。アフリカは周知の通り、“陸の海”サハラ砂漠によって南北に分断されて、その歴史、文化、社会を異としている。また、その領域も非常に広い。そのため、対象とする地域や時代を限定して講義することになる。本講義では、まずアフリカ全体の歴史を概観し、その上で、サハラ以北の北アフリカの近・現代史について詳しく見て行きたい。次に、サハラ以南におけるヨーロッパ列強による植民地主義支配、帝国主義支配の歴史をひも解き、加えて当該地域に大きな影響を与えているイスラーム化について触れる予定である。	
			AAフィールドワークⅠ	参加者自身の問題関心を調査可能な課題として具現化し、現地調査に向けた準備を行う。事前準備の内容は、課題設定、二次資料の調査・整理、文献資料の整理、現地への旅程検討、費用計算、危機管理などである。調査チームとして役割分担を決め、チームとしての行動をとれるようにするため、グループワークを中心とした授業形態とする。	
			AAフィールドワークⅡ	AAフィールドワークⅠでの準備を踏まえて、現地調査を実施する。約2週間を予定している。帰国後は、成果報告会、報告書の作成を行う。	
			経済学Ⅱ(含国際経済学)	経済市場がグローバル化した今日、われわれが直面する日々の経済問題を理解する上で、国際経済学の知識は不可欠である。本講義では、最初に貿易論と開放マクロ経済学の基礎を学習する。これらの基礎知識と分析枠組みに基づいて、世界経済の諸問題を正しく理解し、分析する能力を身につけることが本講義の目的である。この講義では、国際経済学の基礎知識を学ぶと共に、わが国が直面する国際貿易、海外直接投資、FTAなどの二国間・多国間自由貿易協定などの問題、また国際金融市場における国際資本移動の諸問題など、現実の国際経済の問題を取り上げて検討する。	
			開発経済学	発展途上国には、低所得水準のまま停滞している低所得途上国がある一方で、急速に成長を遂げ先進諸国の仲間入りしつつある新興諸国が存在する。本講義では、低所得国、新興諸国などの途上国について、経済構造の特徴と問題点、経済発展のための政策を学習する。停滞を続ける低所得途上国の問題は何か、また成長を遂げた新興途上国がアジア金融危機のような危機に見舞われるのはなぜなどが主要課題である。この他、講義では途上国の社会システムや市場の特徴、統治(ガバナンス)等の問題についても検討する。また、途上国を支援するための経済協力政策のあり方、世界銀行やIMFなどの国際機関の役割などについても検討する。	
			公共政策概論	公共政策の対象、公共政策の担い手、公共政策の決定・実施過程、公共政策の評価について、具体的な政策に言及しながら講義する。公共政策の意思決定を国民が知るためには、情報公開法、公文書管理法、行政機関個人情報保護法等の理解が必要であることを踏まえ、行政保有情報関連法の内容とその取得方法についても講義する。また、公共政策の意思決定過程が紛争の対象となった判例を取り上げ、法的な観点からも公共政策の考察を行いたい。	
			公共政策演習Ⅰ(文献講読)	公共政策に関する個別的な分野を対象として文献を指定し、外書講読を行う。今年度は、フランスの文化政策に関する文献を素材として、各週に1名又は2名の担当者を決め、各担当者の準備した訳を土台として、参加者と共に文献の内容に関する議論を行いたい。具体的な対象は、参加者と相談の上で決定したい。演習への参加にあたっては、特に語学力を要求するわけではないが、語学や対象国、対象分野への関心と意欲を持って臨むことが学力向上の鍵である。	
			公共政策演習Ⅱ(文献講読)	公共政策に関する基本文献を講読する。M. ウェーバーの文献を中心として、官僚制に関する文献を検討する。報告は三人一組で行い、報告者(一人)、サポーター(二人)が共同で内容理解、レジュメの作成、報告を行うこととする。	
			地方自治論	地方自治体は、市民の日常生活にかかわる行政サービスの提供に活動の中心がある。したがって、住民の「生活の質」はその行政活動の品質に左右されるところが大きい。そこで、自治の担い手たる住民としての能力を涵養すべく、日本の地方自治制度の概要を講義する。先ず、①国や自治体間の仕事(機能)の分担、②議会と首長・行政委員会の権能、③条例制定について、その概要を説明する。ついで、④住民の直接請求や⑤住民投票制度、さらに⑥情報公開と⑦政策評価に触れ、⑦新しい公共とそこでの公私協働に触れる。最後に⑧自治体の税財政制度についても、簡単に言及する。教材として今井照『よくわかる地方自治のしくみ』2007の使用を予定している。	
			公共政策	都市計画法は、都市の健全な発展と秩序ある整備を図り、国土の均衡ある発展と公共の福祉の増進に寄与することを目的とする。この授業では、都市計画の内容、都市計画の決定主体、都市計画の決定手続、都市計画制限、都市計画事業等、各回に1つのテーマを取り上げ、具体的な法律の適用場面を想定しながら講義を行う。後半は、都市計画の決定・変更手続、都市計画区域における開発許可をめぐる行政訴訟等、都市計画に関連する判例について講義する。	
行政学	行政活動は、私人の活動に比べて、多種多様な規制に服している。現在は、その規制の内容や性質の変容が非常に大きい時代である。古典的な行政の規制から、現在要請される行政の遵守規範について講義する。判例や具体的な事例を挙げながら、各回の講義がイメージしやすい講義にする。前半は、特に、行政処分に至る行政の意思決定過程について、後半は、行政事件訴訟法と国家賠償法を核として行政活動に起因する紛争処理について講義する。				
行政学	二〇世紀、特に第二次大戦後、行政国家化という事態が進展し、政府(国や地方自治体)の行政活動が、市民の生活の隅々にまで浸透し、私たちの日々の生活に大きな影響を与えている。そこで、市民の目線から、そうした行政活動とその主体を理解すべく、①私たちの日常生活と行政活動の接点について広範な事例を紹介し、その上で、②行政活動の担い手である公務員を規律する制度、③国の行政機構、④行政改革を検討する。次いで、④行政活動の方針案である政策の作成・決定・実施の過程を、行政の民主的統制の観点から点検し、⑤さらに予算編成と⑥官僚制についても取り上げる。教科書としては、真淵勝『現代行政分析』2008年を予定している。				
比較法学(含国際法)	日本近代法の歴史は、西洋法学の継受の歴史である。西洋法の日本法への影響について、明治期、敗戦後、そして現在の様相について講義する。この場合、英米法と大陸法の特徴を理解しながら、現在の両者の均質化傾向も考察したい。次に、個別の法分野を取り上げ、日本法と特定国の法分野の比較を行う。具体的には、憲法、行政法、文化法に関する内容を中心に比較を行いたい。最後に、具体的な国際機関、条約を概観し、国際法についての基本的な知識を取得できる講義にしたい。				
経済学Ⅰ(ミクロ・マクロ)	本講義の目的は、マクロ経済学とミクロ経済学の基礎的知識を学び、それをもとに世界経済や日本経済で起きている出来事を理解する能力を身につけることである。マクロ経済学では、国民所得分析の枠組みを理解した上で、財政・金融政策などの短期的経済政策を検討し、さらに長期経済成長についての議論を行う。ミクロ経済学では、市場メカニズムに基づく消費者および企業の行動を学んだ上で、市場の失敗、情報の不完全性、制度の問題などを学習する。また、その時々重要な経済問題を取り上げ、ここで学習したマクロ・ミクロの知識を利用して分析することによって、現実の経済問題に対する理解を深める。				

文学分野 その他 専門科目(C3) 家政学分野 ビジネス情報系	公共政策 現代社会論 (男女共同参画社会)	21世紀の日本社会は、男女共同参画社会の実現に向けて、国や自治体、個々の企業・ビジネス組織、国民一人ひとりの積極的な取り組みが期待されている。1999年に制定された「男女共同参画社会基本法」についての理解とともに、女性の社会的地位向上をめざした世界の女性たちの取り組みを知る。また、基本計画を通して、具体的な政策課題と解決に向けた取り組み、またワークライフバランス社会の実現に向けた多様な取り組みについての理解を深める。男女平等社会実現に向け、社会変革の担い手としての自覚を高めたい。	
	ビジネス実務総論Ⅰ	ICT部門が急速な発展を遂げているが、その対応に追われながらも進展するビジネス社会において、ビジネスワーカー自身のあり方も大きく変わってきている。キャリアだけを視野に入れるのではなく、個として生きる視点を組み込む必要性をビジネスワーカーが意識しはじめた。グローバル化された社会において、ビジネスワーカーに必要とされるビジネス実務とは何かを学ぶとともに、変化するビジネス環境の現状と課題について考察し、自らの職業観を確立することを目的とする。 「ビジネス実務士」の資格取得に向けた必修科目である。	
	ビジネス実務総論Ⅱ	複雑化・高速化・高度化する多様な現代社会において、あらゆる分野で適材適所の人材が求められている。経済が成熟し、モノがあふれている社会では、消費者の求める商品の質は高くなり、商品そのものの魅力だけではなく、消費者の「心」や「気持ち」を動かすようなホスピタリティあふれる販売方法の必要性も高まっている。新しい概念としての「ホスピタリティ・マネジメント」の導入は、医療・福祉・介護・生活文化・地域・金融・教育・旅行・外食・観光等々で大きな成果を挙げている。ホスピタリティを理解し、ビジネスで活かすことを目的とする。	
	ビジネス実務演習Ⅱ	意思決定者としての上司の職務が円滑かつ効果的に進むように「補佐」する存在として、秘書職の定義を再考する。また、秘書職を組織論から理解し、職務のあり方を考察し、事例にそって業務内容を分類する。ケーススタディを通して問題解決のための対応や処理の手順、ならびに優先順位のつけ方を考察し、対応能力の向上を図る。さらには、ロールプレイを通して実践において必要な知識と技能を学ぶ。	
	プレゼンテーション演習Ⅰ (アサーティブ・コミュニケーション論演習)	現代社会における企業などのビジネス組織において活用されているプレゼンテーションに関する知識や技法のなかでも、基本となるコミュニケーションのあり方を体系的に学習する。とりわけ、欧米社会だけでなく、新興国においてもビジネスのフィールドでは、アサーティブネス論に基づいたコミュニケーションのトレーニングが盛んである。より良い人間関係構築のためのコミュニケーションについて、ロールプレイなどを通して学ぶことを目的とする。 「プレゼンテーション実務士」の資格取得に向けた必修科目である。	
	プレゼンテーション演習Ⅱ	プレゼンテーションの理論と実践をより深め、さらに効果的なプレゼンテーションを実践することを目的とする。与えられた課題に対しての個人発表を行なうとともに、グループに与えられた課題を協働作業で企画し、映像で表現するための制作ならびに発表を行う。ビデオカメラなどの機器を使い、素材を集め、編集機器で整える一連の作業を通して、プロジェクトチームのあり方を学ぶ。 「プレゼンテーション実務士」の資格取得に向けた必修科目である。	
	情報総合プレゼンテーション演習	情報機器の特性を利用し、効果的なプレゼンテーションを行うための方法を理解し、実際のプレゼンテーションができる実践力を養うことを目的とする。個人の技術の向上を当然のこととし、プロジェクトチームを組み替え、作業の展開を繰り返し、最終課題の作品を完成させる。また、状況を判断した対応能力を高めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。 「プレゼンテーション実務士」の資格号取得に向けた必修科目である。	
	ビジネスデザインⅠ	ビジネスの基本を習得し、自らがビジネスを企画立案・計画実行(デザイン)する過程において必要な知識・技能と対応能力を養う。ビジネスアイデアについて、情報収集、分析をチームで行い、討議を重ねたうえで、企画書を作成し、発表する。総合的なビジネスデザイン力を身につけることをねらいとする。 15回の講義のうち、3回は企業の方に外部講師として来ていただき、マーケティングなどに関する講義を受ける。その後、実際に起業している方の店舗において、1日研修を受ける。最後に、各自のビジネスデザイン案を発表することで、起業力を理解する。	
	ビジネスデザインⅡ	地域経済活性化のためには、雇用されることに期待をもつだけでなく、自らが業を起こし、他者を巻き込むことが望まれる。まずは、何かに挑戦したいという意思と意欲をもち、気づきを形にすることが大切である。そのためには、ビジネスプラン(事業計画書)を作成する過程で、現実を理解していく。自らがプロジェクトマネージャーにたとえ、実践していくことを学ぶ。さらには、大学生を対象としたビジネスコンペに出展することをめざす。	
	マーケティング論	市場を創り出す企業活動におけるマーケティングの重要性について理解するとともに、マーケティング・マネジメントの実践について理解する。身近な問題として、小売業におけるマーケティングのあり方やその戦略を理解し、消費者行動に関して考察を重ねていく。さらには、特徴的なマーケティングを行なっている企業などのビジネス組織に焦点を当て、考察する。	
	ビジネス英語	英語を生活言語とする外国人とのビジネスコミュニケーションに関する基礎知識を学ぶ。単に、通じればよいという英語ではなく、相手とのコミュニケーションを図る英語を学び、品性のある英語とは何かを理解する。同時に、身につけておきたい国際ビジネスマナーやプロトコルを理解し、実践することを目的とする。	
	広島地域ビジネス論	広島地域経済の概況を知るとともに、広島の地域経済を支える産業や、広島県の特産品などについて、ビジネスの第一線にある実務者の方がたから話題を提供していただき、自らも調査・分析を深めることを通じて、広島地域ビジネスの現況を理解することをめざす。	
	インターンシップⅡ	ビジネス活動とそこで働く人びとのビジネス・ワークについて、「インターンシップ(就業体験実習)」を通じて理解を深め、自らの専門知識・スキルの向上を図るとともに、職業適性、職業生活設計、職業選択について考える契機とする。事前学習として、専門領域のビジネス組織についての理解を深め、ビジネスワーカーとして求められる実務能力開発やキャリアプランニングを探究する契機とする。受講生は、夏期休業中に2～3週間程度の期間で、本学独自の研修先での「インターンシップ」に参加することが義務づけられる。同様に、事後学習としての「研修報告」(研修レポート提出と報告会参加・発表)が義務づけられる。	
	アメリカ・ビジネス研修Ⅰ	グローバル化した現在、日本とアメリカの社会の変化をアメリカの歴史から比較し、アメリカ社会の成り立ちを学ぶ。とりわけ、経済を背景に企業などのビジネス組織における比較を行うとともに、日系企業の発展を追う。また、日本人がアメリカ社会におけるコミュニケーションのあり方を学ぶ。	
	アメリカ・ビジネス研修Ⅱ	日系企業の米国での事業展開について、企業体験研修、企業見学、懇談会などを通して、その実態を把握する。さらには、インタビューなどを通して日系家族、海外赴任者とその家族の想いについて実感することで、家族観だけでなく、職業観の醸成と産業界に対する深い洞察を養う契機とする。また、提携大学との学生交流会、米国文化体験、ホームステイなどを通して、異文化理解を深める契機とする。	
女性労働論	日本における女性雇用労働の現状と課題を探索し、ビジネス社会への女性進出とエンパワメントについて展望する。		

専 門 科 目 （ C 3 ）  家 政 学 分 野  ビ ジ ネ ス 情 報 学  情 報 科 学	ビ ジ ネ ス デ ザ イ ン	市民社会とNGO・NPO	高度情報社会において、今までにない速度で社会が変化している。その一方で、明治近代国家誕生後に形成された既存の社会システムでは、対処できないさまざまな問題が生まれている。とりわけ、政府や自治体においてはこのような多様化した社会の変化に対応できず、公的サービスの提供に限界が見えている。地域社会では、福祉施設の経営、サービスの供給、まちづくりや環境保全、さらには国際協力等を推進する民間非営利組織(NPO: Non-Profit Organization)の活動が活発に展開され、そのような組織を後押しする団体も増え、NPOそのものが身近になっている。こうした背景と組織経営の実態及び課題を理解し、NPOの具体例を取り上げ、住みやすい、豊かな地域社会へ参画していくことを学ぶ。	
		ファイナンシャル・プランナーⅠ	ファイナンシャル・プランニングの基本知識を習得し、「ファイナンシャル・プランニング技能検定3級」学科試験合格をめざす。	
		ファイナンシャル・プランナーⅡ	ファイナンシャル・プランニングの基本知識を習得し、「ファイナンシャル・プランニング技能検定3級」実技試験合格をめざす。	
	ビ ジ ネ ス 情 報 学	情報文化論	企業など組織におけるIT(情報技術)の活用は、経営戦略への貢献や企業変革の支援など、その適用範囲は飛躍的に拡大し、組織の戦略と整合性の取れたITに関するマネジメントが必要となっている。組織におけるITの役割を理解し、代表的なITソリューションであるERP(Enterprise Resource Planning)やCRM(Customer Relationship Management)などを通じてITと経営組織の関係を研究する。経営とITの橋渡しを担当するCIO(Chief Information Officer: 最高情報責任者)の役割を通じて、ITマネジメントの課題・方向性を理解し、CIOに求められる知識の習得を到達目標とする。	
		生活情報論	インターネットにより、販売、金融、広告には新しいスタイルの業務が登場した。一方、家庭でも家電のネットワークにより新たな使い方が可能となっている。また、ICカードにより定期券、保険証、電子マネーとしての機能を利用できるようになった。その背景には、個人情報情報の漏えいや不正アクセスへのセキュリティ面の安全性が上がったことが挙げられる。この科目では、商品、広告、サービスを情報と考えその機能を適切に生かすために、商品開発から流通までを概観し、さらに生活へ浸透するマルチメディア化に対応できる力を身につける。	講義 14回×90分、1回×60分 演習 1回×30分
		情報社会論	「高度情報ネットワーク」、「マルチメディア」、「インターネット」、「ユビキタス社会」などで表現されるとおり、急速な情報技術の進展によって、社会の様相が変貌しつつある。まず、現代社会が情報技術の進展によってどのように変容していったのかについて学び、現代の情報社会の現状と課題を考えていく。そして今後の展望と「われわれ」の抱える課題について検討して、現代社会に生きる「市民」としての智慧を身につけるようにしよう。	
		情報産業論	第二次世界大戦中に登場したコンピュータは、その後通信ネットワークと結合し急激な発展を遂げた。それに伴い情報を扱う産業も拡大、それまでとは異なる巨大な産業、情報産業となった。一方、産業においては情報機器の高機能化・低廉化と共に情報システムは今や必須の存在となった。 本授業では「情報の産業化」と「産業の情報化」をキーワードに情報のデジタル化とネットワーク化が産業(ビジネス)に与えた影響や社会とのかかわりを様々な角度から学んでみたい。 教員からの一方的な授業だけでなく、KJ法による整理や受講生による発表などの要素も取り入れ、皆で考え学びあえる授業を目指したい。情報化社会に問題意識を持ち積極的に学ぶ姿勢を歓迎する。	
		情報倫理	情報化社会を「秩序ある社会」とするには、情報社会の特性と問題の所在を明確にさせ、それらを認識していく必要がある。情報社会に関わる者の倫理が重要になってくる。それらを学ぶことを目的とする。	
		情報数学	「生活の中の数学」「数学入門」等の基礎数学が履修済であることが望ましい。2003年度から住基ネットが稼働している。公的個人認証サービスを利用して、住基カードと呼ばれるICカードに各自の公開鍵・秘密鍵、および電子証明書を格納すれば、全国的な本人確認システムとなり、ネットワークを介して個人的活動の自由度は限りなく増大してきた。 このように、暗号は、国民にとってすでに身近なものとして浸透している。本講義では「暗号の仕組み」を数理的な観点から考察してみたい。暗号の数学的扱いは様々なものがあるが、ここでは、特によく使われている暗号方式RSA暗号を取り上げる。	
		情報科学とテクノロジー	IC制御されたものには、家電製品から産業用ロボットまで幅広く存在する。この科目では電子機械の仕組み、センサーなどの実習を通してテクノロジーと情報処理の関係を理解し、進化する情報社会に対応できる力を身につけることである。まず、身近な電子機械の紹介から機械要素、運動のメカニズムを概観する。次に、簡単なロボットの組立を行い、さらに光センサー搭載の機械を作成し、センサーと情報処理について理解する。また、LEDを利用した電子回路の実習を行う。	講義 3回×90分、3回×30分 実験 3回×60分、9回×90分
		プログラミングⅠ(基礎)	プログラミング言語を用いて、論理的な考え方を身につける。簡単なプログラムを作成し、コンピュータに作業をさせることができることを目的とする。	
		プログラミングⅡ(応用)	本授業では、ネットワーク上のコミュニケーションの手段として大変に有効な手段である「Webサイトデザイン」と「Webプログラミング」について学習する。WWW(World Wide Web)は、インターネットの世界に広く普及し、従来の情報メディア(出版物、放送メディア、ビデオ等)と同等の、もしくはそれらを代替する情報メディアとしての重要性を増えています。同時に、Webサイト(ホームページ)は新たな情報デザインの具体的対象となり、その基礎技術習得が情報デザイン全般に求められるようになってきました。演習では、Webサイトの概念、その基礎技術となる記述言語HTML(Hyper Text Markup Language)、マルチメディア素材制作技術(静止画、アニメーション等)を学び、具体的に各自のテーマに基づくWebサイトを制作します。また、ホームページ作成に役立つプログラミング言語であるPHPについて学びます。PHPは、簡単に記述して動作させることができる手軽なスクリプト言語でありながら、各種データベースの操作や画像処理などの高度な機能もこなせる高機能な言語です。演習内容はより高度なプログラミングに応用できる基礎となります。年度によって、他の言語CGI、Ruby等のスクリプト言語を選ぶこともある。	
		情報と問題解決	本講義に先立って、数学入門、情報数学等の数学関連授業の履修済が望ましい。Excelを用いるので、Excelの基本操作は既知とする。本講義では、学問の対象である自然現象や社会現象に存在する規則性、とくにその数学性に基づき、現象を数学モデル化し、それによって現象としての自然を理解する手がかりとしてみたい。	
		データ解析	Excelの基本的なことは理解し、統計学入門は履修済みであることが前提。「多変量解析」というと、何かとても難解なもののように聞こえてしまうかもしれない。しかし、読んで字のごとく「複数の(多)データ(変量)を扱う分析(解析)」であり、扱う変数が多い場合に行うデータ分析と考えればよい。扱う変数が多くなればなるほど、そこに含まれる関係性を明らかにするには複雑な数学的処理が必要となる。しかし、分析手法の基本的な仕組みを理解し、必ず確認しなくてはならないポイントと、気を付けなければいけないポイントをわかっているならば、正しく分析を行い、結果を解釈することが可能になる。 本演習ではこの難解な多変量解析をExcelという身近なツールを利用して、視覚的・実践的に解き明かしていきます。講義と演習を中心に、以下のような内容について学ぶ。いずれも統計学入門で学んだ「変数間の関係性の捉え方」および「仮説検定の考え方」を理解していることが前提となるので、しっかり復習した上で講義に臨むこと。	

専門科目 (C3) 家政学分野 ビジネス情報系 情報科学	オペレーティングシステム入門	「情報科学入門」のようなコンピュータ基礎科目の履修をしていることが望ましい。OSは「オペレーティング・システム」の略で、「コンピュータとソフトウェアの仲立ちをするもの」である。OSはコンピュータにとって最も基本的な仕事をこなす特別なソフトなので「基本ソフト」とも呼ばれたりする。 本講義では、Windows OSとUNIX OSに焦点を絞りコマンドの使い方を学習する。またバッチファイル、シェルスクリプトの作り方も触れてみたい。	
	データベース概論	データベースの設計から基本的なデータベースの作成、データベースの活用までを、実習を交えて解説する。内容：Accessの概要、ファイルの構成要素、データベース設計、ファイル作成、テーブル作成、テーブルの概要、マスターテーブル作成とデータ作成、リレーションシップ設定、リレーションシップの作成、【課題1】テーブルの作成、クエリの作成、クエリの概要、テーブル、クエリの作成、条件に合致するデータの抽出、【課題2】クエリの作成、フォーム作成(9回)、フォーム概要、入力画面作成、レポートの作成、レポートの概要、データの印刷・宛名ラベル作成、ピボットテーブルとピボットグラフの作成、ピボットテーブルの作成、ピボットグラフの作成	
	システム設計	情報システムの開発には、システム化要件定義、外部設計、内部設計、プログラム設計、プログラミング、テスト、管理という工程がある。この科目では、システム設計の専門的知識と設計技術について学び、実社会で応用できるよう実習を通して理解する。なお、システム化要件定義では定義書の作成、外部設計ではIPO、コード設計、プログラム設計では画面設計、モジュール設計では分析設計図法を学ぶための実際の業務に関する実習を行う。	講義 1回×30分、6回×90分、 実習 1回×60分、8回×90分
	ネットワーク概論	通信ネットワークの仕組みとネットワークが抱える様々な問題を学習し、自分たちが被害者にならないだけでなく、知らない間に加害者とならないための方法を学習する。また、ネットワークを利用する上でのきまりについても実際の事例を参照しながら学習する。	
	ネットワーク演習	TCP/IPネットワークを構築するためには、PC、スイッチングハブやルータ等のネットワーク機器、ゲートウェイとなるコンピュータ同士を接続し、ネットワークとして動作させるための適切な情報を設定しなければならない。また、インターネットを介した不正侵入が頻発する昨今の状況においては、パケットの通過を許可したり、通過を遮断するパケットフィルタリングの設定も行えなくてはならない。こうした点を念頭に置き、実際のルータを用いてネットワーク環境を構築することを目的とする。	
	コンピュータグラフィックス	この科目では、CAD(Computer Aided Design)ソフト及びデザイン系ソフトによってコンピュータで設計を行うために必要な知識と技術を修得する。知識では、図形の知覚効果、コントラスト変換の仕組み、濃淡変換とフィルタリングの原理、レンダリング、アニメーション、2値画像処理、パターン認識といったCG制作で扱うものを学ぶ。同時に、知識を実際のCADソフトでの表現技法を身につける。本年度はCADソフトとしてVectorWorksを使用し基本図形を応用した3次元の設計技術を身につける。	講義 1回×90分、13回×45分、1回×60分 実習 13回45分、1回×30分
	画像情報処理	現代における画像はデジタルの属性をもつものが多い。これはコンピュータで目的にあったものに加工やレタッチができるという点ではデジタル画像が優れているからである。この科目ではPhotoshopという画像処理の専用のソフトをツールとして利用し、効率的で、適切な加工、修正に対応できるようにトーンカーブなどの専門的な知識と技巧を身につけてデジタルアートとしてテーマのある作品に仕上げられる力を身につける。また、ネット上のコンテンツとして利用できるようにPhotoshopでアニメーション化する技法も学ぶ。	
	アニメーション作成	この科目では、静止画像、音声、動画データを用いて、マルチメディアデータの作成ができる知識と技術を習得する。また、グループ作業により、チームワークと企画段階での発案や、レビューを通して企画力を身につける。本年度は専門性の高いビデオ編集ソフトであるAdobe Premiere Proを利用する。手順としては、グループでアニメーションのキャラクターを、クレイ(粘土)で作成し、一コマ一コマをデジカメで撮影後、ビデオ編集により一編の作品として完成させ表現力と想像力を養う。	
	Webデザイン演習	HTMLの基礎を学習し、すこし複雑なタグをもちいて作成するWebページと、様々なアプリケーションを利用して作成するWebページを学習する。さらに、どのようなツールでも作成可能であり、Webページがいろいろ利用可能であることを学習する。	
	情報社会の職業観・職業倫理	情報産業の発展と人的資源の育成、情報化の進展に伴う就業・雇用構造変化を概説し、ビジネス組織の変化、情報技術の発展とビジネス・コミュニケーションのあり方や情報化社会における人間関係を通して、情報化社会における職業観について講義する。 また、情報化社会が求めるコンプライアンス(法令順守)について言及し、情報の信頼性とメディアリテラシーについて講義する。誰でも簡単に日常的にアクセスできる情報機器の普及につれて、情報の発信、活用等の場面でも基本的なルールを確立し順守する意識が肝要となる。受発信された情報が他人や社会に及ぼす影響を十分に認識し、「情報モラル」の確立を探究するとともに、情報社会において求められる倫理観の基本的本質について講義する。	
	情報総合演習(フィールドワーク含む)	情報化社会において、様々な産業における情報機器の利用事例について、実際の施設・企業を見学しながら事前資料との比較を行い、最新の産業界の内容を体験し、近年の産業界における情報機器の発展を学習することを目的とする。(オムニバス方式/全15回) (6.橋本・21.西口・19.中田/6回)第1回 ガイダンス 講義の概要と進め方、第2回 情報検索の方法 データベースの利用方法について、第12回 報告会資料 発表資料作成、第13回 報告会資料 発表練習、第14回 報告会1、第15回 報告会2 (19.中田美喜子/3回)第3回 見学施設・企業 情報収集 資料作成、第4回 施設・企業見学、第5回 報告書作成 (21.西口理恵子/3回)第6回 見学施設・企業 情報収集 資料作成、第7回 施設・企業見学、第8回 報告書作成 (6.橋本一夫/3回)第9回 見学施設・企業 情報収集 資料作成、第10回 施設・企業見学、第11回 報告書作成	オムニバス

専門科目(C3)	家政学分野	文化系	都市文化	情報科学	ITパスポート演習	<p>国家試験「ITパスポート試験」を受験し、資格を取得するための知識とスキルを学習することを目的としている。特に基礎的な知識を習得するために、インターネットを利用したe-learningを積極的に利用し、ICT(情報通信技術)を自ら利用した学習方法を実践する。学習の進路にしたがって、3人の専任教員によるコーチングによる個別指導を行い、学習到達度を高める指導を行う。学習内容として「ITの基礎的な知識」「経営全般の基礎知識」「セキュリティに関する知識」「新しい技術動向」「実務で遭遇する身近な問題解決」があり、これらを身につけ、解決できる能力を養うことで、国家資格を取得することを目指す。(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(6.橋本・21.西口・19.中田/3回)第1回 ガイダンス 学習方法について、第14回 総まとめ、第15回 模擬試験</p> <p>(19.中田美喜子/4回)第2回 各分野の概要と説明、第3回 ストラテジ系 企業活動と法務、第4回 ストラテジ系 経営戦略マネジメント、技術戦略マネジメント、第5回 ストラテジ系 ビジネスインダストリ システム戦略・企画</p> <p>(21.西口理恵子/4回)第6回 マネジメント系 開発技術 システム開発、ソフトウェア開発管理技術、第7回 マネジメント系 プロジェクトマネジメント、第8回 マネジメント系 サーマニクスマネジメント、システム監査、第9回 テクノロジ系 基礎理論、アルゴリズムとプログラミング</p> <p>(6.橋本一夫/4回)第10回 テクノロジ系 コンピュータシステム コンピュータ構成要素、システム構成要素、第11回 テクノロジ系 ソフトウェア、ハードウェア、第12回 テクノロジ系 技術要素 ヒューマンインターフェース、マルチメディア、第13回 テクノロジ系 データベース、ネットワーク、セキュリティ</p>	オムニバス
				都市文化入門	<p>都市文化とは、さまざまな文化・芸術を複合的に、それが生まれた場、すなわち都市や地域との関連から捉え直すためにつくられた概念である。この視点の有効性を示し、都市文化メジャーへの導入となることをこの科目はめざしている。ローマ、ヴェネツィア、ロンドン、パリ、東京、広島、尾道、那覇などの具体的な事例をとりあげ、美術、映画、音楽、建築、ファッション、料理など多彩な文化・芸術がそれぞれの場でどのように関係しあいがら生まれてきた、あるいは生まれつつあるかを検討する。</p>		
				日本史	<p>歴史を知ることは、過去を知るだけでなく、現在を知ることでもある。この国がどのように成り立ち、私たちが生きる、今日にいたるのか、その流れを、通時的に大づかみに把握するとともに、政治上の動きだけでなく、社会と文化のうねりにも着目しながら見てゆく。</p>		
				外国史Ⅲ	<p>ヨーロッパの歴史の大綱について、ヨーロッパ以外の地域との関連に注意しながら、基礎的な理解を得ることを目的とする。戦争や王国の興亡などの政治史には最小限ふれるようにし、社会や文化や生活がどうであったかを、なるべく史料の講読や映像の提示によって実感できるようにする。コンプリッチ、ルゴフなど碩学が若い読者に向けて執筆した書物を教科書とする。</p>		
				外国史Ⅳ	<p>今日、唯一の超大国としてアメリカ合衆国が世界の政治・経済を動かしていることは否定できない。特に、「自由と正義」を理念とする民主主義の国として、また、産業社会(大衆消費文化)を世界に先駆けて実現した国として多くの国に影響を与えて続けている。その独立革命以来、世界中から移民が押し寄せた国、国民意識の形成に悩む国でもある。こうした、アメリカの歴史を知ることを通して、これからの世界の行方について考えてみたい。</p>		
				芸術史研究	<p>芸術には、たとえば親子、師弟など人から人へと受け継がれるものもあるが、時代を超えて共鳴し、憧れを呼び、影響を受けるという伝わり方もある。ここでは、通史を離れ、日本美術における時代を超えた影響や私淑に焦点を当てる。たとえば、俵屋宗達・尾形光琳・酒井抱一と続く琳派の流れ、安田軋彦と良寛と万葉集、正倉院宝物と近世後期から近代の文化財意識などテーマを設け、その関係性を見てゆく。</p>		
				映画史	<p>19世紀に誕生し、20世紀を代表する芸術、文化、産業となった映画の歩みを振り返り、その特質、魅力、多様性などについて考える。まず、物としての映画フィルムと映画のジャンルについて簡単な考察を行った後、順次年代を追って映画史を紹介する。映画誕生、サイレント映画、トーキー革命、戦争と映画、巨匠たちの美学、新しい波、ワールド・シネマ、のタイトルのもとに適時短い映像を示しながら検討する。短い時間では十分鑑賞することはできないが、映画史の構造をおよそ理解することを目標にする。</p>		
				マンガ・アニメーション研究	<p>今日、マンガやアニメーションは日本文化の中で欠くことのできないファクターとなっているのはもちろん、海外に発信できる日本の文化としても、ますますその重要性を増している。この授業ではそうしたマンガ、アニメーションの歴史と現状を簡略に概観したうえで、いくつかの作品をとりあげ、技法から社会的背景にいたるまでの多くの側面から詳細に分析する。受講生にとっては日頃接しているマンガ、アニメーションであるが、学問的アプローチがどのようにして可能なかを理解する、糸口となることをめざしている。</p>		
				現代美術論	<p>何故、現代美術という概念が生まれたのか、20世紀に焦点をあててみると理解できる。主に欧米で起きた様々な芸術活動を参考にして分析していくと、現在起こっている現代美術の意味が理解でき、美術を違う視点で観る事ができる。この授業ではまず「アートとは何」を検討した後、「インスタレーション」、「パフォーマンス」、「コンテンポラリーダンス」、「舞踏」、「ビデオアート」、「写真」について概観し、さらに「未来派」、「ロシア構成主義」、「デ・ステイル」、「バウハウス」、「ダダ」、「シュールリアリズム」など近現代の芸術運動について検討する。</p>		
				芸術文化フィールドワーク	<p>芸術文化、生活文化について、対象となる現地に滞在して見学、体験を行っておして学ぶ。前年度に計画を発表して参加者を募り、前期には事前の学習と旅行準備の会合をもち、また課題を与えて文献調査も行う。研修旅行は夏期休暇中に2週間適度実施するが、これには現地の学校などでのプログラムに参加する期間も含まれる。後期には現地での知見に加えて報告書の作成のためにさらなる調査も行い、最後に報告書を刊行し、学内外に配布する。</p>	集中	
				アート・ワークショップ実習	<p>一般の参加者や子どもたちを対象にしたアート・ワークショップは、地域交流イベントとしても数多く開催されている。出会いや交流を創造していくアートワークショップは、社会や人と深く関わる芸術表現といえる。この授業ではアート・ワークショップの特徴である共同制作やコミュニケーションといったポイントをふまえて実践的な学習を行う。企画書や進行計画書をつくって、企画提案に必要な基礎知識を学び、実際にワークショップを開催する。</p>		
				世界遺産学	<p>ユネスコの世界遺産条約が生まれた背景、世界遺産の概要を解説するとともに、アジア・ヨーロッパの事例を取り上げ、世界遺産と文明観・歴史観・地域文化・観光産業などとの関連について考察する。世界遺産条約と世界遺産の概要、日本の世界遺産と文化財保護を確認した後個別事例の検証に入り、厳島神社と原爆ドーム、奈良・紀伊の世界遺産、石見銀山、インドの世界遺産 - 自然と文化、イタリアの世界遺産、ヨーロッパと多国籍の世界遺産を検討する。</p>		
				都市と文化財	<p>日本の近世、近代を中心に、現在、文化財として伝わるモノが、どのような場で、どのような需要を受けて生成され、どのように受容され、消費され、今日まで伝わったのかを「都市」というキーワードのもとに見てゆく。都市以外でそうしたモノが生まれなかったかといえ、そうではない。しかし、たとえ、都市以外で生成されたり、受容されたり、伝わっているものでも、人と物質と富の集まる都市と関わりのないものは圧倒的に少ない。あわせて、前近代と近代以降で変わらない部分をもあぶりだすことにする。</p>		

専 門 科 目 ( C 3 )	家 政 学 分 野	文 化 系	都 市 文 化	地域と食文化	人にとって、いつの時代ももっとも大切なものである食事と食物を文化としてとらえ、いくつかの地域とのつながりを考察する。まず古代ローマ、イタリア、フランス、日本などの料理がどのようにして独自性を確立してきたかを検討し、さらにイタリアや日本の郷土料理の形態、イタリア料理、日本料理の外国における受容についても同様な観察を行う。また、今日の食のグローバル化、「スローフード」をはじめとするそれへの反発の状況についても表情をさぐりたい。
				コミュニティとまちづくり	20世紀、日本の家族やコミュニティ、地域の空間・景観は大きな変容をとげた。この流れは、21世紀においてどのようなものになるのだろうか。また、広島市で暮らす私たちにとって、生活の場としての地域、そしてヒロシマはどのような意味を持つていくのだろうか。コミュニティやまちづくりとその担い手、ヒロシマへのまなざし、空間・景観の変容などの現場を、五感と感性・心を通じて学ぶ努力を重ねながら、生活の場や地域において大切な空間的な取組や事例、そして課題や可能性を考える。
				文化プロデュース論	芸術文化は画家や俳優や演奏家など直接の創り手だけでつくられるものではない。作品を受けとめ楽しむ人々がいてはじめて社会の中で意味をもつ。つくる側と受ける側の間に立つ制作者＝プロデューサーの存在も欠かせない。この授業ではさまざまな文化イベントを企画実施してきた講師がプロデュースのあり方の実例を検証し、望ましい姿を提示することによって、今できる活動、いつかしてみたい仕事を受講者がイメージできるようにすることを目指している。
				アート・マネージメント実習	近年では、アートを一般の人びとに届けるためのマネージメントの重要性がますます大きくなっている。芸術活動にかかわる組織のマネージメントにおいては、芸術の存在意義の確認と、創造プロセスの本質の理解したうえで、芸術が生み出される環境を整え、作品として制作・表現されたものを、社会に紹介し、広い意味で還元していくという考え方が必要である。この実習ではそうした点の理解を徹底したうえで、実際に主として学内施設を利用して展覧会やコンサートを企画実施する。
				社会教育演習Ⅰ	生涯学習と地域、ボランティアの関わりを中心として、専門的な理論および知見を踏まえた実践的な能力の開発を図る。特に、社会教育の対象者としての「学習者」という観点から、学習要求の把握と個別事業計画、学習プログラムの企画立案、事業実施、事業評価などの演習を実施する。
				社会教育演習Ⅱ	「社会教育演習Ⅰ」の内容を受け、事業実施の準備と事業の現場実施研修、改善企画案の立案、新企画案についてのプレゼンテーションなどを行う。
				コミュニティ論概説	過度の個人化に対する社会的な不安、方法論的個人主義に対する懐疑など、個人から成り立つ社会という枠組みについての議論が盛んである。本講義では、「コミュニティ」に関する学説史的な整理を試みる。具体的には、共同体論、社会主義論、コミュニティアニズム、社会心理学、社会関係資本論などを概説しつつ、「コミュニティ」のあり方について検討をすすめる。
				西洋建築史	過去のすばらしい建築をみる喜びを体験し、西洋建築の歴史と様式について基本的な理解を得ることをめざす。授業の内容としては、建築と建築家、西洋建築史の枠組み、古代ギリシアの建築、古代ローマの建築、キリスト教建築のはじまり ビザンティンの建築、ロマネスクとゴシックの建築、ルネサンスの建築、バロックの建築、ロココと新古典主義・折衷主義の建築、アールヌーヴォーと近代建築、建築のオーダー、ヨーロッパ以外の西洋建築を予定している。
				日本建築史(含住居史)	日本の古建築の特色を、寺院・神社・住宅・城郭建築の構造や意匠・技術を通して理解し、日本の文化や伝統および先人の知恵を感じ取ること、また建築学の基礎知識を習得することを目的とする。授業の内容としては、日本建築の種類、社寺建築の構造と細部意匠、飛鳥・奈良時代の寺院建築、平安時代の寺院建築、中世の寺院建築、神社本殿の種類と構造、近世の社寺建築と地方色、古代の住居と寝殿造、寝殿造から書院造へ、書院造の構造、城郭建築(天守)の構造などを予定している。
				観光概論	観光産業は世界で最も成長が目立つ産業だと言われている。観光地域では、経済効果だけでなく、異文化交流も期待されている。一方、観光のための交通量や施設開発、観光客によるゴミや排水が環境に負担をかけていること、観光産業での仕事は条件が悪く、安定していないことも事実である。そこで、持続可能な観光を検討する必要がある。この講義では、観光者の行動、観光産業の特徴、観光客を受け入れる地域の課題という3つの視点から具体的に観光の可能性と課題を考えたい。
				世界の舞台	舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)には演劇、音楽、舞踊など実に多岐分野が含まれる。世界の舞台芸術の多様性を見渡すのは困難であるが、同時に多彩な舞台芸術が共有する最小限必要な要素も存在するともいえる。この講義では南アメリカや沖縄の音楽や舞踊をはじめ、世界の各地の舞台芸術をランダムにとりあげてややくわしくこれらの歴史や現状を紹介し、人間にとって表現するとはどういう意味をもつことなのかを、考えてみたい。演劇実技の授業と連動する企画も計画する。
				舞台衣装	さまざまな舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)には、それぞれに応じた、さまざまな舞台衣装があり、表現の主体である身体に寄り添って大きな役割を果たしている。この授業では、パフォーマンス・アーツにとって重要な要素である衣装を、布あるいはファイバーを用いた立体造形ととらえ、造形活動の基礎的なプラクティスとして、受講者自らが発想し、制作する手ほどきを行う。
				演劇実技Ⅰ	舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)、なかでも演劇と、分野の枠にとらわれない身体表現＝パフォーマンスについて、受講生自身が自ら表現することを体験するプログラムである。心と身体をほぐし、自由になることで新しい自分を発見することをめざしている。まったく経験のない学生が主体となるⅠでは、入門として身近なことから、身体表現をつくりだしていくきっかけを体得することを目標とする。
				演劇実技Ⅱ	舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)、なかでも演劇と、分野の枠にとらわれない身体表現＝パフォーマンスについて、受講生自身が自ら表現することを体験するプログラムである。心と身体をほぐし、自由になることで新しい自分を発見することをめざしている。演劇実技Ⅰで基礎的な部分を理解した学生が履修するⅡでは、人に見せる、表現としての精度をややあげてことを目標とする。最後には小さな公演を実施する。
				演劇実技Ⅲ	舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)、なかでも演劇と、分野の枠にとらわれない身体表現＝パフォーマンスについて、受講生自身が自ら表現することを体験するプログラムである。心と身体をほぐし、自由になることで新しい自分を発見することをめざしている。すでに前年小さな公演を実施した経験をもつ受講生を迎える2年目のこのプログラムでは、さらに練り上げた表現を模索する。
				演劇実技Ⅳ	舞台芸術(パフォーマンス・アーツ)、なかでも演劇と、分野の枠にとらわれない身体表現＝パフォーマンスについて、受講生自身が自ら表現することを体験するプログラムである。心と身体をほぐし、自由になることで新しい自分を発見することをめざしている。すでに前年小さな公演を実施した経験をもつ受講生を迎える2年目のこのプログラム後半にあたるこの科目では、練り上げた表現を求め、最後に公演を体験する。
陶芸論	陶芸では、人間にもっとも親しい土という素材を用いて、人間の手と身体をつかって形をつくっていく。美術のさまざまな分野のなかでも、もっとも根源的な営みのひとつだといえる。この授業では、陶芸についてそうした観点から解説を試み、さらに陶芸を土を用いた立体造形ととらえて、造形活動の基礎的なプラクティスとして、受講者自らが発想し、制作する手ほどきを行う。				

専門科目 (C3)	家政学分野	文化系	都市文化	陶芸技術Ⅰ	人にはさまざまな感覚の愉しみがあり、誰でもいつでも味わうことができるが、その感覚を鍛えていけば、心に感じるものも深みを増す。粘土を手に取り、触れあいながら自分の手でなにかを作れば、自分だけの形が生まれる。この科目は陶芸の専門家を養成することを目標とするものではなく、誰でももっている感覚を愉しみながら自分の世界を再発見する喜びを味わう機会を、受講者に与えることを目的としている。Ⅰでは、まったくの初心者を対象とし、土の扱い方、道具の使い方からはじめ、手捻り、玉作りなどを体験する。
				陶芸技術Ⅱ	人にはさまざまな感覚の愉しみがあり、誰でもいつでも味わうことができるが、その感覚を鍛えていけば、心に感じるものも深みを増す。粘土を手に取り、触れあいながら自分の手でなにかを作れば、自分だけの形が生まれる。この科目は陶芸の専門家を養成することを目標とするものではなく、誰でももっている感覚を愉しみながら自分の世界を再発見する喜びを味わう機会を、受講者に与えることを目的としている。Ⅰで入門をすませた受講者を対象とするこの科目では、紐作り、そして簡単な釉薬掛けを体験し、窯入れを行う。
				陶芸技術Ⅲ	人にはさまざまな感覚の愉しみがあり、誰でもいつでも味わうことができるが、その感覚を鍛えていけば、心に感じるものも深みを増す。粘土を手に取り、触れあいながら自分の手でなにかを作れば、自分だけの形が生まれる。この科目は陶芸の専門家を養成することを目標とするものではなく、誰でももっている感覚を愉しみながら自分の世界を再発見する喜びを味わう機会を、受講者に与えることを目的としている。2年目の受講者を対象とするこの科目では轆轤(ろくろ)技術の修得を目標とする。
				陶芸技術Ⅳ	人にはさまざまな感覚の愉しみがあり、誰でもいつでも味わうことができるが、その感覚を鍛えていけば、心に感じるものも深みを増す。粘土を手に取り、触れあいながら自分の手でなにかを作れば、自分だけの形が生まれる。この科目は陶芸の専門家を養成することを目標とするものではなく、誰でももっている感覚を愉しみながら自分の世界を再発見する喜びを味わう機会を、受講者に与えることを目的としている。プログラムの最終段階となるこの科目では、自由制作として、釉薬掛け・窯入れを行い、作品を完成させる。
				臨床美術Ⅰ	臨床美術は、1966年から臨床に取り入れられており、アートによって脳を刺激し、活性化し、認知症予防や認知症の進行抑制に役立つといわれている。現在では、自閉症の子どもや不登校の子ども、発達に気になる子ども、虐待児の心のケアなども利用されている。臨床美術の基本的な知識と技術を習得し、社会に活かす意味を考察する。
				臨床美術Ⅱ	臨床美術Ⅰで学んだ基本的な知識と技術をさらに向上させ、子どものケアにおけるコミュニケーションのあり方など、作品制作を通して深める。実際にワークショップを企画し、実践することを目的とする。
	環境系	環境学	環境学概論	環境と環境問題との間には、人間の世界観や自然観といった認識上の問題が横たわっている。環境学を学びたいと直感的に思ったとしても、実際に何を学ぶのかが明確であることはまれである。「環境学概論」では、環境とは何か、環境学は何を扱うのかなどについて、環境学という学問領域が成立してきた歴史的背景を中心として概説する。環境学の守備範囲を明確にすることによって、環境学メジャーへの導入としたい。	
			環境科学概説	我々の社会は様々な環境に取り巻かれて成り立っている。しかし、その環境は現在種々の問題を抱えており、我々の社会は「持続不可能な社会」になろうとしている。「環境科学概説」では、現在深刻な問題として取り上げられている環境問題について、環境の変動やその要因を説明するとともに、持続可能な社会作りのための試みを紹介する。この講義を通じて、生活の中で耳にする環境問題をより深く考え、正しく理解するための基礎知識を身に付けてもらいたい。	
			植物バイオテクノロジー	生態系の根幹を形作る植物は、我々の生活の中でも必要不可欠な存在である。こうした植物を利用するためのバイオテクノロジーの技術は日々進歩を遂げており、我々の生活の中の様々な領域で用いられている。しかし、その技術の安全性や有効性などは一般的には伝わっておらず、誤解を招いていることも多い。「植物バイオテクノロジー」では、植物に対するバイオテクノロジーの技術やその役割などの専門的知識を身に付け、技術により生み出される産物を正しく利用するための考察力を身に付けること目的とする。	
			人文地理学(含地誌)	地理学は長らく、人間と自然との関係の学とされてきた。総合の学であり、関係の学である。学問がその対象と方法とで構成されているとすれば、地理学は学問であると同時に、視座であり、考え方である。何と何との「関係」を扱うのかによって、考え方や対処の仕方は変わってくる。「人文地理学」では、世界観と地理学の歴史とを関連づけ、その中で培われてきた地理学のアプローチの仕方について検討する。	
			環境経済学	現在の環境問題は、われわれの社会経済システムおよび生活のあり方に警告を発している。環境経済学は、経済学の見地からこの問題を分析し、政策処方箋を書くことを迫られている。本講義では、まず今日の環境問題の現状と課題を確認し、次に環境の社会費用論、外部不経済論(external diseconomies)、コモンズの理論などの環境問題に関する基本的アプローチを学習する。その上で、環境問題と経済発展を両立させるような、持続可能な新たな社会経済システムおよび生活のあり方を検討する。また、持続的経済発展を追求するための環境面での政策や規制についても検討する。現実の環境問題についても、フィールドワークなどを通じて理解を深める。	
			環境保全学	現在、人間生活のために自然環境は急速に減少しており、自然環境は現在、保護しなければ存続できない状態になっている。また、自然との共生関係が崩れた人間の生活空間では、自然に住む動物と人間との摩擦が生じてきている。「環境保全学」では、多様な生物により構成される自然環境の特徴を正しく理解し、保全活動を実践するための知識を身に付ける。また、授業では主として動物の保全活動を取り扱うことで、自然との共生を模索する力を身に付ける。	
			自然地理学	自然環境は、その地域に存在する地形や気候など様々な要因により作り出されている。そして、時間の流れとともにかたちを変化させてきた。現在、こうした自然環境は、人間活動の影響により急速に姿を変化させてきている。「自然地理学」では、様々な要因により作り出される自然環境を地理学的に検証することを通じて、個々の自然環境の成り立ちや特性を理解するための知識を身に付ける。また、自然地理の情報ツールとして用いられるGPSやGISの仕組み、利用方法を学び、地理学的検証を実践するための知識を身に付ける。	
			環境教育概論	環境問題に対する取組みは、行政や企業だけの取組みのみでは十分ではなく、一人ひとりの知識や行動が必要不可欠である。「環境教育概論」では、行政や企業、NPOの行う市民参加型の環境教育に関する様々な事例を通して、環境問題に対する知識をどのように普及・啓蒙していくべきかを考える。また、自然学校やエコツーリズム等の環境教育活動を行う現場での実践的な事例を通して、エコツーリズムを有効に利用し、また企画するために知識を身に付ける。	
比較環境政策	環境政策に対する意識は、各国ごとに、また時代ごとに大きく異なっている。しかし、現在、環境政策が主要国の主要な関心事であることに疑いがない。ドイツやアメリカなどの諸外国と我が国の比較を通して、環境保護運動、環境政策の誕生、環境運動の制度化、環境法の生成と展開等を概観していきたい。日本と諸外国におけるいくつかの個別環境分野を比較することにより、相互の到達点を確認し、私達の現在の環境に対する意識や今後の環境政策を見つめ直す機会としたい。				

家 政 学 分 野	環 境 系	環 境 学	比較環境史	自然環境は様々な環境要因により変化する。そして自然環境の変化は我々の住む都市環境にも影響及ぼす。「比較環境史」では、日本における自然環境の移り変わりや土地利用の変化を学ぶとともに、諸外国における自然の特性や人類の土地利用の変化を学ぶことを通じて、世界的規模で環境を見つめる洞察力を身に付ける。また、自然の変化を見つめることを通じて、我々の住む生活空間に存在する自然に目を向け、評価できる能力を身に付ける。	
			比較環境法	環境保護の必要性が意識されるにつれ、法的な規制の枠組みも進展している。この授業では、数回ごとに、1つのテーマを取り上げ、日本と主要国における公害問題の歴史や判例に言及しながら、法的な観点からそのテーマについて解説したい。環境法の基本原則、環境権をめぐる主要国の議論から、自然保護、廃棄物処理、リサイクル、大気汚染、地球温暖化等の個別テーマ、さらには、環境をめぐる行政訴訟を中心に環境紛争処理の現況について講義する。	
			地域資源管理論	我々の生活は、エネルギーや材料、食料などのかたちで様々な天然資源を消費することで成り立っている。資源消費国である日本は、消費する資源の多くを輸入にたよっている。「地域自然観理論」では、我々の生活における資源の利用状況、資源の使用実態に目を向けるとともに、日本の新しいエネルギー資源や天然資源に目を向け、自然環境を利用するだけでなく、管理し、正しく運用するための方法について学ぶ。また、資源リサイクル等の環境問題に対する資源利用の心にもついて学ぶ。	
			エコツーリズム実習	現在、環境問題への取組みや各地にある自然環境、自然との共生についての取組みを体験するための試みが行われている。こうした市民参加型の環境活動が「エコツーリズム」とよばれ、さまざまな形で行われている。「エコツーリズム実習」では、地域で行われるエコツーリズムに参加することを通して、地域の環境問題や取り組みの必要性を学ぶ。さらに、エコツーリズムを「企画・立案」「実施」を行う手順を学習することで、環境保全やエコ活動に対して率先して活動できる力を身に付ける。	
			環境計画実習	「環境計画実習」では、環境活動を実際に企画、実施することを通じて、環境活動の意義、環境活動の方法を学ぶことを目的とする。実習では、学生のグループごとに、自然環境を用いた体験型エコ活動を企画・実施し、体験を通してどのような環境を身近な環境に創出していくべきかを考える力を身に付けるとともに、エコ活動を行うための実践力を身に付ける。さらに、グループ活動を通じて、他者との協力、対話などのコミュニケーション能力の向上も目指す。	
			環境学基礎演習	「環境学基礎演習」では、我々の身の回りにおける環境問題を題材に、学生ごとに「調査テーマの設定」、「情報収集」、「プレゼンテーション」、「ディスカッション」を行うことで、環境学を探究するための問題提起から情報収集、問題点に対する考察までの環境問題を考える上で必要となる論理的思考能力と方法論を身に付ける。授業はセミナー形式で行い、活発な意見交換を通して、環境学分野におけるプレゼンテーション能力や対話能力を身に付ける。 (オムニバス形式/全15回) (16.木本浩一/7回)人文科学系の題材を用いて、環境問題に対する情報収集と論理的思考力を身に付ける課題に取り組む。 (50.田頭紀和/8回)授業の解説、および自然科学系の環境問題を題材に、環境問題に対する情報収集と論理的思考力を身に付ける課題に取り組む。	オムニバス
			自然環境学実験	自然環境は多様な生物により構成されている。こうした生物多様性を理解し、自然環境保全を実践するためには、生態系や生物種、遺伝子などの多様性のレベルに応じた調査、分析方法が必要となる。「自然環境学実験」では、森林や微生物の生態系調査、植物の育成に関する栽培実習、植物の形態や遺伝子調査などの様々な領域の基礎的実験を通して、自然環境を調査するための方法を身に付ける。同時に、植物の育成や自然とのふれあいを通して、自然の詳細を理解する観察眼を身に付ける。	
			環境科学演習	環境科学演習では、環境分野での報告論文を通して、最新の環境科学についての知識を得ることを目標とする。演習は「読解」、「発表」、「ディスカッション」の3部形式で行い、知識の向上だけでなく、理解した事柄を表現する力、議論を通じて自分の考えを他者に伝える能力の向上を目指す。さらに、科学雑誌でもっとも著名な雑誌である「Nature」、「Science」の環境分野の記事の読解を通じて、環境科学分野の英文の読解方法を身に付ける。	
			環境フィールドワーク I	現在、都市化の進む日本国内では、「自然との共生」を体験できる環境が減少しつつある。環境フィールドワークでは、人と自然が共存する環境、人により保全される自然環境等、テーマに応じた環境に出かけ、日常生活の中では目にすることの難しい「自然との共生」の実情を学ぶ。フィールドワークでは、それぞれの学生がフィールド調査の目標や観察ポイントを設定し、現地にて調査を行うとともに、現地調査の結果明らかになった事柄から、それぞれの環境の持つ特性を分析する。	
			環境フィールドワーク II	都市生活を営む我々の生活は、様々な点で環境に負荷をかけながら成り立っている。その環境負荷を軽減するために、都市では地方自治体や企業が様々な分野で取り組みを行っている。環境フィールドワークIIでは、水質浄化やゴミ処分、リサイクル産業、エコ活動等に携わる公共機関や企業を訪れ、都市環境を整えるための方法や技術、都市におけるシステムを理解する。フィールドワークでは、グループを設定し、グループ毎に見学目的や疑問点を設定し、見学後には目的ごとの意見交換会を行う。	
専 門 科 目 (C3)	環 境 系	環 境 学	動態地誌学	地誌学は、地域における人間と自然との関係について記述すること目的としてきた。近年、地域に対するイメージやステレオタイプが先行するなかで、地域を認識する、という姿勢の重要性が再認識されつつある。画一化した地域情報を氾濫する中において、地域とは何かという問いは、地域に生き、地域で活動するわれわれにとって生き方の前提となるものである。「動態地誌学」では、身近な地域、遠くの地域、われわれを取り巻く地域など、さまざまな地域についてより動的に把握していくための手法を習得する。	
			平和と人権	私たちは日本社会に生き、国際社会に生きるものとして、今日の日本社会や国際社会の現状と課題についてどれだけのことを知らされているだろうか。あるいは、知ろうとしてきただろうか。アイヌなど少数民族、被差別部落、在日外国人、障がい者・難病患者などに対する差別の解消に取り組む人権活動家の方などから現状と課題の報告を聞く。	
			平和学フィールドワーク I (市内・国内)	国内外でのフィールドワークに参加することを通して、日本社会や国際社会の現状と課題について事前に学習するとともに、現場に自ら赴き、開発途上の低発展性や国内外における平和や人権に対する「自らの価値観」を形成し、国際的な視野で思考し、地域社会に貢献する人材の育成をめざす。	
			平和学フィールドワーク II (平和運動論演習)	「平和運動・思想に関する知識・知的体系の継承と創造」ではなく、「平和運動の継承と創造」をめざす授業展開を試みる。平和に対する「自らの価値観」を形成するとともに、「自己教育(学習)力」を身につけ、国際的な視野で思考し、地域社会に貢献する人材の育成をめざす。	
			平和学特別講義 I (戦争と人間)	戦争や構造的暴力をめぐる今日の状況と、日本社会や国際社会の現状と課題について理解を深める。自らが主体となって戦争や構造的暴力のない社会に向けた取り組みについて考える。平和を創り出す担い手としての自覚を高めたい。	
			平和学特別講義 II (核と人間)	核をめぐる今日の状況と、日本社会や国際社会の現状と課題について理解を深める。広島を中心に世界的に活躍している平和活動家の方々から、活動の取り組みと現状についての報告を聞くことを通じて、自らが主体となって核廃絶に向けた取り組みについて考える。平和を創り出す担い手としての自覚を高めたい。	



専門科目 (C3)	その他	平和学講読 I (Summer Cloud)	1945年8月6日、原爆投下直後とその後の広島の実相を被爆者の証言を通して知るとともに、「ヒバクシャ」が世界に伝えようとしてきている「ヒロシマの心」に傾聴することを通して、核兵器廃絶に向けた取り組みの重要性や平和を希求することの大切さを学ぶ。	
		平和学講読 II (SADAKO)	世界的にも平和の象徴として語られる機会が多い「サダコ」の物語を通して、核兵器の脅威について学ぶ。また、「平和の子の像」建立に込められた「平和への祈り」を通して、平和な社会を創り出す力について考える。	
		Hiroshima Studies I (Abolition of Nuclear Weapons)	核をめぐる今日の状況と、日本社会や国際社会の現状と課題について理解を深める。(英語での講義科目)	
		Hiroshima Studies II (Peace Studies)	8・6を中心にした原爆資料館、平和記念公園などのフィールド・ワークを含めた平和学習プログラムであり、被爆証言を聞くなど、戦争と平和に関する講義を通して、人類は核兵器と共存できるのかを探求する。(英語での授業科目)	
		Hiroshima Studies III (Research)	各自の平和学関連テーマに沿ったリサーチを実施し、報告書・研究論文作成を指導する。(英語での演習科目)	
		地球市民論	私たちは日本社会に生き、国際社会に生きるものとして、今日の日本社会や国際社会の現状と課題についてどれだけのことを知らされているだろうか。あるいは、知ろうとしてきただろうか。広島を中心に活躍している活動家の方々から、反グローバリゼーションに立ち上がる民衆、農民の様子、戦時中に日本へ強制連行、強制労働を余儀なくされた中国人、一緒に学校づくりに励んでいるカンボジア人、フェア・トレードのカウンター・パートナーの現状についての報告を聞く。また、アフリカ音楽との出会いを演出している方からその魅力を伝えていただく。	
		女性の政治参画	21世紀の日本社会は、男女共同参画社会の実現に向けて、国や自治体、個々の企業・ビジネス組織、国民一人ひとりの積極的な取り組みが期待されている。政治的参画についても同様である。しかし、女性の投票行動は積極的である一方、国会議員、自治体議員に占める女性割合は世界的に見ても低調なままである。女性の政治参画の現状を理解するとともに、女性が政治に参画することの意義について理解をめざす。女性の視点で日々の暮らしを点検し、具体的な政策提言に向けて討議を重ね、社会変革の担い手としての自覚を高めた。	
	フェミニズムの思想	本講義では、フェミニズムの思想の起源・歴史・発達について学ぶ。はじめてフェミニズムについて学ぶ学生を対象に、ジェンダー・セクシュアリティの概念や、フェミニズム運動や女性学の歴史について触れるとともに、フェミニズムの多様性や、フェミニズムに対する反論についても学ぶことで、受講者自身のオリジナルの「女性学」の基礎を形作ることを目標とする。発表や討議を通じて、受講者が自覚的・自発的に授業に参加することを求める。		
	キリスト教と女性	(1)キリスト教の女性観について、聖書テキスト・テキストの影響史および各時代の女性観・現代の女性神学の動向、などの側面から、その発達あるいは変遷、問題性と可能性について学ぶ。 (2)聖書テキストの精緻な分析と釈義的アプローチを通して、女性の視点からの新しい聖書の「読み」に接近することを目指す。それにあたって女性神学やフェミニズム的聖書解釈として提示されてきた先行研究を丁寧に参照する。 (3)イエス運動や初代教会における女性の位置づけを検証する。 (4)「キリスト教と女性」というテーマを、現代の具体的な事例や状況に照らし合わせて考察する。		
	セミナー	オープンセミナー	国際教養学部に対応しいテーマを複数選び、各テーマに沿って集中講義の形式で、討論やグループワークなどを重視した講義を行う。また、一部講義では、高校生との合同授業の形態をとることによって、在校生のリーダーシップの養成をめざす。	集中
		卒業研究プレセミナー I	本セミナーでは、問題の設定という点に重点を置き、自らの関心や興味を問題として設定するという方法を検討する。特に、ゼミ形式をとることによって受講生が互いのテーマを他者に説得可能な形で定義することができる技能を身につける。同時に、論文作成上の基本的なルールを具体的な例に則して身につける。	
		卒業研究プレセミナー II	本セミナーでは、「卒業研究プレセミナー I」を受けて、自らが選んだテーマを研究史の中で位置づけるために、文献調査を行う。同時に、各自のテーマに即して、卒論作成に向けてのさまざまな手法を習得する。	
		卒業研究セミナー I	「卒論研究プレセミナー I II」で培った技能を用いて、具体的な素材(資料、文献、データ)を収集し、分析する。併せて、論文の構成を検討し、目次の作成をめざす。	
		卒業研究セミナー II	「卒業研究セミナー I」までの作業を踏まえて、卒業論文を作成する。その際、論文としての体裁、内容、論証などについて十分な検討を行う。	
卒業論文		メジャー修了、「卒業研究プレセミナー I II」「卒業研究セミナー I II」の集大成として、卒業論文を作成する。特に、卒業論文が学生各自の将来設計の中で位置づけられているか否か、つまり進学や就職という具体的な進路に即して、卒業論文が作成されているかという点に注意する。		
関連科目 I (C4)	フードコーディネーター	食品学概論	少子・高齢社会を迎え食生活の多様化している現代において、食品の分類と食品の成分について習熟することは、健康の維持・増進ならびに生活習慣病予防の観点からも大切なことである。健全な食生活を営むために必要な食品成分の性状と機能を総論的に把握することを目的とし、食品と栄養、食品成分とその変化、食品の物性などについて理解を図る。さらに、植物性食品および動物性食品について、各食品の栄養的特徴ならびにそれらの加工特性について各論的観点から理解を深める。	
		フードスペシャリスト論	フードスペシャリストとは、大学で、食の本質が「おいしさ」「楽しさ」「もてなし」にあることを学び、それを支える官能評価・鑑別論、調理学、食物学など食に関する総合的・体系的な知識・技術を身につけ、豊かで安全かつバランスのとれた食を消費者に提供できる力を持つ食の専門職である。この業務内容、養成と資格、活躍分野を理解するため、おいしさの本質、食生活・食文化の変遷、食に関する産業、食品の品質規格、鮮度・熟度とその鑑別方法、食品の安全性など、各項目の概要を紹介する。	
		食品官能鑑別論	種々の食品についてそれらの品質を見抜く技能、また嗜好に直接結びつく食品の評価法の技術について学ぶ。身の回りにおける食品の生産・流通・消費を通して、フードスペシャリストとしての知識や、品質を見極める技術の習得、化学・物理的評価法をはじめ、個別食品の鑑別、食品の表示と専門的な技術を獲得する。官能評価の基本と実施法を解説した後、化学的評価法、物理的評価法、米・小麦粉・そば・イモ類をはじめとするさまざまな個別食品の鑑別について解説する。	
		食品官能鑑別演習	個々の食品の有している調理加工特性を理解し、対象とする食品の品質とは何かを考え、その品質の評価方法について理解する。食品評価には味覚や嗜好に個人差があるが、この個人差を十分に考慮して、食品の品質や鑑別を行う方法を修得する。実際に演習受講者による官能評価や食品の鑑別を通じて、その方法について理解し、実際の食品選択における背景、動機についての知識、技能を身につける。	
		食品学実習 (45時間)	食品の特性を理解するとともに、各種食材の特性や機能性を有効に利用できる技術を修得する。現代人は多種多様な食品・食材を利用するようになり、これらは生鮮品としても利用されるが、多くは加工される。加工の過程で品質は変化し、その栄養機能、嗜好機能、生理機能も影響を受ける。この実習においては、種々の加工食品を試作するなかで、各工程のもつ食品化学的な意義を明らかにする。同時に、加工工程が食品の品質劣化の抑制、安全性の確保、また食品のもつ機能性の維持・増強に寄与することを感じさせる。	

フードコーディネーター	調理科学実習	調理とは、食品素材の栄養効果を高め、衛生的に安全なものとし、味や香り、口ざわりをよくし、食欲を高めるように外觀をよくして、おいしく食べられるように加工することである。そのことによりヒトは栄養を摂取し、命や健康の維持・増進をしている。この実習においては調理に必要な基本的な知識と技術を習得するとともに、実際の食生活への応用力を身につけることを目的とする。さらに、食品の調理性についての理解を深めることを目的とする。 実習を通して、次の項目を学ぶことができる献立を組む。 1 調理の基本 ①調理器具・機械の使用法 ②計量 ③だし・調味について 2 調理操作 ①下処理 ②加熱操作 ③和える、寄せる 3 食品の調理性 ①砂糖 ②調理による食品成分の変化 ③植物性食品 ④動物性食品	
	食品流通・消費論	現在、私たちの食生活は流通の仕組みに支えられている。まずは、流通について理解し、さらに市場への理解と興味を深める。また、社会情勢や嗜好の多様化などにより、流通の形態、役割も大きく変化してきている。その中で、とりわけ食の安全、環境問題、自給率など、私たちの日々の生活に直結する課題も発生し、各分野でさまざまな取り組みが行われている。食を流通という視点で考えることで、消費者として自分がどうあるべきか、考え行動する力を養う。	
	フードコーディネート論	食は毎日の生活に欠かすことのできない要素だが、また食卓はくつろぎの場であり、人間関係を培う場でもあり、食文化を伝承する場でもある。現代の日本の食環境をより楽しくし、心豊かな食生活を送るために、日本の伝統的食文化、外国の食文化はどのようなものか、メニュー、食卓、食空間はどのようにコーディネートされるべきかを考察する。さらに食卓のコーディネートにおいて欠かすことのできない、食器やグラスなどの食卓にまつわる用品の歴史やセッティングの基本を修得する。	
	フードコーディネート実習	食生活を豊かにするためには、栄養や食品への理解と知識が必要である一方、食文化、食習慣もまた考慮する必要がある。これらすべてをトータルにとらえて、コーディネートする能力が必要とされる。食べる人の嗜好・健康状態・目的に合わせた献立作成、食事の形式や食材の選択、合理的な調理方法、盛りつけ、テーブルコーディネートなどの能力を養うことがこの実習の目的である。テーブルウェアに関する解説などを行った後、メニュープラン・トータルプランを作成し、テーブルコーディネート、調理、サービスを繰り返し練習する。	
医療秘書	医療秘書概論	病院医療の専門領域細分化により、専門職周辺に発生する事務的ならびに秘書的業務について、その内容を理解し、関連する専門職としての知識だけでなく、互いの業務が効率よく発揮できるように援助と連絡調整を行うことを主とする医療秘書について学ぶ。医療事務の主な仕事である「診療報酬請求事務」については簡単な説明にとどめるが、医療秘書としての基本知識を高めるために、病院組織とその機能、さらには医療知識などを学ぶ。	
	医療秘書演習	医療秘書概論において理論化された医療秘書業務を理解したうえで、医療秘書業務に必要なとされる接遇応対や文書実務に関する基本を学ぶ。ケーススタディを通して、窓口業務や応対などの接遇の意味を理解するとともに、より良い人間関係づくりのためのコミュニケーションのあり方を学び、その実践的なトレーニングにより身につけることを目標とする。医療事務論を先に履修すると、現場の仕事をよく理解でき、より深くトレーニングを受けることも可能となる。	
	医療事務論	明治維新以後、欧米を規範に医療制度が整えられ、病院が誕生するとともに医療保険も整備されてきた。医療機関の現場では、患者の診療に付随して発生して来るさまざまな事務処理があり、保険診療に関する知識や各種の専門知識が必要である。ここでは、医療費の計算、診療報酬明細書作成のための知識を習得し、診療報酬点数表の基本的構成を理解し、点数算定方法を学ぶ。さらに、医療外来で作成された簡単な診療録(カルテ)から診療料を計算できるように学習する。	
	医療事務演習Ⅰ	医療事務論で学んだ簡単な医療費の計算、診療報酬明細書作成のための知識を習得するためのトレーニングを行う。	
	医療事務演習Ⅱ	医療事務論で理論を理解し、医療事務演習Ⅰで簡単な医療費の計算、診療報酬明細書作成のための知識を習得したことから、さらに、診療報酬点数表の基本的構成を理解し、点数算定方法を深く学ぶ。外来の簡単な診療録から入院の診療報酬を計算できるように学習しながら、診療報酬明細書を書けるようにトレーニングし、診療報酬明細書の点検のトレーニングもする。	
	医療関係法規	国民の安心した生活を基本とすることをめざした国の医療は、さまざまな法律によって厳しく規制されており、ここ数年の間に制度もめまぐるしく変化している。したがって、医療施設ならびに医療従事者に関する法制度について理解しなければならない。高齢社会においては、窓口業務における対応が重要になることから、法制度を理解するとともに、医療保障制度などの習得することめざす。	
	医療情報処理Ⅰ	医療事務論 医療事務演習Ⅰ・Ⅱで学んだ診療報酬の算定方法を確認しながら、診療録を見ながら医療コンピュータに入力するためのトレーニングをする。この医療情報処理Ⅰでは、入力に慣れること、入力スピードをあげることを目標とする。	
	医療情報処理Ⅱ	医療情報処理Ⅰでは、医療事務論 医療事務演習Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を医事コンピュータ練習ソフト『医事NAVIⅢ』に入力するトレーニングをしたが、医療情報処理Ⅱでは、『電子カルテシステム』にて病院での全体像、IT化の流れと診療録の電子化の要件、電子カルテの定義と関連知識を学ぶ。電子カルテソフトの操作方法と電子カルテの位置づけの理解をめざす。	
	手話	手話は、日頃話している言語とは異なる体系をもった言語である。日本語は「日本語を手の動きに置き換えた記号」ではなく、むしろ英語などの外国語のようなものといわれている。その一方で、文法的な働きを持つ顔の表情や視線などで発せられたメッセージを目(視覚)で受け取る「視覚言語」であるともいわれている。コミュニケーションの手段としての手話を学び、そこに存在する「ろう文化」に目を向けることで、聴者(聞こえる人)自身の文化も再確認し、お互いを尊重し合える関係性を学ぶ。	
	社会教育課題研究Ⅰ	社会教育施設および他大学と連携しつつ、野外活動に必要な知識や技術について研修し、指導者としての実践力を身に付ける。	
社会教育課題研究Ⅱ	「社会教育課題研究Ⅱ」を受けて、小学生もしくは青少年を対象とした企画事業を、立案、準備、実施、ふりかえりというプロセスで遂行する。		
社会教育計画Ⅰ	社会教育計画の理論・方法について概説する。特に、社会教育の法的規定、ノンフォーマル・エデュケーション、自己教育、生涯学習、地域教育などのキーワードについて整理し、社会教育職員の役割と社会教育主事との関係について検討する。以上を踏まえて、具体的な社会教育計画の作成、学習プログラムの作成、社会教育施設の管理運営、などについて学ぶ。		
社会教育計画Ⅱ	「社会教育計画Ⅱ」を受けて、社会計画に必要な調査活動、学習プログラム、学習相談、候補活動・公聴会の事例を紹介し、社会教育施設の管理運営のついて検討する。		
生涯学習論Ⅱ	この授業では、以下の3点を目的に設定している。(1)生涯学習が提唱され、世界に普及をみた経緯と背景を理解する。(2)生涯学習社会を実現するための方策を、学校教育と社会教育の2側面から検討する。(3)21世紀を生き抜くための学び方を習得する。特に、生涯学習社会という観点から、その学びの内容、その具体的な方策について検討する。		

開連科目Ⅰ(C4)

関連科目Ⅰ(C4)	教職	情報メディアの活用	図書館資料を構成する多様なメディアに関する理解を深め、情報メディアを活用するための実務的技術の育成を目指す。デジタルアーカイブという観点から、情報メディアの意義・種類・特質、メディアを扱う上で必要な著作権や情報倫理について学ぶ。またコンピュータやネットワークの基本的操作や情報メディアを管理・運用するための技術を学ぶ。学習メディアセンターとしての役割を認識し、図書館に関わるさまざまな情報提供と学習者の情報メディア活用を支援するための知識と技術を修得する。
		図書館情報技術論	図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するためにコンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説し、必要に応じて演習を行う。まず、コンピュータを使いこなす、自ら情報を収集し、整理し、保存する能力を身に付ける。また、図書館とコンピュータとの関係について深く理解させ、司書の業務にコンピュータを有効に活用する能力を身に付けさせる。学習者の個々に能力に応じて指導し、コンピュータ活用能力の基礎力アップを目指したい。
		情報検索演習	レファレンス・ワーク演習と関連して、文献やデータの検索が自在に行えるようにする。演習問題を文献やweb-siteから検索して回答を導き出す能力をつける。検索のツール、例えば、蔵書検索として、NDL、Webcat、Worldcat、雑誌記事検索として、NDL、NIIなどを利用する方法を学ぶ、さらには、古典籍や漢籍、公文書、政府関係資料、法令関係資料、判例や特許関係の資料の検索ツールについて学ぶ。また、さまざまな情報検索問題を与え、それを解決させることにより、情報検索の技術の向上を図る。
		情報サービス概論	図書館における情報サービスの意義とあり方について、特に近年の電子図書館化による多様な情報ニーズへの対応に主眼をおき、情報サービスの理論と情報検索の実践を解説する。まず、情報サービスの定義について明確にし、情報サービスの歴史と情報サービスの意義、サービス環境、館内インフォメーション、図書館利用者教育、情報リテラシー教育について述べる。また、情報サービスの情報源として、レファレンスコレクションの種類や電子メディアの種類と特徴、レファレンスコレクションの構築について理解させる。
		英語科教育法Ⅰ(学習指導要領)	本科目は、学習指導要領に示された外国語科の目標、科目ごとの目標、指導内容、言語活動、言語材料、題材、内容の取り扱いなどについて詳述するとともに、中学校及び高等学校の英語の授業において活用できる文構造や文法事項の用例について解説することを目的とする。
		英語科教育法Ⅱ(模擬授業)	本科目は、模擬授業(peer-microteaching: simulated classroom EFL teaching)の設計・実施・評価から成る一連のサイクルを経験することにより、英語の授業を展開する際に求められる英語の指導力を養成することを目的とする。その際、文部科学省検定済みの教科書の内容に基づいた教材研究の進め方や学習指導案の書き方に習熟させるため、実習生による発表や演習など演習の機会を確保するよう努める。
		英語科教育法Ⅲ(指導技術)	本科目は、英語の授業を展開する際に必要な言語活動の進め方や指導技術の用い方を具体的に解説するとともに、それらの指導法を模擬授業や教育実習において実習生が自ら応用できるように、実践的な訓練の場を設けることを目的とする。その際、文部科学省検定済みの教科書を用いて、文構造、語彙、文法事項、題材などの復習、導入、説明、練習、整理を行うことができるよう、授業の流れに則した活用例に習熟させる。
		英語科教育法Ⅳ(授業評価)	本科目は、模擬授業(peer-microteaching: simulated classroom EFL teaching)の設計・実施・評価から成る一連のサイクルを経験することにより、英語の授業を観察あるいは評価する際に求められる分析的な評価力を養成することを目的とする。その際、Reflective Teaching(反省的教授法)の理念に基づいて、実習生が自己の教授行動を鏡的に内観する認知過程を繰り返し経験することにより、授業改善のための手掛かりを自ら発見できるように促す。
		国語科教育法Ⅰ(学習指導要領)	国語科授業(中学校・高等学校)を構想・実践するための基盤となる学習指導要領に対する理解を深めさせることを、目的とする。講義では、新学習指導要領で国語科の目標に示されている「伝え合う力を高める」ことや「思考力や想像力」を養い伸ばすことの重要性を認識させるとともに、確かで豊かな言語活動を通して系統的な言語技能を高めることの必要性等について考えさせる。また、戦後、今日に至るまで改訂を重ねられてきた学習指導要領の史の変遷についても、資料の検討を通して理解させる。
		国語科教育法Ⅱ(模擬授業)	実際に国語科の模擬授業を行わせ、それを相互に批評し合わせることを通じて、学習指導案作成能力と授業実践力を向上させることをねらいとする。学習指導案の作成にあたっては、いくつかの形式の学習指導案のフォーマットにそって授業を構想させ、指導案と授業の関係について考えさせる。また、指導案作成の段階で持った授業イメージと、実際の模擬授業との違いについて分析させることによって、学習者とのやりとりを進める実践的な力の大切さについても気づかせる。本科目は、質の高い教育実習を行うための基盤としても位置付けられる。
		国語科教育法Ⅲ(指導技術)	学習指導の技術を、多角的に学ばせる。講義では、発問、板書、ノートテキング、ワークシート作成、机間指導等の指導技術の基礎・基本について実践事例に即して理解させる。また、国語教室経営という視点からも、授業の構築について考えさせていく。さらに、教師主導型の注入的な授業ではなく、学習者の主体的な学びを可能にするための、学習意欲喚起の手立てや、生徒との対話を開くための方法、学習形態の工夫等についても、すぐれた授業実践にふれながら考えさせていく。
		国語科教育法Ⅳ(授業評価)	学習者の意欲喚起と国語力の向上に資する国語科評価のあり方について理解させることを、目的とする。授業では、まず評価と評定の違いを明確にする。その上で診断的評価、形成的評価、総括的評価を適切に位置付け、指導と評価の一体化を図ることの大切さを理解させる。また、教師による評価だけでなく、学習者による自己評価や相互評価を適切に取り入れることの必要性を具体的事例の提示を通して指摘する。さらに、評価対象については、認知面や技能面に偏ることなく、情意面にも着目することの必要性を説く。
		情報科教育法Ⅰ	教職課程「情報」における必須科目。情報教育について、その歴史とカリキュラムの概要について学ぶことを目的とする。
		情報科教育法Ⅱ	教職課程「情報」における必須科目。情報教育について、内容に適した授業内容の指導要領を作成でき、それにしたがって模擬授業が適切に実施できることを目的とする。
社会科教育法Ⅰ(社会: 地歴分野)	中学校社会科の指導に求められる(1)授業分析、(2)授業開発、(3)授業評価・改善の知識と技法を、とくに地理的分野と歴史的分野に焦点をあてて育成することを目的とする。 上の目的を達成するために、以下の方法論をとる。(1)1つの立場・思想を前提にすることなく、多様な目標・内容・方法の体系の存在を理解させ、それらを吟味・選択、再構成できるように、授業づくりを捉える理論的な見取り図をつくらせる。(2)あわせて実践例の比較検討や代表的な単元の指導案づくり、模擬授業等の活動を取り入れ、実践的な技量も高めていく。本講義を通して、反省的に実践していける教師の基礎的資質を養いたい。		
社会科教育法Ⅱ(社会: 公民分野)	この授業は、中学校社会科公民的分野の理論と実践、特に目標・内容・方法について解説することを通して、すぐれた授業を構成し、展開していくことのできる実践的知識・態度・能力を培うことを目標とする。そこで、中学校学習指導要領を踏まえつつ、公民的分野の目標の構造、カリキュラム構成、単元構成、授業設計、学習展開、評価方法などについて具体的に講義する。それとともに、実際の授業記録を読み解きながら、よりよい公民的分野の授業づくりについて具体的に考察する。		

開 連 科 目 I (C4)	教 職	社会科教育法Ⅲ(地歴)	高等学校地理歴史科の指導に求められる(1)授業分析,(2)授業開発,(3)授業評価・改善の知識と技法を育成することを目的とする。 上の目的を達成するために、以下の方法論をとる。(1)1つの立場・思想を前提にすることなく、多様な目標・内容・方法の体系の存在を理解させ、それらを吟味・選択、再構成できるように、授業づくりを捉える理論的な見取り図をつくらせる。(2)あわせて実践例の比較検討や代表的な単元の指導案づくり、模擬授業等の活動を取り入れ、実践的な技量も高めていく。本講義を通して、反省的に実践していける教師の基礎的資質を養いたい。	
		社会科教育法Ⅳ(公民)	この授業は、高等学校の公民科教育の理論と実践、特に目標・内容・方法について解説することを通して、すぐれた授業を構成し、展開していくことのできる実践的知識・態度・能力を培うことを目標とする。そこで、高等学校学習指導要領を踏まえつつ、公民科の目標の構造、カリキュラム構成、単元構成、授業設計、学習展開、評価方法などについて具体的に講義する。それとともに、公民科の科目である現代社会、倫理、政治・経済の授業記録を読み解きながら、よりよい授業づくりについて具体的に考察する。	
		人間関係論Ⅰ(含家族関係学)	前半で人間関係を社会心理学的観点から解説し、後半で人間関係の1つである家族に焦点をあて講述することで、人間関係に働く心理構造や家族内の人間関係の特徴などを理解させる。	
		人間関係論Ⅱ	人間関係を、心理学的観点から検討する。人間関係に影響を与えるもの、生涯発達における人間関係の特徴、人間関係の始まりと展開、職場や社会における人間関係などについて説明し、自分を含めた人と社会との関わりについて考える。	
		生活経営学(含家庭経営学・家庭経済学)	人間生活は、あまりにあたりまえすぎて、これまで必ずしも研究の対象として取り扱われてはこなかった。生活経営学では、個人の生活や家庭生活を研究対象としてとらえる。個人の生活や家庭生活を、生活とはどのようなものであるかという生活構造の視点、および生活が外部環境との相互作用によって成り立っているという視点から理解することを目的とする。生活経営の考え方の基礎、生活の変化についての学習をふまえ、主として生活時間の視点から生活経営を考える。	
		教育原理	子どもを育てる行為としての教育について、その教育活動の目的・内容・方法・評価という基本的諸原則について考察することにより、今日の学校教育の望ましいあり方について考えていきたい。	
		教育心理学	今日の学校における教育過程の心理的側面について考える。近年、教育における教材の持つ論理性と子どもの認識の発達の関係に関して研究が深められているが、それらの知見についても紹介しながら、学校の教育実践に近年の成果がどのように生かされているか考えてみたい。	
		教育社会学	教育という複合事象を中核の対象におき、その教育事象の社会的機能の側面を考えて行く。具体的には、子どもの社会化は、家族集団、仲間集団、学校集団においてどのようなプロセスを経て行われるのか。学校のカリキュラムと社会要求、授業における教師・生徒のストラテジー等の問題について考察する。	
		教職実践演習	本授業科目は4年後期に開設されていることから、これまで教職課程を履修してきたことがらに真に身に付いているかを省察するとともに、不足していると自覚される知識や技能を補うことを目的とする。具体的にはより実践的な活動(事例研究、現地調査、模擬授業)を通して以上のことを習得することをめざす。	
		教育史	中世から現代に至る欧米及び近代日本の教育思想、制度、習俗及び教育実践の変化・発展に関して考察するが、それらの歴史的事象を単に学説、制度等の連続、非連続として捉えるのではなく、その時代の社会、経済、政治、文化と係わらせてトータルにまた構造的な視点から考えたい。	
		学習心理学	学習に関する基礎的知識を習得し、学習に関わる諸問題を理解することができるようになることを目標とする。そのため、特に学校における学習指導を効果的に行うための基本となる事項については具体例をあげ、体験的実習や演習を採り入れて授業を進めていく。	
教育と法	教育行政のしくみ、主に学校教育制度を法的側面から考察する。具体的な資料(裁判例や事件記事、統計的数値)の読解を通じて生きた教育の制度を法的実態側面(教育法規、教育法令の考え方や知識)から理解することしたい。			
開 連 科 目 II (C5)		日本語教育実習	本授業では、日本語教員養成課程での学習内容をもとに、授業計画、教案作成、教材準備、授業評価、模擬授業など、実際の知識と技術を実習の活動全てにおいて実践し、習得することを目的とする。単に実習先の日本語教育の準備をするのではなく、世界の日本語教育の実情、日本語教育の歴史などに関する知識をふまえ、自らの実習という活動がどのような意味を持ち、誰のための日本語教育であるのかを理解して活動する基礎を理解することとする。なお、実習は国外の日本語学科を持つ大学に行く予定である。	
		日本語教授法Ⅰ	本授業では、実際の日本語教育の現場で授業を行うために必要となる基本的な知識を深め、習得することをめざす。言語教育法・実技、異文化間教育、日本語教育におけるコミュニケーション教育、言語教育と情報、教科書分析、教材分析について、テキストをもとに受講生が関連した内容についてさらに調査し、発表を行い、ディスカッションを行いながら進める。特に、日本語教育実習に参加する受講生は、授業内容を実習での活動につなげるものとする。	
		日本語教授法Ⅱ	本授業では、実際の日本語教育の現場の実践に関する知識を深め、習得することをめざす。各種教材の扱い、4技能の扱い、異文化の扱いなどについて、日本語学習者によって多様な可能性があることを学び、学習者の多様性にどのように対応するのか、自ら判断できるようにする。授業の後半では、実際に教案を作成して模擬授業を行うことにより、学習内容と現場の連携を図るものとする。特に、日本語教育実習に参加する受講生は、授業内容を実習での活動につなげるものとする。	
		生涯学習論Ⅰ	21世紀は生涯学習の時代である。この授業では、生涯学習を要請する現代社会の特質を理解したうえで、新しい学び方およびライフスタイルの構築を試みる。諸外学習をキーワードとして、その概念をはじめとして、職業生活、地域、州境、女性、高齢者、情報技術などとの関連について考察する。	
		生涯学習概論(司書)	本講義においては、まず、欧米の「生涯学習社会」の成立過程について歴史的にとりあげ、今日、多様な展開を見せている様々な形態について概観する。そして、そのような動向の中で、戦後のわが国の「社会教育」「生涯教育」が「生涯学習」へととらえ直されて行った経緯を明らかにしたい。その上で真の生涯学習社会を構築するために今日の生涯学習の方向性と課題について検討する。とくに、生涯学習の展開に図書館、学校図書館が果たすべき役割・機能についても考えてみたい。(オムニバス形式/全15回) (34.松浦正博/5回) 欧米の「生涯学習社会」の成立過程について歴史的に跡づけるとともに、今日多様な展開を見せている様々な形態について概観する。 (138.天野かおり/10回) 今日、わがくににおいて「生涯教育」から「生涯学習」への移行の現状をについてその方向性と課題について検討する。とくに、生涯学習の展開において、図書館、学校図書館が果たす役割・意義について考える。	オムニバス

図書館概論	図書館とは何か、図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図る。また、図書館がどのような歴史を持ち、現在どのような種類の図書館があり、各館種の図書館にどのような違いがあるか、その社会的意義、図書館の自由、著作権の知識、さらに、図書館職員が果たすべき役割とそのための資格および専門性の内容、図書館に係わる関係機関について、そして、図書館の現在の課題とこれからの展望など、幅広いテーマの基本を知り、考察することによって、その中で、特にまず、身近にある図書館に興味と関心が持てるよう概説する。	
図書館経営論	公立図書館の経営に係わる諸問題を概説する。図書館が市民に親しまれ役立つ施設となるために求められる経営のあり方を考える。例えば、図書館評価と統計、図書館サービスの評価、図書館の建設、図書館の施設と設備、図書館の管理運営上の諸問題、危機管理など、さらには図書館職員を取り巻く現状と課題、図書館経営の現状と課題などについて講義する。	
図書館サービス論	公立図書館のサービス活動の内容を中心に、それを支える理念および近年の公立図書館のサービス活動の歩みと現在の課題を概説し、公立図書館への関心と理解を深める。公立図書館のサービス活動の歩みについて概説し、図書館サービスの概要、貸出の意義や登録・貸出方法・貸出の規程、予約サービス、相互協力、図書館サービスと著作権、行事・集会活動、AVサービス、利用に障害のある人々へのサービス、全域サービスと図書館システムについて述べ、最終的には図書館の自由とは何かということについて理解させる。	
レファレンスサービス演習	レファレンス・サービスを行うための、問題解析、情報源の探索、情報の評価、回答に至る一連のプロセスを演習により習得する。web-siteや図書館の活字資料から自在に情報を求めることが出来るようにする。レファレンスの問題演習を実際に行わせることによって、実践的技術を修得させる。また、レファレンスのインタビューを練習させることによって、質問の受け方の訓練を行う。また、質問内容の調査や回答の実際例を学び、実践的技術を身に付ける。	
図書館資料論	公立図書館における資料の選択・収集の問題を中心に、図書館資料の特質と種類、新しいメディア、資料の利用、出版流通、蔵書管理と保存等の問題について学ぶ。まず、図書館資料とは何かについて明確にさせ、図書館資料としての図書、雑誌と新聞、地域資料、小冊子、地図、楽譜、外国語資料、AV資料、電子資料、インターネット情報など、さまざまな資料について理解させる。さらには、資料選択、複本購入の問題、資料選択の実際と課題、図書館資料の保存と電子化などの問題について述べる。	
専門資料論	図書館における資料や情報メディアが多様化している今日、その現状を把握し、図書館が収集・提供する各々の資料について理解を深め、それらを上手に活用する能力が必要となる。本講義ではメディアや内容の異なる図書館資料を取り上げ、それぞれの資料の特質、収集、提供、利用における留意点などについて論じる。点字資料や電子資料、地域資料、政府刊行物、視聴覚資料、逐次刊行物、地図資料など、さまざまな資料について学ぶ。	
資料組織概説	資料組織とはなにか、なぜ必要なのかといった内容から、資料が組織化されている現状、そして図書館が扱う資料・情報を組織化していく上で必要となる知識である目録法と分類法について概説する。最終的には資料組織についての理解を深める。資料組織の業務と意義、書誌コントロール、OPAC、記述目録法の実際、主題目録法について学び、分類法の基礎を理解させる。	
資料組織演習	日本目録規則を理解し、これにより資料の目録が記述できるようになることを目指す。日本十進分類法を理解し、これにより資料に分類記号が与えられるようになることを目指す。国際標準書誌記述とNCRとの関連について理解させる。タイトル関連情報、版表示と関連事項、出版事項、対照事項、注記などについて説明し、個々に日本十進分類法の演習を解かせることにより、資料組織に対する深い理解へと結び付けて行く。	
児童サービス論	公立図書館の児童サービスについて、乳幼児から中学生くらいまでを対象と考えて、児童サービスの意義とその歩み、子どもの読書の現状と読書の役割、絵本や児童文学などの図書館資料についての知識と児童書の選択・収集・保存、資料提供等の基本的なサービスと読み聞かせやストーリーテリングなどの行事・集会活動等のサービス内容、児童サービスに係わる施設・設備のあり方、ヤングアダルト・サービス、学校図書館の状況と公立図書館による学校図書館への援助、それに現在のさまざまな動きと課題等を概説する。特に、児童書の内容を知り、児童サービスの意義について理解を深めることを目的とする。	
図書及び図書館史	世界と日本の図書および図書館の歴史を概説する。世界における、文字と図書の歴史を概説し、古代の図書館、中世の図書館、近代の図書館についてそれぞれ理解させ、また、各国の図書館の現在を紹介する。日本についても同様に、古代、中世、近世、明治時代、戦後、現代へと、時代を追いながら行使し、時間と場の広がりの中で、日本の図書館の現状を意識させる。	
図書館特論	「いま図書館は～マスコミに見る図書館」をテーマに、新聞や雑誌などで図書館がどのように報道されているか、その内容を紹介し、報道のあり方を検証するとともに、公立図書館でいま何が問題となっているか、市民は図書館に何を求めているかを考察する。例えば、犯罪報道と図書館、話題の図書館と報道のあり方、図書館民営化報道とその実態などについて講義し、図書館員のあり方を考える。	
学校経営と学校図書館	1997（平成9）年の学校図書館法の改正により、2003（平成15）年4月から12学級以上の学校に司書教諭が配置されている。1998（平成10）年には、学校図書館経営の中核を担う司書教諭を養成する「学校図書館司書教諭講習規程」が一部改正された。司書教諭の資格を得るための講習で履修すべき5科目の一つである本科目では、学校図書館の教育的意義やその経営・管理、司書教諭の役割などについての理解を図り、学校教育目標の達成を支援する学校図書館のあるべき姿について考察する。	
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの役割、内容と特性、選択・収集とその組織化について概説する。特に、資料の選択、受入、分類、目録など、資料組織化の実務を知ることによって、学校図書館が多様なメディアを的確に選択・収集し、組織化することが、児童・生徒の主体的な学習に役立つ図書館になるための基本的な要件であることについて理解を深めるとともに、コンピュータ化やインターネット活用の状況や今後のあり方を解説する。	
学習指導と学校図書館	学校図書館法の一部が1997（平成9）年に改正され、2003（平成15）年4月以降12学級以上の学校に、半世紀近くも配置が猶予されていた司書教諭の配置が義務づけられた。現在学校教育は、知識を一方的に教え込みがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと基調の転換が図られている。1998（平成10）年に改正された学校図書館司書教諭講習の5科目の一つである本科目では、学習指導における学校図書館メディア活用の基本的な視点と具体的な活用方法などを取り扱う。	
読書と豊かな人間性	子どもの読書状況と読書の意義、子どもの本の内容について概説したうえで、読書を推進する施設としての学校図書館や関連施設の役割および現在とこれからの問題を考察する。絵本や児童文学など、基本的な児童書を紹介することにより、子どもの本に関心を持ち、子どもの読書の現状と問題を幅広い視野で理解させることを図り、読書する子どもたちを育て、魅力的な学校図書館づくりができる能力を身につけることを目的とする。	

教育学概論（含博物館教育論）	博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する基礎的能力を養う。一般的な学びの意義を確認した後、博物館教育の意義と理念として、コミュニケーションとしての博物館教育、博物館教育の意義、博物館教育の方針と評価について検討し、博物館の利用と学びとして、博物館の利用実態と利用者の博物館体験、博物館における学びの特性を解説、博物館教育の実際として、博物館教育活動の手法、博物館教育活動の企画と実施、博物館と学校教育について講義する。	
博物館概論	博物館に関する基礎的知識を理解し、専門性の基礎となる能力を養う。まず博物館学の目的・方法・構成、博物館学史について簡単に触れた後、博物館の定義（類縁機関との違い、種類（館種、設置者別、法的区分等）、目的、機能について詳述し、さらに博物館の歴史と現状として、我が国及び諸外国の博物館の歴史、我が国及び諸外国の博物館の現状、学芸員の役割（定義、役割、実態）、博物館関係法令を概観する。	
博物館経営論	博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営（ミュージアム・マネージメント）に関する基礎的能力を養う。まず博物館の経営基盤として、ミュージアムマネージメントの意義を説き、行財政制度、財務、施設・設備（ユニバーサル化を含む）、組織と職員などについて解説し、博物館の経営として、使命と計画と評価、博物館倫理（行動規範）、博物館の危機管理利用者ととの関係に関して紹介し、さらに博物館における地域や博物館間の連携にふれる。	
博物館資料論	博物館資料の収集、整理保管等に関する理論や方法に関する知識・技術を習得し、また博物館の調査研究活動について理解することを通じて、博物館資料に関する基礎的能力を養う。まず博物館における調査研究活動についてその意義と内容を検討した後、博物館資料の概念として、資料の意義、資料の種類、資料化の過程を検討する。また博物館資料の収集・整理・活用として、収集理念と方法、資料の分類・整理、資料公開の理念と方法（アクセス権、特別利用等を含む）について論じる。	
博物館情報・メディア論	博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養う。博物館における情報・メディアの意義を考察した後、博物館情報・メディアの理論として、博物館活動の情報化、資料のドキュメンテーションとデータベース化、デジタルアーカイブの現状と課題、映像理論、博物館メディアの役割と学習活用などを検討し、博物館における情報発信、博物館と知的財産などについても解説する。	
博物館資料保存論	博物館は「博物館法」に端的に表われているように、いくつもの機能を持っている。そのうち、外部からも見え、わかり易いのは展示だろう。展示は外向きに開かれた部分で、博物館の顔である。逆に、外から最もわかりづらいのが保存である。博物館は収集した資料を保存し、守り伝えてゆく使命を負う。これはいわば、現在のためではなく未来のための仕事である。展示と保存はしばしば相反するが、保存する必要性を知らしめるためにも展示は重要である。博物館における資料保存の意義と理念を学ぶと同時に、資料保存の知識を習得する。	
博物館展示論	来館者や地域のひとつひとつにとって、博物館の最も身近な機能は展示である。展示のしかた次第で、来館者にとっての博物館資料の認識まで左右しかねない。そのためには、その資料をいかにわかり易く、或いは、見易く、また、よりよく見せるかという技術は博物館学芸員にとって必須のものである。もちろん、博物館と一口にいってもその展示室の境界や可能性はさまざまである。ここでは、そもそも展示するとはどういうことか、その意義と理念を学ぶと同時に、いくつかの具体例をもとに、展示方法に関しての技術や知識を習得する。	
博物館実習Ⅰ	学芸員の業務を理解し、実践的能力を養うことを目的とする実習で、一部市内の博物館見学を行う他は、学内で実施する。展示の基礎的知識・技能、資料の点検と整理保管、各種の絵画、彫刻、工芸品、服飾品などの取り扱い、拓本の取り方、植物資料の維持管理などについて実習を行うほか、学内で展覧会を企画して開催する。あわせて館園実習に関する事前の指導、準備も行う。	
博物館実習Ⅱ	学芸員の業務を理解し、実践的能力を養うことを目的とする実習で、1週間程度、さまざまな学外館園で実施する。	
博物館実習Ⅲ	学芸員の業務を理解し、実践的能力を養うことを目的とする実習。館務実習の事後指導および、2泊3日の遠隔地での見学研修旅行、その事前事後指導を内容とする。受講生の各種報告書をまとめて、「実習報告」を刊行する。	集中
教職論	教職をめぐる組織・制度・環境等について学び、教師としての資質・能力に何が求められるのかを追究する。具体的には、「教職の要件」、「教職の意義と教員の使命・資質」、「教員の仕事と役割」、「教員の研修と服務規程」、「初等・中等教育と教員」、「教員養成と教職課程」、「求められている教師の資質・能力及び指導力」等を学ぶ。また、特別講義として、教職経験者から現場の実際について講話を聞き、学びを深める。	
教育課程論	教師の実践的力量的の中核となるカリキュラムの開発や教材の活用、教育の方法と技術、児童生徒理解と教育の評価に関する知識と技能について、教育的タクト形成の視点から学ぶことにより、教職能力の基盤を構成している教育課程論の知見を習得する。具体的には、「教育実践と教育方法学」、「学習指導要領の歴史と論理」、「学校教育の構造と教育課程の編成」、「学級で教えることの技術とドラマ」、「児童生徒理解と教育実践の課題」等を学ぶ。	
教育方法の研究（情報機器及び教材の活用を含む）	教育において、自ら学び、自ら考え、自ら決断し実行できる力を育成することが最も重要な教育目標となってきた。このような中で、これまで知識の教授に主眼をおいてきた教科指導から、自己学習能力を最大限に発揮させることのできる新しい学習指導への移行が模索されている。この講義では、伝統的な教育方法をふまえた上で、新たな視点から教科指導の方法、教育技術の開発、教育評価の問題について考えていく。	
生徒指導の研究	生徒指導は、児童・生徒の一人一人の個性の伸長や社会性を育てるうえできわめて重要な役割をもっていることを理解するとともに、積極的な生徒指導及び進路指導の観点から児童・生徒に対応する必要性について研究する。具体的には、「生徒指導の意義と課題」、「生徒指導の原理と理論」、「児童・生徒理解の進め方」、「学級（ホームルーム）経営の進め方」、「生徒指導と道徳教育」、「教科指導と生徒指導」等を学ぶ。	
特別活動の研究	『小学校・中学校学習指導要領解説〔特別活動〕編』（文部科学省）の内容を周知すること、特別活動の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「特別活動の目標・内容」、「学級活動の事例研究」、「学校行事の事例研究」、「模擬講話（個人発表）を通しての指導講話のあり方・話し方研究」、「学校行事「文化的行事」の実際（DVD）の検討」等を学ぶ。	
学校カウンセリング	今日、学校教育の現場では、不登校やいじめなどさまざまな問題が見受けられる。中学生・高校生の時期は青年期にあたり、その心理的特徴として、性差や個人差が目立つこと、アンバランスな心身の発達、抽象的な思考の発達により関心が自己の内面に向かうことなどをあげることができる。この講義では、ライフサイクル上、非常に不安定になりやすいこの時期の生徒を、私達はいかに理解し、また、その心理的問題に対して、どのように対応すれば良いかを考えたい。	
道徳教育の研究	『小学校・中学校学習指導要領解説〔道徳〕編』（文部科学省）の内容を周知することで、道徳教育の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「道徳教育の目標・内容」、「外国の道徳教育の現状」、「道徳の授業づくりと学習指導案の書き方」、「道徳授業（DVD）の参観と授業検討」、「道徳の模擬授業と授業分析」等を学ぶ。	

関連科目Ⅱ (C5)	介護等体験Ⅰ	小・中学校の教諭の普通免許状を取得希望する場合、特別支援学校（2日間）及び社会福祉施設（5日間）において7日間以上の介護等体験を行う必要がある。介護等体験は、様々な人と出会い、一人一人の生き方の多様性、重みを知るよい機会である。ここでの学びは、教育実習において、子ども達をみる目（理解）に生かされてくることを、十分自覚して取り組む必要がある。（34.松浦正博・38.桐木建始・46.戸田浩暢）	オムニバス
	介護等体験Ⅱ（事前・事後指導）	介護等体験に関して体験の意義や本質について考える。とくに、特別支援学校や社会福祉施設での具体的指導のあり方について特別支援学校の教師や社会福祉施設の指導員の方々の講話を聞くことにより体験の準備をする。事後指導においては、体験の内容についてグループで話しあうとともに、そのまとめを発表し体験の共有化をはかる。（34.松浦正博／2回）（38.桐木建始／2回）（46.戸田浩暢／2回）（特別講師4名／4回）	オムニバス
	教育実習Ⅰ	出身中学校・高等学校において1～2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職や教科に関する専門科目の知識・技術を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。	
	教育実習Ⅱ	出身中学校・高等学校において2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職や教科に関する専門科目の知識・技術を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。	
	教育実習Ⅲ（事前・事後指導）	本実習は教育実習前・後の指導を行う。実習の事前指導としては、実習の意義・目的を学ぶとともに実習中の授業への準備として、模擬授業を行う。また、現場の教師の講話を通して教育現場の実際について学ぶ。事後指導としては、実習を等して学びえたことをアンケート、集団討論、発表、個別面接により自覚的にとらえることとする。	